

# 神 棲

號 五 拾 第

會 窓 同 院 學 山 祖

# 聖訓

---

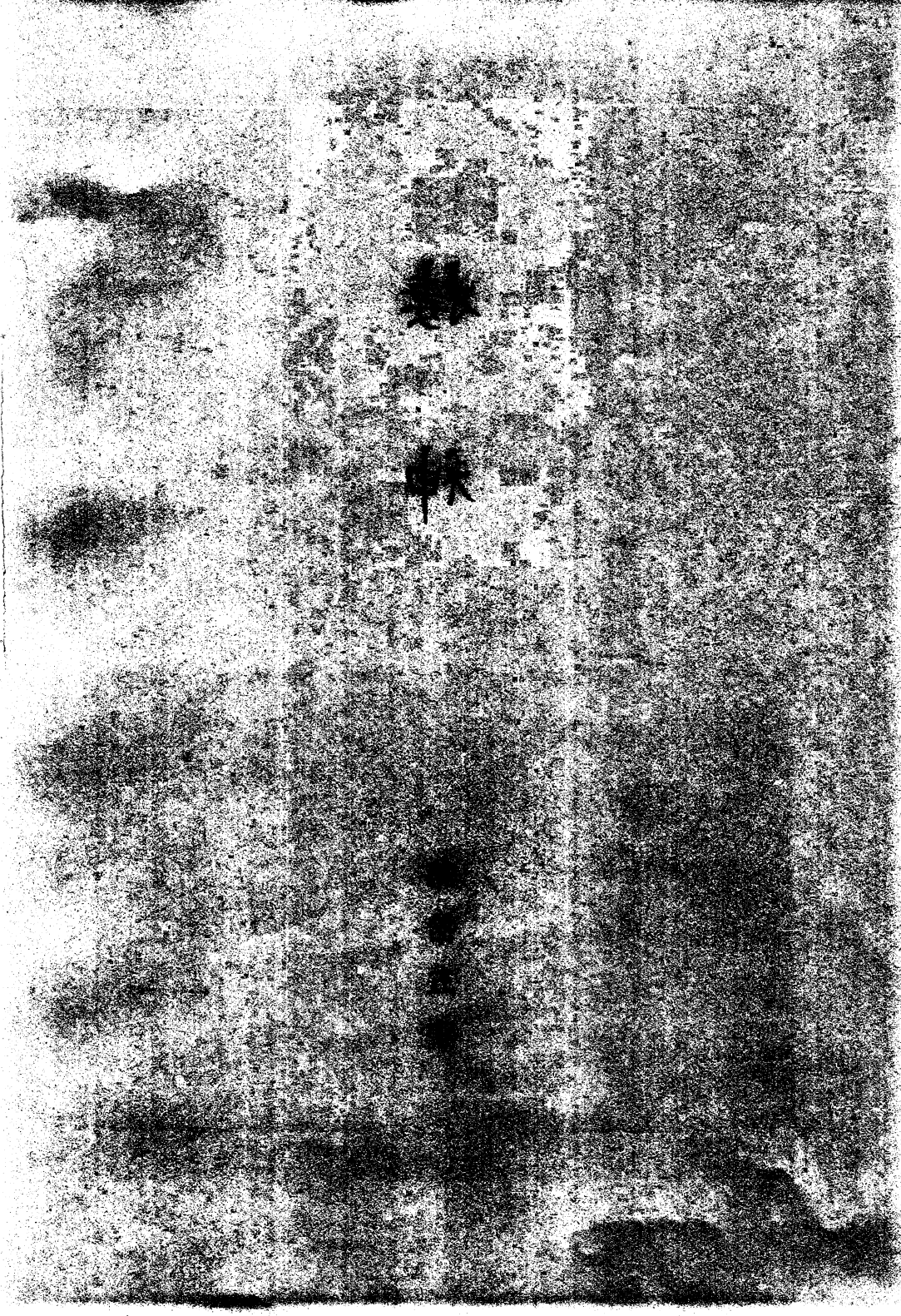
行學の二道をはげみ候べし、行學たえなば佛法はある  
べからず、我もいたし人をも教化候へ、行學は信心よ  
り起るべく候、力あらば一文一句なりごもかたらせ給  
ふべし、

(諸法實相鈔)

棲

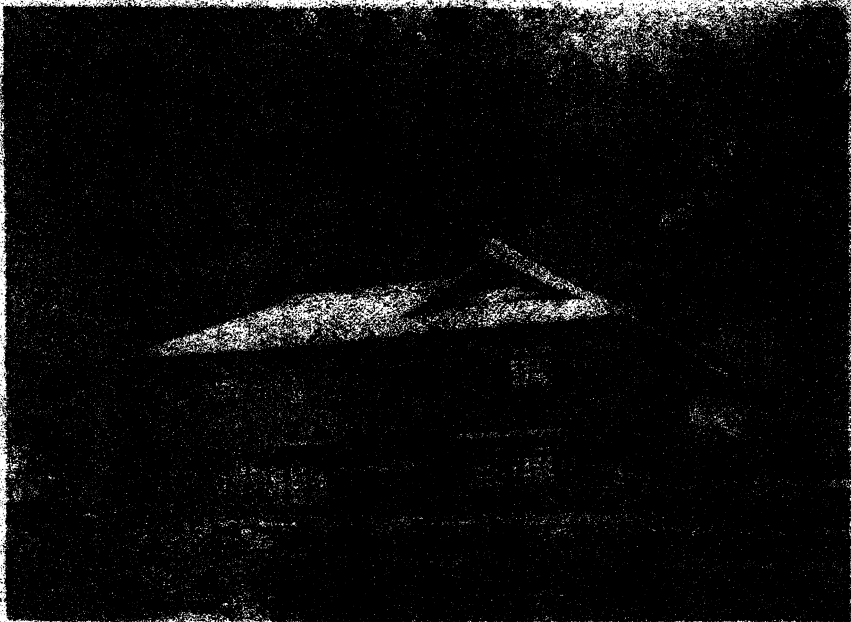
神

第  
拾  
五  
號





學 院 長 親 下 及 校 舍 之 一 部



一 游 介 合 不 了 証 法 到 畢

# 文 學 の 使 命

## — 卷 頭 言 —

吾々は文學を味つたり、學んだりすることに依つて、吾々の性行風格を修成し、各國の國民性を知り、遠く古人の肺腑に入つて、其の思想に遊ぶことも出来る。而し其の目的こゝにありとするものあらば、まことに以て卑下淺薄なることを悲しむものである。

文學は、今少しく吾々の日常生活の上に、影響を及ぼして居ることを知らなければならぬ。英國の文學者ベンネットは『文學研究は閑の時間を慰める爲ではない。それは快樂、同情、認識に對する、人間の職能を活潑ならしめる。それは一時間を感動させる爲ではなく、廿四時間を感動させる爲である』と云つて居る。

文學に盛られたる事物の心情は、他物を忖度する吾等の同情心に訴へ來て、悲哀なる物語、悲哀なる詩歌でさへも、吾等に快樂興味を與へんさするものである。

又文學は人間の心の微細なる影までも、捉へ來つて之を明示し、愛や、正義や、自由の美をも、眞に認識せしめるのである。そうして熱情的に、眞面目に、すべてにはげしさと、力強さを以て、吾等に迫り、吾々の心の奥底までも衝き動すのである。

而し文學はこれを以て、自らの理想を達し得たりとするものでなく、更に進んで、吾々を俗界の巷より脱し、超自然界に出入せしめんとするものである。喧々響々の俗界の汗を流し去り、想像の樂園に入らしめる所、こゝに眞の文學の使命があるのである。なからうか。

『羽蝶飛ばや、富士の裾野の小家より』

只これだけの句に、吾々の胸に瑤鏘の音は響き、春風駘蕩の光景が浮び出で、超自然界に遊びしめるではないか。かくしてこそ、吾々の日常生活は、初て眞善美化せらるゝのである。

目次

◇ 論 說

口 繪

卷 頭 言

信 心 銘……………高田惠忍 二

筒御器鈔の法門……………塩田義遜 一五

宗教に於ける超厭世的傾向……………永倉唯嘉 三四

座 右 之 銘……………竹庵遺稿 五九

艸 山 三 章……………艸山集 六〇



佛說法滅盡經讀後の感……………松木本興 六一

身延文庫藏本行學朝師奥書集……………江利山義顯 六九

原始佛教々團に於ける平等思想と其歸結……………結城瑞光 八四

生と哲學的精神……………望月舜勝 九五

重罪犯にて刑務所にある  
某眞宗徒に送れる手紙……………綱脇龍妙 一〇四

日持上人の遺跡を訪ねて……………望月是順 一二二

身延の實相……………渡邊正教 一二六

筆 心……………木村鍊戒 一二〇

現代社會の要求する人物……………方 哲源 一二六

虚空藏菩薩と蓮長法師の祈願……………武田快照 一三二  
 事一念三千が如何にして信心義なりや……………堀内義光 一四二  
 日精上人書簡類蒐集に就いて……………三木淨達 一四五

◇ 文 藝

友 情……………松田壽孝 一五〇  
 思親閣より秋をたづねて……………松井桓成 一五七  
 隨 感 片 々……………矢谷清文 一六一  
 日 記 中 よ り……………柳井 榮 一六五  
 野 中 春 秋……………遠藤霞外 一六七

雜 人 小 短 秋 短

生

巡

報

歌

.....岳

南 生

一六九

歌

.....石

井 綠 線

一七〇

鳥

.....中

澤 要 實

一七一

禮

.....近

藤 惠 聰

一七二

一七三

陳 海 賦 本 賦

海 賦 本 賦

小 說 一 編  
海 賦 本 賦  
海 賦 本 賦  
海 賦 本 賦  
海 賦 本 賦

論

說

# 信心銘

(傳大士の語をかりて)

高田惠忍

凡そ信心に四科ある事は綱要及本妙臨師等の述ぶる如くである。臨師曰く、「信心有四科、無疑一、隨順二、決定三、心清淨四」と是れ蓋し臨師は綱要刪略五卷第四十六信心兩字名義相性章にその源泉を汲んだのであらう。

今綱要に於ける右一章の要旨を撮つてこの記述を進めることにしやう。

一に信とは無疑を以て名とする。大寶積經百十八に曰く、「人佛道を慕つて猶豫を懷かざる、之を信根と名く」と文句九七十七に曰く、無疑を信と曰ひ、明了を解と曰ふ」と是れその名を釋せるものである。

二に信とは隨順を以て義とする。大乘寶要義論一八に曰く「信とは何の義ぞ、謂く隨順の義なり」大四教儀九六に曰く、「信心とは隨順を義となす」と、是れ信の義を釋せるものである。乃ち知ぬ、

信心は佛語に隨順するを以て義とすることを。

三に信とは決定を以て相とする。成實論七八に曰く、「決定は是れ信の相なり」唯識論六八に曰く「不疑は即ち正勝解なり」又全六十七に曰く、「疑は勝解を障ふ、決定せざるが故にと」今經神力品に曰く、決定無有疑と、蓋し疑あれば決せず、疑はざれば必ず決す、故に知ぬ、信心は即ち決定を以てその相とすることを。

四に信とは心清淨を性とす。唯識論六初に曰く、「云何なるを信と爲す、實德能に於て能く忍で樂欲す、心淨を性と爲す、不信を對治し、樂善を業と爲す、乃至此性澄清にして能く心等を淨む、心勝を以てす、故に心淨の名を立つ、水精の珠の能く濁水を清すが如し」筆削記一六八に曰く、「水精珠とは清水珠なり、謂く衆生の心は水の如く、疑は濁の如く信は珠の如し、珠を濁水に投ずれば水必ず澄徹す、信起れば疑止む、心必ず清淨なり」今經提婆品に云く、淨信心敬、不生疑惑者と、蓋し淨心は即ち信心、疑惑は不信なり、故に知ぬ信心は即ち清淨を以て其性とすることを。

以上信に於ける名義相性の説は綱要の綜概し、臨師の紹述せし所なるが、吾家の信心の意義を説明すべく右の四釋のみではなほ不足と思ふ。右四釋に於て信の平面描寫は出來た。靜的解釋は即ち足る。然し信の第一要義は絶對の人格者超人に對する我等人間の憧れであり、没入であり、一如であり融會

でなければならぬ。即ち平面描寫以上の立体的描寫、靜的解釋以上に動的、飛躍的解釋に進むに非ざれば未だしと想ふ。是に於て佛界か九界に働きかけ九界か佛界に働きかける感應の一項目を加へたいと想ふ。是蓋し十界事常住觀のみ。そこで私は、

五に信とは感應を体とするの一條を加ふるものである。玄義感應妙の下節要上三十三紙に云く、「水上り升らず、月下り降らず、一月一時に普く衆水に現ず、諸佛も來らず、衆生も往かず、慈善根の力の如き事を見せしむ、故に感應妙と名く。」今經壽量品に「毎に自らは念を作す、何を以てか衆生をして無上道に入り、速に佛身を成就することを得せしめん」とは無始佛界の無始九界に働きかける應の方面であり、全く壽量品に「一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜まず」とは、無始九界の無始佛界に働きかける感の方面である。かくて本佛の大慈悲と我等の感激と感應冥合して、茲に九界が佛界か、佛界が九界かを辯じ難き程に彼と此と溶融し、一如し、同化し、融會する、それが信の眞髓であらねばならぬ。祖文に於ては、私は本尊鈔の「釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等此五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り與へ給ふ」の文は宗教信の第五感應を体とする事を示すものといふべきである。その受持とは受は信に入れるの謂ひ、持は信の持續の謂ひ、即ち受持とは本佛の慈悲に感激する感の方面、自然讓與とは本佛大慈悲の應の方面であると想



ふ。南無妙法蓮華經の南無は九界が佛界に働きかける感の方面、妙法蓮華經は佛界が九界に働きかける應の方面と見るべきで、感應とは十界事常住が一時一處にあるの謂ひのみ。水上より升らず月下り降らず而も感應冥合するの謂ひのみ。

以上名義相性は信の平面的、靜的方面、その体は信の立体的飛躍的方面である。次に右を祖文の文獻に徴することにしやう。

信の平面的方面の文献としては次の數文を擧げやう。

御義口傳に云く、「信は無疑曰信にて、疑惑を斷破する利劍なり」(上二八右) 又全書に云く、「修行とは無疑曰信の信心の事なり」(下十八右)

題目抄に云く、「夫れ佛道に入る根本は信を以て本と爲す、五十二位の中には十信を本と爲し、十信の位には信心初め也、設ひ悟りなくとも信心あらん者は鈍根も正見也」(縮遺五八四)

日女抄に云く、「所詮天台妙樂の釋分明に信を以て本とせり、彼の漢王も疑はずして大臣の語を信ぜしかは立波こほり行ぞかし。石に矢のたつ是又父のかたきと思ふ至信の故也、何に況んや佛法に在いてをや。法華經を受持ちて南無妙法蓮華經と唱ふる。即五種の修行を具足するなり。」(縮遺二六二七)

祈禱經送狀に云く、「其に付ても法華經の行者は信心に退轉なく一身に詐親なく一切法華經に其の

身を任せ金言の如く修行せば、慥に後生は申すに及ばず、今生も息災延命にして勝妙の大果報を得、廣宣流布の大願をも成就すべき也。」(縮遺九一五)

持法華問答鈔に云く、「暮れ行く空の雲の色有明方の月の光までも心をもよほす思ひなり。事にふれおりに付ても後世を心につけ、花の春雪の朝も是を思ひ、風さはぎ村雲まよふ夕にも忘るる隙なかれ、出る息は入る息をまたず、何なる時節ありてか毎自作是念の悲願を忘れ、何なる月日ありてか無一不成佛の御經を持たざらん。」(縮遺四七四)

當体義抄に云く、「日蓮が一門は正直に權教の邪法邪師の邪義を捨て、正直に正法正師の正義を信するが故に、當体蓮華を證得して常寂光當体の妙理を顯はす事は、本門壽量の教主の金言を信じて南無妙法蓮華經と唱ふるが故なり。」(縮遺九九九)

開目抄に云く、「釋迦諸佛の衆生無邊の總願は皆此の經にをいて満足す、今者已満足の文これなり。」(縮遺七九四)

上野抄に云く、「抑今の法華經を信する人、或は火の如く信する人もあり、或は水の如く信する人もあり、火の如く申すは聽聞する時は熾立つ計り思へ共遠ざかりぬれば捨る心あり。水の如くと申すはいつもたえず信する也、此はいかなる時も常に退せず問はせ給へば、水の如く信じさせ給へる

歟、尊とし／＼。」(縮遺二七一〇)

佐渡御書に云く、「心は法華經を信ずる故に梵天帝釋をも猶恐ろしと思はず。」(縮遺八三〇)

波木井抄に云く、「此法華經は三途の河にては船となり、死出の山にては大白牛車となり、冥途にては燈となり、靈山に參る橋也。靈山へましまして良の廊にて尋させ給へ、必ず待ち奉るべく候、但し各の信心に依べく候。信心弱くば、いかに日蓮が弟子檀那と名乗らせ給ふとも、よも御用ゐは候はじ。心に二つましまして信心弱く候はゞ、峰の石の谷へころび、空の雨の大地へ落ると思食せ、大阿鼻地獄疑あるべからず、其時日蓮を恨みさせ給ふな、返す／＼も各の信心に依るべく候。」(縮遺二二一四)

上野抄に云く、「今末法に入ぬれば餘經も法華經も詮なし、但南無妙法蓮華經なるべし。かう申し出して候も私の計ひにはあらず、釋迦多寶十方の諸佛地涌千界の御計ひ也、此南無妙法蓮華經に餘事をまじへばゆるしき僻事也。」(縮遺二七二七)

開目鈔に曰く、「多生曠劫にしたしみし妻子には心とはなれしか佛道のためにはなれしか、いつも同じわかれなるべし。我れ法華經の信心をやぶらずして靈山にまいりて還つてみちびけかし。」(縮遺八二〇)

血脈鈔に曰く、「大信力を出して南無妙法蓮華經臨終正念と祈念し給へ。」（縮遺七四四）

乙御前御書に曰く、「妙樂大師のたまはく、必ず心の固きに假りて神の守り則ち強し等云々人の心かたければ神の守り必ずつよしこそ候へ、是は御ために申し候ぞ。古への御志申す計りなし、其よりも今一重強盛に御志あるべし。」（縮遺二二九二）

若し夫れ信心の立体的、飛躍的方面の文献としては次の數文を擧げやう。

松野殿女房御返事に云く、「法華經を持つ女人は澄める水の如し釋迦佛の月宿らせ給ふ。譬へは女人の懷み始めたつには吾身には覺えねとも、月漸く重なり日も屢過くれば初めにはさかと疑ひ後には一定と思ふ。……法華經の法門も亦かくの如し。南無妙法蓮華經と心に信じぬれば心を宿として釋迦佛懷まれ給ふ。始めはしらねども漸月重さなれば心の佛夢に見え悦ばしき心漸く出來し候べし。」

（縮遺一九七九）

眞言諸宗違目に云く、「日蓮流罪に當れば教主釋尊衣を以て之を覆ひ給はん歟。去年九月十二日の夜中には虎口を脱れたる歟。必ず心の固きに假て神の守り則ち強し等とは是なり。汝等努々疑ふことなけれ。」（縮遺八五八）

守護國家論に云く、「當に知るべし是人は則ち釋迦牟尼佛を見るなり、佛口より此經典を聞くが如

し、當に知るべし、是人は釋迦牟尼佛を供養するなり已上此文を見るに法華經は釋迦牟尼佛なり、法華經を信ぜざる人の前には釋迦牟尼佛入滅を取り、此經を信ずる者の前には滅后たりと雖も佛在世なり。〔縮遺二五八〕

妙一尼御前御返事に云く、「夫れ信心と申すは別にはこれなく候。妻のをとこをおしむが如く、をとこの妻に命をすつるが如く、親の子をすてざるが如く、子の母にはなれざるがごとくに、法華經釋迦多寶十方の諸佛菩薩諸天善神等に信を入れ奉りて、南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを信心とは申候也。しかのみならず正直捨方便、不受餘經一偈の經文を女の鏡をすてざるがごとく、男の刀をさがが如く、すこしもすつる心なく案し給ふべく候。」〔縮遺一九四八〕

上野殿御返事に云く、「かつへて食をねがひ、渴して水をしたふが如く、戀ひて人を見たきがごとく、病にくすりをたのむがごとく、みめかたちよき人べにしろいものをつくるが如く法華經には信心をいたさせ給へ。さなくしては後悔あるべし。」〔縮遺一八四四〕

彌三郎殿御返事に云く、「人身は受け難く法華經は信じ難しとは是也、釋迦多寶十方の佛、來集して我身に入かはり、我を助け給ふと觀念せさせ給べし。」〔縮遺一六二四〕

最蓮房御返事に云く、「されば我等が居住して一乘を修行せん處は何れの處にても候へ常寂光の都

なるべし。我等が弟子檀那ならん人は一步を行かずして天竺の靈山を見、本有の寂光土へ晝夜に往復し給ふ事うれしとも申すばかり無し。」(縮遺八四二)

持法華問答抄に云く、「唯我一人能爲救護の佛の御力を疑ひ、以信得入の法華經の教の網をあやぶみて決定無有疑の妙法を唱へ奉らざらんは力及ばず、菩提の岸に登る事難かるべし、不信の者は墮在泥梨の根元なり。」(縮遺四七二)

乙御前御消息に云く、「くまらへん三藏と申せし人をば木像の釋迦をわせ給ひて候しぞかし。日蓮が頭には大覺世尊かはらせ給ひぬ。」(縮遺二九三)

觀心本尊鈔に云く、「釋尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我等この五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り與へ給ふ。」(縮遺九三八)

授職灌頂口傳鈔に云く、「飢時の飲食、寒時の衣服、熱時の冷風、昏時の睡眠、皆是れ本有無作無縁の慈悲にして利益にあらざることなし。」(縮遺一〇二九)

御義口傳に云く、「今日蓮等の類ひ南無妙法蓮華經と唱へ奉る者は與如來共宿の者なり。傳大士の釋に云く、朝々佛と共に起き、夕々佛と共に臥し、時々成道し、時々顯本すと。」(上四一紙右)

以上の文献中、平面的方面は無疑を信の名とし、隨順を信の義とし、決定を信の相とし、心清淨を

信の性となすを一括せるものである。その立体的、飛躍的方面とは信の究竟たる感應をその体とすることを證するものに外ならぬ。

さて是の如き信が三大秘法中如何なる位地を占むるや、是れその最も緊要問題である。三大秘法たる、綱要師が刪略卷七第六十三本門戒壇建立俟時章中その三秘詮顯の次第を述べて「題目は通じて順逆に被る故に建長に肇る、本尊は正しく信者の爲めにす、故に佐州に現はる、戒壇は統一の時を期す。」(縮冊四七九)と、是れ蓋し自ら佐前は一大秘法、佐後は三大秘法を説くものであつて、その卷五第四十四成佛依信不依智解章(縮冊二八六)の「日本國の逆縁の爲めには因謗墮惡の下種益を得せしめ、我門弟の順縁の爲めには受持成佛の熟脱益を獲せしむ」等を結ひ付けて考ふるに一大秘法は逆縁の爲めに三秘を内含せしめて逆縁に與ふるものであり、三秘は一大秘法を開いて順縁に與ふるもの、然して一即三、三即一でその法体に變りはない。その詮顯の次第は一大秘法の題目、次に三大秘法、又三大秘法の中に本門の題目はその詮顯佐前より佐後に通じ、本門の本尊はその詮顯在佐より佐後に通じ、本門の戒壇は獨り未來閻浮統一、四海歸妙の曉を期すといふにある。右は三秘詮顯の次第のみ。

その修行の次第に至りては、戒壇を妙戒と壇とに別ち、壇に於て理壇事壇を別つ時、事壇は閻浮統一の遠き未來を期するのであるが、理壇は最蓮房御返事の「結句は卯月八日夜半寅の時に妙法の本門

戒を以て受職灌頂せしむるもの也。此受職を得る人争か現在なりとも妙覺の佛を成ぜざらん。」(縮遺八四〇)とあるより見る、受戒を得る所が理壇である。受持の信を得る所が又そのまゝ理壇である。寶塔偈此經難持の文に依るに、題目の受持それが是名持戒なりとある。總勘文鈔の「名字即の位より即身成佛す」(縮遺一九〇三)といひ、日向記の「本因本果の成道」(日向記五左)といふ、何れも受持の信の當處即極の謂である。従て受持の信がそのまゝ持戒で、それに依て名字の當處に妙覺を極むるのでそれが實にそのまゝ理壇の顯現といふものである。して見ると題目の受持信念の確立、それが本因戒の持戒といふことである。

然り而して十重禁戒を明してある本門戒体鈔一編の要旨及び教行證鈔の「此法華經の本門の肝心、無妙法蓮華經は三世の諸佛の萬行萬善の功德を集めて五字と爲す、此五字の内に豈萬戒の功德を納めざらん乎、但此具足の妙戒は一度持ち、後は行者破んと欲れとも破れず、是を金剛寶器戒と申す云云」(縮遺二二三四)に依る、題目が戒の總戒で、この中に本門の十重禁戒が納るのであり又従て五戒、八戒、十戒、具足戒等の萬戒が従ふのである。即ち知る題目の受持信念それが金剛寶器戒の總戒であつて、題目の受持信念より外に吾家の持戒はない、従て一得永不失の戒体發得とは確たる題目の受持信念の確立に外ならず、題目の受持信念の確たる確立それが戒体の發得であり、金剛寶器戒の金剛寶器戒た



る所であり、又そのまゝ本因本果の成道であり、名字即の位より即身成佛以て妙覺を極むるものであり、又實に理境の顯現のみ。

茲に於て本門の円戒は當家信念の確立であり、本門の本尊は十界事常住の表象即ち本佛は毎自悲願の大慈悲に燃え、九界は一心欲見佛の感激に燃えて九一の自覺に基く感應冥合の姿であり、本門の題目はかゝる十界事常住事一念三千觀を五字に打込みたる題目の受持信念の謂である。戒以て十界事常住の信念を身業に堅め、定以てその信念を意業に定め、慧以てその信念を口業に發唱咏歎するもの、それか修行の場合の本門の戒定慧即ち本門戒壇、本門本尊、本門題目の次第である。

畢竟するに三秘を修行に約する時、本円戒と受持の題目と、元と戒唱一致であつて、円戒と題目と元々別物ではなく、唱題かそのまゝ円戒であり、円戒かそのまゝ題目の受持信念であるこの戒唱一致の受持信念を主觀法として客觀の本尊に對するのみ。然して受持信念とは十界事常住の感應の自覺のみ。然り而して本尊は實にその十界事常住の感應を對象として圖顯せしのみ。

以上信心の名義相性体を述べ併せて信心と三秘との關係に及びたるのみ。本門円戒と本門題目の關係は別に戒唱一致論に於て近く自家管見の細釋を試むる豫定なるを告白す。

維昭和四年十月十三日第六百四十八回會式を寺房に修行せしその日の夜半之を認め了つた。そして棲神の編輯に

信心銘

熱心從事せる學子近藤惠聰君の机右に送るものである。時に時針は深更正に十二時を示してゐた。

# 筒御器鈔の法門

附、謀叛者二十六人に就て

鹽田義遜

## 一、器の四失

筒御器鈔の法門は秋元殿への法門であるが、就中、器の四失と信心。日本國謀叛の二十六人。諸宗の批判（四個格言の具文一九三二）。承久の亂の批判等實に廣汎に亘つて居る。今其中『器の四失』に寄せられた、法華經の信心入り難き所以を拜するに

御器と申すは『うつはもの』と讀み候……………器は我等が身心を表す。

とある如く、我等の身心はこれ法の器である。然るに濁水が月を浮べて澄むことは、甚だ稀である様に、法華經の信心は我等の身心に入り難いのは、器に完器がないと同じである。

即ち器に四の失あり。

- 一には「覆」と申して、「うつむける」なり。又は「くつがへす」。又は「蓋をおほふ」なり。
- 二には「漏」と申して「水もる」なり。
- 三には「汗」と申して「けかれたる」なり。水淨けれども糞の入りたる水は用ゆる事なし。
- 四には「雜」なり。飯に或は糞、或は石、或は土などを雜へぬれば人食ふ事なし。

こいふ所謂「覆」「漏」「汗」「雜」の四失であるが、これは天台大師が、法華經の序品の四衆即ち、發起（説法の發起人）、影響（佛陀の隨侍の菩薩）、當機（當面の聽衆）、結縁（未來得脱の縁を結ぶ大衆）の四衆の中、最後の結縁衆を釋して、

結縁とは、過去の根淺く、覆漏汗雜し、三慧を生ぜず。但だ未來得度の因縁を作す、（文句五、三九 取意）

の文に依て、結縁の意を信心の意に隨義轉用して法華の信心を釋されたのである。大師の意に依れば、「覆漏汗雜し三慧を生ぜず」とある故に、妙樂大師は右の文を釋して

聞慧無きが故に、器の現の覆るが如く。思慧を闕ぐが故に、器の已に漏るか如く。修慧無きが故に、器の汗雜せるが如し。器仰て全しと雖、汗雜を以ての故に、用ゐる者の爲めに棄てらるが如し。故に總結して三慧を生ぜすと云ふ。（記五、四〇）

といへる如く、覆漏汗雜の四失は聞、思、修の三慧に對すれば、覆を聞慧即ち聞法に依て生ずる智慧に配し。漏を思慧即ち法の中に含まれた理を思索して生ずる智慧に配し。汗雜の二を合して修慧、即ち觀念修行に依て生ずる智慧に配して居る。要するに煩惱の覆、業の漏、苦の汗雜の三道に依て支へらるゝに依て、三慧を生ずることが出來ず、隨つて三徳秘密藏の涅槃に住することが出來ぬといふのである。即ち結縁の衆は過去の善根淺い故に、三道の障礙あつて、現座に益を得ず、未來得脱の因縁を結ぶに當るといふのである。

## 二、四失と三失

大聖人は右の意に依て、法華の信心を釋した故に、器の四失といはれて、前掲の如く四に分つて居られるが、正しく法華の難信を宜べられては、先づ總じて器に就て

器は我等の身心を表す。我等が心は器の如し(意業)、口は器(口業)、耳も器なり(身業)。

と三業に約して、我等が身口意の三業は孰れも器である。然るに此の器に信心の入り難きを述ぶるに當つて、

法華經と申すは、佛の智慧の法水(信心)を、我等が心に入れぬれば、或は打ち返し(意業)。或は耳

に聞かじと左右の手を二つの耳に覆ひ(身業)。或は口に唱へじと吐き出しぬ(口業)。譬へば器を覆するが如し。

こはこれ三業に約して、覆の失に寄せて法華の難信を述べたので、即ち覆せた器に水の容れられぬと同様である。次に

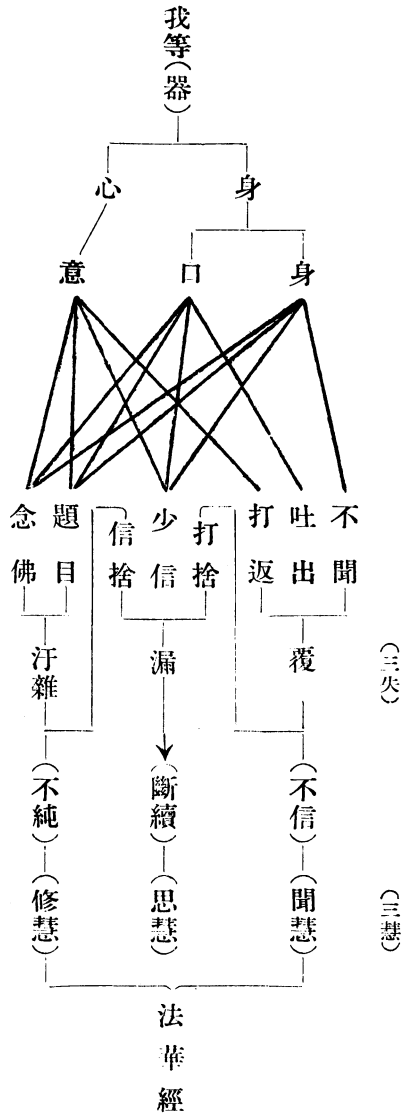
或は少し信する様なれども、又惡縁に値ふて信心うすくなり。或は打ち捨て、或は信する日もあれども、捨つる月もあり。是は水の漏る如し。

とは漏の失に寄せて信心の退轉を述べたもので、恰も漏る器に水を容るゝが如く、何時迄たつても水の溜ることがないと同様で、信心に斷續ある故に容易に信心決定せぬのである。更に

或は法華經を行ずる人の、一口は南無妙法蓮華經。一口は南無阿彌陀佛などと申すは、飯に糞を雜へ、沙石を入れたるが如し。

とは『雜』をいつて汗をいはぬが、これ恐らく妙樂の意に依て『汗雜』に寄せて、信心の不純を述べたものである。己に糞の喩を以て釋した様に、『けがれ』といひ『まじる』といひ、共に純淨ならざる意で、題目と念佛とを混合したのでは、信心が純淨でない故に、何時になつても信心の決定しやう筈はない。

斯の如く大聖人の釋は、初には器の四失を擧げられながらも、後には天台が三慧生せずといはれた如く、覆と漏と(汗)雜とを次の如く、三業の不信受と、斷續の信心と、雜染の修行と三段に就て述べられて居る。即ち今の意を圖表すれば



左の如く、三失は一漏の三方面とも見られる。即ち『惡縁のために打捨て』たるは覆の失に當り、『或は信じ或は捨つる』は雜の失に當り、猶豫して信心に斷續あるは信心淺薄なるかためである。

### 三、三心と三失

右の三失に就て曾て（教報一月號）望月學兄は、法華の三心（所謂渴仰心、質直心、一心）と今の四失との關係を述べて、

覆は不渴仰心。汗は不質直心。雜は不純心。漏は三心の過失に通ずる。義と拜すべきである。『秋元鈔』の四心は要するに、三心の過失を示された教誡である。

と述べられて居るが、漏が三心に通ずることは今の四失の結文に、  
 覆、漏、汗、雜の四の失を離れて候、器をば、完器と申してまつたき器也。暫提漏らざれば水失へ  
 る事なし。信心のこゝろ全ければ、平等大慧の智水乾く事なし。

といふ文に就て見れば、三失に通ずる意である。併し『秋元鈔』の正しく四失を法譬合して説いた文には、覆、漏、雜丈けで汗の釋は見當らぬ、これは恰も妙樂が四失の中、汗雜を合して一となして、四失は三慧に對して三失とせられた如く、『秋元鈔』の中間釋は正しく三失である、この点は三祖同一徹である。併し乍ら結文の釋や、望月兄の如く四失中覆、汗、雜を所謂法華の三失に合し、或は結文の意に依て漏を三失に通ずとしても、孰れにしても四失は三失となるのである。斯の如く説明上多



少の相違はあつたにしても、畢竟同一結論には落ちつくことにはなるが、覆漏雑を三失とすることは、三祖一徹である。法華の三心とは、これ恐らく淨土觀經の三心に暗示を得て、學兄が自我偈の佛陀の入滅に對する、衆生の切なる情を頌した

咸皆懷戀慕、而生渴仰心、衆生既信伏、  
質直意柔軟、一心欲見佛、不自惜身命、

の文に依て法華の信心の内容を三分したもので、『提婆品』の『淨心信敬、不生疑惑』の文も同意である。而して若し最後の一心は『神力品』の結文の『決定無有疑』の文に依れば、又決定心と云つた方が適當であらう。要するに三失は三心に反するもので、



第二の淨心質直心に對すれば汗が適當である。孰れにしても隨義轉用で、要は法華の信心に就て、我等を誡められたに飯するのである。

#### 四、題目と餘行

『秋元鈔』には上述の如く、信心の三失を述べられたが、就中最後の決定心に對する、雜の点にその中心を置かれたのである。これいふ迄もないことで、決定は最後の決定であるからである。即ち雜の大意を述べた後に

法華經の文に『但だ大乘の經典を受持することを樂つて、余經の一偈をも受けず』と説くは是也、と餘經餘行を全部を遮し、更に世間の隨義の解釋に對して

世間の學匠は法華經に餘行を雜へても、苦しからずと思へり。日蓮もさこそは思ひ候へども經文はしからず。譬へば後の大王の種子を妊めるが、又民ごごつげば王種と民種と雜りて、天の加護と民神の守護とに捨てられ、其國破るゝ縁となる。父二人出來れば、王にもあらず、民にもあらず人非人也。法華經の大事と申すは是也。種熟脱の法門法華經の肝心也。

と述べられたことは、『上野殿御返事』に

今末法に入りぬれば、余經も法華經も詮なし、但南無妙法蓮華經なるべし。此南無妙法蓮華經に餘事をまじへば、ゆゝしき僻事なり。嬰兒に乳より外のものをやしなふべき歟。良藥に又藥を加へぬ

事なし。(二七二七)

といへる文に對照して、今の雜の失を知るべきである。即ち雜は決定心に反するからである。故に妙法五字に約して法華の下種を判じて

三世十方の佛は必ず、妙法蓮華經の五字を種として佛に成り給へり。南無阿彌陀佛は佛種にはあらず。眞言の五戒等も種あらず、能々此事を習ひ給ふべし、是は雜なり。

と雜の意を決し、最後『信心のこゝろ全ければ、平等大慧の智水乾くことなし』と、妙法の下種は謗法の四失即ち三失を離るることに依て成熟し、終に佛果を決定すべきことを述べられたのである。

若しそれ法華の三心を御遺文中に求むれば、『妙一尼御前御返事』(一九四八)に『妻のおとこをおしむが如く、親の子を捨てざるが如く』とは渴仰心。『法華經釋迦多寶等を信じて南無妙法蓮華經と唱ふる』とは質直心、『不受餘經一偈の經文を、少しも捨つることなき』とは決定心を釋されたのである。若しこれを信の淺深に就て、見るならば、信受。深信。決定信の三信と見るべく、更にこれを又信行の上から見るならば、信受は信前行後であり、信は信行俱時であり、決定信は行前信後といふべきである。即ち信の三失に對して、今の三信を以て信の三徳と稱すべきである。

## 附、謀叛の二十六人

### 一、大石山(小)丸は誤

尙ほ『筒御器鈔』に於て注意すべきは、我國謀叛の二十六人の中第二人に就てある。即ち

日本國に代始まりてより、已に謀叛の者二十六人。第一は大山の王子、第二は大石の山丸乃至第二十五人は頼朝、第二十六人は義時也。(一九三〇)

といひ。『新池殿御返事』には

我朝人王九十一代の間に、謀叛の人々は二十六人也。所謂大山の王子、大石の小丸乃至將門、純友、惡左府等也、(二八四八)

といへるを見るに、前者には『大石の山丸』といひ、後者には『大山の小丸』といふ。右に就て『啓蒙』師は

大石山丸が事は日本紀等にも無之、本據知れざれば、山丸小丸の是非を糺すに及ばず。(二九五)

(三五四九)

といつて本據不明として居るが、若し『聖典大辞林』(六三三)は、山と小と誤讀され易き、『法門可申鈔』の御眞蹟を出し。『類纂本』は『源平盛衰記』等に準じて『新池殿御返事』の如く『大石小丸』として居る。

然るに右に就ては昨年の春、大阪の岡嶋伊八氏より、大石の山丸は、文石あやしの小丸の誤で、右は『日本書紀』並に『國史略』共に雄略帝十三年の條に依て明瞭となつたが、『日本書紀』十四三二の文に依れば

雄略天皇十三年、秋八月播磨國御井隈人、文石小磨有レ力強心肆ニ行暴虐。路中抄劫、不レ便通行。又斷ニ商客船、悉以奪取、兼違ニ國法、不レ輸租賦。於是天皇遣ニ春日小野臣大樹、領ニ敢死士一百、並持ニ火炬圍宅而燒。時自ニ火炎中、自狗暴出逐ニ大樹臣、其大如馬。大樹臣神色不レ變、拔刀斬之、即化爲ニ文石小磨。

とあり、『國史略』一二九『文石小丸』に作り。『扶桑略記』は『大石少磨』に作り。『平家物語』五『朝敵ぞろへの事』の下又『大石の山丸』に作り。『源平盛衰記』十七の『謀叛不レ逐ニ素懷ニ事』の下亦『大石山丸』に作る。これ古來轉寫の誤で、文と大と誤り、小と山と誤りて、遂に文石の小丸(磨)を、大石山丸と書するに至つたものである。

## 二、三書 の 列 名

若し謀叛の二十六人に就ては、大聖人果して何に依られたか不明であるが、『和語式』三には『平家物語』を引き。『啓蒙』二九五〇には『平家物語』『源平盛衰記』『太平記』の三書を引用して居るが、右三書の記事は孰れか本になつたので、粗ぼ同一の形式で記されて居る。芳賀博士の如きは『平家物語』に就て『書中の史實より推して、此物語が今日の形を取るに至りしは、略御深草天皇の建長十二年の頃なり』といひ。『盛衰記』に就ては『平家物語と前後は明かならず』(國文學歴代選備考)といふが、今『平家物語』五の『朝敵ぞろへの事』の下、『盛衰記』十七の『謀叛不逐素懷事』の下並に『太平記』十六『日本朝敵事』の下に列擧する人名を見るに、

(太平記)

(一)土蜘蛛。

(二)藤原千方。

(三)平將門。

(四)大石山丸。

(源平盛衰記)

(一)

(平家物語)

(一)

(六)

(二)

- (五) 大山王子。(大山守皇子 應神帝第二子)
- (六) 大友真鳥(まてふ)(大友皇子 弘文天皇)
- (七) 守屋大臣(物部弓削守屋)
- (八) 蘇我入鹿
- (九) 豐浦大臣(蘇我蝦夷)
- (一〇) 山田石川(蘇我倉山田石川麿)
- (一一) 長屋右大臣(長屋王 天武帝孫)
- (一二) 豐成右大臣(藤原豐成)
- (一三) 伊豫親王(桓武帝皇子)
- (一四) 氷上川繼(ひのへ)(天武帝四代孫)
- (一五) 橘純女?(逸勢の誤?)
- (一六) 文屋宮田(藤原田磨)
- (一七) 惠美押勝(藤原仲麿)
- (一八) 井上皇后(聖武帝女 光仁帝后)

筒御器鈔の法門

- (二) (七) (六) (五)
- (三) (五) (四) (七) (三)
- (六) (六) (三) (二)
- (八) (三) (五) (六)

橘逸勢(はよなり)  
(元) 廣嗣弟なり、啓蒙に兄といふは誤なり。

- (三) (二) (八) (九) (三) (四)
- (四) (六) (五) (七) (三)

二七

全一四 全一二

啓蒙二二

○九 早良太子さばら（光仁皇子  
崇明天皇）

△三〇 大友皇子（第六重複）

三〇 藤原仲成

△三二 相馬將門（第三重複）

三三 天慶純友（藤原）

三四 康和義親（源）

三五 宇治悪左府（藤原頼長）

三六 六條判官爲義（源）

三七 悪左衛門督信頼（藤原）

三八 安倍貞任

三九 全 宗任

四〇 清原武衡

四一 全 家衡

四二 平相國清盛

(三)(三)(二)(七) (六)(二)(四)(九)(三) (三)

(三)(元)(三) (三)(三)(元)(七)(六) (三)

全一九 全一八 全二二 全二一 全二〇 全一七 全一六 全一五 全一三



(三) 木曾冠者義仲

(四) 河佐原八郎爲頼

(五) 北條高時

(六) 足利尊氏

○(八) 眞如親王 (平城帝第二子  
高丘親王)

(一九) 太宰少貳藤原廣嗣 (一五)

(二八) 源頼朝? (二四)

○ 皇 族、 △ 重 複 ( ) 太平記不載、

今三書の列名に就て見るに、『平家』『盛衰記』は土蜘蛛より悪左衛門督に至るまで、前者は二十三人、後者は三十七人である。然るに『平家』には頼朝に就て、

然るに其恩を忘れて、當家に向ひて弓をひき、矢を放つにてぞあんなれ。其儀爲らば神明も三寶も、いかでか赦し給ふべき。唯今天の譴蒙らんずる頼朝かな……(盛衰記同一記事)

とあるに依て、且らく頼朝を二書の列名に加へれば、二十四人、二十八人となるのである。而して二書の相違は『盛衰記』が、(五)の長屋王、(六)の豊成と、(八)の直如親王、(二三)の清原武衡との四人を加へたからである。

若し『太平記』と『盛衰記』との相違は、『太平記』の列名三十五人と、當の朝敵たる足利尊氏を加へて三十六人とするが此の中には(三)の平將門と(三〇)の大友皇子とは、重複する故に之を除いて、

計三十四人である。而して『盛衰記』と數に依ては六人の相違であるが、人には十二人の相違があるのである。即ち『盛衰記』には『太平記』に擧げぬ、(八)の直如親王、(二九)の藤原廣嗣、(三六)の源賴朝の三名を擧げて居るし。又『太平記』には『盛衰記』に見えない。(二)の藤原千方 (九)の豊浦大臣、(三六)の源爲義 (三三)の清原家衡、(三三)平清盛、(三三)の木曾義仲、(三四)の源爲賴、(三五)の北條高時 (三六)の足利尊氏の九人を出して居るからである。故に三書通じて謀叛人として、都合三十九人となるのである。

### 三、二十六人に就て

然るに大聖人は『荷御器鈔』には、「日本國に代始まりてより、己に謀叛の者二十六人」一九三二と遊ばさるゝ故に、三書の人數に比して十三人の相違がある。併し『神國王書』に依れば

神と申すは又國國の國主等の崩去し給へるを、生身のごとくあがめ給ふ。此小國王國人のための父母也。主君也。師匠也。片時もそむかば國安穩なるべからず。此を崇むれば國は三災を消し、七難を拂ひ、人は病なく長壽を持ち。後生には人天と三乘と佛となり給ふべし。……王威を用ひて民をせめば、鷹の雉をとり、猫のねづみを食ひ、蛇のかへるをのみ、獅子王の兔を殺すにてこそある

べけれ。……王法の力に大法を行ひ合せて、頼朝と義時との本命と元神とをば、梵王と帝釋等に抜き取らせ給ふ。一三五三—五六

と宣ふを始めとして、承久の亂等に對する大聖人の尊王論よりして、所謂『謀叛の二十六人』の中へは、恐らく皇族關係の方々を加へられなかつたのではなからうか。然るに『筒御器鈔』の先の連文には謀叛の者二十六人、第一は大山の王子。第二は大石の山丸、乃至第二十五人は頼朝、第二十六人は義時也。二十四人は奉<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>責<sub>レ</sub>朝、獄門に被<sub>レ</sub>懸<sub>レ</sub>首山野に曝<sub>レ</sub>骸。二人は奉<sub>レ</sub>傾<sub>三</sub>王位<sub>一</sub>國中を拳<sub>レ</sub>手、王法既に盡きぬ。一九三二

と記された点からすれば、三書に見ゆる(一)の土蜘蛛は除かれたが、第一を大山の王子として、應神帝の第二皇子を出された点から見れば、必ずしも皇族關係を除かれたのでもない様である。

されば『啓蒙』一九には上掲の三書と大聖人の二十六人を會して『平家』の二十四人の中頼朝を除き、事件の内容からして、(八)の文屋宮田と(二五)の藤原廣嗣(即ち宮田鷹は廣嗣の第三弟である)とを合して一となし

已上廿二人也。太平記には豊浦大臣と、左大臣長屋王と、右大臣豊成とを加へ。更に爲義清盛 義仲をも列ねたれば、其内にて何れにても誅罰に値へる二人を加へて廿四人とし。更に頼朝義時を添

へて廿六人とし玉へるなるべし。(二九四五左)

と述べ、次で『和語式』三四七を誇して

語式平家の誤をたゞす、少貳と廣嗣とを分て二人として廿三人とし。更に宗盛を加へて廿六人とせる事、一笑を發するに足れり

といふが、勿論太宰少貳藤原廣嗣を、官名と人名とを分つて二人とすることは誤であるが、『啓蒙』が宮田麿と廣嗣とを分けなかつたのは。似て非なる誤である。

#### 四、誠意奈何

要するに大聖人の所謂謀叛の二十六人とは、既に第一に大山の王子を數へて居る点からして、別して皇族に關係ある方々を除いたでないことは、前述の如く明であるが、又三書の最初に數へた土蜘蛛を除いたことも明である。且つ最後に頼朝、義時を列ねた点から見れば、三書孰れに依つたともいはれぬが、大体『平家』『盛衰記』等を資料として、蘇我物部の争、宮田麿廣嗣の事件、安倍の兄弟、清原の兄弟等の變を事件中心にして、頼朝義時等を加へられて廿六人としたものが、或は『平家』等を資料として、其の内容の聖意に依て取捨せられて、頼朝義時等を加へて、二十六人とせられたもの

であらう。恐らく後の意に近からうと思はれる。

若しそれ大石の山丸（小丸）とせる点に就ては、『平家』『盛衰記』『太平記』等の専門史傳が孰れも誤まつて居る故に、恐らく同一資料に依られた、大聖人の誤は當然のことである。

—「四、一〇、一一」—

# 宗教に於ける超厭世的傾向

永 倉 唯 嘉

靜かに聽診器を胸にあて、心臟の鼓音に聽き入つてゐると畏しい勢で奔つてゐる血液の嚴かな音が如何にも生物としての自己の生命活動を判然と現實に感ぜしめる。然しこの鼓動の停止と同時に忽にして自己が滅亡するのだと想ふと全く頼りない氣がする。實に露よりも果かなきは生物の生命であり、風よりも頼りなきは生の營みである。露や風と嘆き、夢や幻と悲しみ、生老病死の四苦等と佛者が謂ふのも皆悉く生物の生命や生の營みの生滅無常なる相につきていふのである。その作の眞偽は兎に角所謂蓮如の「それ人間の浮生なる相」をつらく観じた白骨文章の如きはよくこれを物語つてゐる。今現に語り、笑ひ、悲しみ、唄ひ、踊り歩いてゐたものが突如として倒れ死んで行く相を想ふとまことに心あるものゝやるせない淋しさや悲しみにうたれるのも無理からぬところであり、亦死したるが最後、はや永劫にその實在の姿を現はさぬことの如何にも不思議に感ぜられるのも當然の想ひであ

らう。私共の意識に深かい意味をもつて生きてゐる他人がまだ現在してゐると意識してゐながらも、その姿を眼前から掻き消してゆく生別に於てさえ云ひ知れぬ淋しい悲しい氣持になるのだもの生涯——永劫にその姿の現在に接することの能きぬ死別に於ては無限に淋しい悲しい氣持になるに違ひない。亦自己が何時の日か突如として人間世界の一切のものから切離されて地に沈むのだと想えば樗牛でなくても誰しも耐えられぬ淋しい悲しい感傷的な氣持にうたれながら人間的生活に無限の愛著をさえ感ぜずに居られぬだらう。内省的で感傷的な人にあつては殊に生滅無常なる生物的生命活動者としての人間の死といふ不可避的宿命に對して底知れぬ淋しい感情に生の悲愴を唄たはずに居られぬだらう。千年も万年も生きたいといふ人間的欲求も無下に凡俗の迷情なりと下だすわけにはゆかない。何となればそこに真劍な人間の欲求が見られるからである。眼前の細事に眩惑されて靜かに生命の事を想ひみて悟つた生涯を味はふことをなし得ないものは不幸である。聖日蓮が「まづ臨終のことを習ふて他事をならふべし」と言ふたのは死ぬことを想ふことをいふのではなく眞に生きることを生命のことを習ふて人生の本道を歩いて行けといふことである。宗教は本來生命の問題を中心としてゐる。凡てが *Lebensmacht* に充たされてゐる世界である。私はこの宗教的生命の問題を中心として宗教に於ける超厭世的傾向に就いて考へて見やうと想ふ。地に沈むでも尙自己といふものが存続するのであれば蟬の

様に地から復抜け出ても來るだらうけれど神話や信仰や詩や欲求とすれば別であるが輪廻轉生といふことも自然科学的には全然考へられぬ無根據な思想である。如何にも自然科学的知識に於て考ふれば生物的生命活動の止(死)といふことは何の不思議もない解りきつた生物的生理的な自然的事實であつて生理的心理學から考ふれば肉体即生理活動の止(死)と共に腦細胞や神經系統、感覺器關等の生理的活動に因つて生ずると考へられる意識活動も時間的にも空間的にも限界を有し或時或所に於て滅亡するものであるから生命の無限とか不滅の靈魂とかといふものゝ全くないことは動かされぬ科學的知識である。勿論生理的器關に因つて生ずる意識現象と云つても意識活動そのものゝ原因や根本が生理器關であるといふのでは決してなく、單にそれは意識活動の生理的器關を生理學的に考察する事に由て生物的生命の時空的有限性を説かうとしたまでゝある。生理活動の因果關係は生理活動それ自身の上 に於て考へらるべきであり、意識生活の動機因果は意識活動そのものに於て求めらるべきものであつて意識生活と生理活動との間に因果關係はないのである。心と体とは相互に影響し合ふものと一般に考へられてゐるがその間に因果關係を認め得る立場は生理的心理學といふ一つの自然科学的立場に於て言はれ得るであらう。然しそれは飽迄も自然科学的立場に於ける因果概念なる機械觀的自然界のことであつて理想化的活動と考へらるゝ精神生活の文化價値的目的論的世界とは全くその立場を異に



するものである。私共は「生物的生命」といふ同一語を全く異つた二つの意味に於て把握し使用し研究してゐることを注意しなければならない。一は生物學や生理學といふ自然科学の意味に於て、他は人生觀や世界觀といふ精神生活上の目的論的價値の意味に於て把握し使用し研究し記述説明されてゐる。前者は生殖發生に始り生命活動の外現としての所謂生活を營み最後に生殖細胞と体細胞との分化に因る「死」に終る生物亦是生理態を或は分拆亦是綜合し、或は觀察亦是實驗し所謂經驗的方法を用ひ唯その存在自然の相に於て把握し記述説明する場合に用ひられる「生物的生命」は全く存在判斷に基く非價値的機械的所謂自然科学の意味に於て用ひられるものである。後者はかゝる立場の意味とは全く異つた價値判斷に基いて價値的目的論的哲學の意味に於て用ひらるゝ「生物的生命」であるから例へば自然科学的非價値的生物的生命概念に基いて樹立された世界觀や人世觀であつてもそれは依然私共の價値的目的觀的哲學の意味を出でないものである。勿論生物學や生理學といふ自然科学的特殊科學の立場をとつて現はれて來る所謂自然科学の人生觀や世界觀が當然それが價値的哲學的立場の中に歸するのみならず自然的個別科學の特殊の立場を價値的哲學的に導いて文化的價値的哲學の普遍的立場に奪つて代らしめ様とすることは明かに部分を全体と見る偏狹なる考へである。自然科学的知識としての生命概念と價値的立場に於て考へられた所謂自然科学的生命概念とは全く區別さるべきであ

る。自然科学的知識は唯「在るところのもの」の普遍必然的機械的原理法則を發見しそれによつて自然の個々の經驗的事實を記述説明するところのものとして統一的体系的知識に組織構成されたものであるから所謂生物的生命に關する自然科学的知識も科學的知識それ自身としては全々別な獨立的知識であるが「在るべきところのもの」の世界即慾望と財（理想）との關係亦是現實的理想化的世界といふ價值的哲學的立場に於て言はれる場合の「生物的生命」は全く價值的意味に於けるものであるから哲學や宗教に於ける生物的生命の常無常等の論議は有價值無價值（非と無とは明瞭に區別せねばならぬ）といふ價值的意味に於て考へらるべきものである。

何故に生物的生命を價值的に見ねばならぬかと言ふに宗教や哲學が價值問題に成立する文化現象なるが故のみならず生物的生命は必ず無限的永遠的普遍的絕對價值的生命に對して有限的無常的部分的相對價值的生命として考へられるから全く價值的にみられたものである。價值意識は常に要求する世界と要求せざる世界、有價值のものと無價值のものとを對峙的に創造樹立する。そして理想的なるものによつて反理想的なるものを征服せしめる。單に征服せしむるのみならず終には反理想的なるものを理想的なるものによつて征服統一せしめ眞に理想的なるものとして生かすことに於て絕對的價值を主張する。宗教に於ても然りである。宗教信者の心の中には二つの世界が創造され相對峙せしめら

れる。この二つの世界は勿論私共の價值意識に因つて創造され亦は何等かの方法に由つて直觀亦は意識されたものである。そして私共はその理想的價值的なるものに由つて眞に生かされるのである。例へば國に於てはプラトーン (Platon, 427—347. B.C.) の感覺世界に對する超感覺的 *idea* の世界、キリストの地上に對する天國、佛教の穢土に對する淨土、娑婆に對する寂光土。亦人に於てはキリストの罪人に對する神。古代印度哲學の我に對する梵。佛教の衆生に對する佛といふ如き相對峙する價值的なるものが何等かの意味に於てその各々の後者の絶對性を主張することに由つて前者を征服統攝するのである。所謂救濟。濟度。成佛。往生。の如きは絶對的價値者の働きを示すものである。

扱古來哲學や宗教に於ける人生觀上の厭世思想は一般に生物的生命の無常觀と生物的生活の反價値觀に根ざしてゐると考へられてゐる。勿論厭世觀のなかには自己の將來に對する失望、過去の言行に關する懺悔、現在の境遇、生活の煩鎖不幸等現世生活に對する悲觀や嫌惡から來る厭世觀もあるであらう。亦生物的肉体的生命や生活の無常無價値を厭ふて靈界や精神的超越的實在界を空想する古い思辯的形而上學的厭世觀もあるであらう、或は單にネガティブな離苦といふことのみを重要視し、人間は肉体のみならず「心」あるばかりに一切の悲苦を生んだり感じたりするのだからピルローン (Pyrrhon, 360—270, B.C.) の様に判斷中止 *epoché* 否寧意識活動の停止をなして *Ataraxia* 亦は寂靜涅

樂を得る爲に無意識生活に歸り若くは生物としての有機組織を斷滅して無機物に歸ることを主張する佛者の所謂灰身滅智的な厭世觀もあるであらう。

又自然科学者は厭世觀の發生原因等に就て或は個人の健康状態を生理學や醫學上から説明し或は生物的生命の無常や社會生活の不幸等に對する悲苦の感情とか生きんとする意志力——生活力といへば一般に外面的な物質的經濟的のみに考へられてゐるけれども人間にとつて更に根本的なものは物質や財の有無といふことよりも生きやうとする内面的能動的な意志力が最も根本的な生活力の重要々素である——の缺乏といふ心理的事實を或個人に於て指摘しそれが厭世思想を描かせて終に死に到らしめた等と心理學上から解釋し或は社會組織や制度の關係又は環境の影響を審査して社會學上から論究するものもあるであらう。

私は今此に此等の厭世觀に就て組織的に記述説明し嚴密にこれを批判し様とするのではなく亦厭世觀の發生、動機、原因等に就て解説しその是非を論究し様とするのでもない。個人によつて復雜極まりなく時代や民族社會によつてその意味を異にする多様な厭世觀の經驗的事實を細大漏らさず記述し批判することは困難なことであり、亦かゝる煩雜多様な厭世的事實をあらゆる時——處——人に於ける總べての場合や意味を指摘して組織的科學的に説明することは私共の有限な經驗や知識を以て

しては全く望まらるべきことではない。唯私共はその時その處その人に於て最大の事實を科學的に記述し説明し及思想的に之を批判することに於て足りるのである。生理學や心理學等の科學的説明は厭世觀發生の生理的亦是心理的な状態や動機原因等に就て客觀的に觀察し記述し説明し得るのみで全く經驗的事實に限られてゐるのであるから厭世思想それ自身に就て説明し批判するものではない。されば科學的説明も事實の状态や動機原因等の客觀的解釋であるから經驗的知識として勿論客觀的眞理性を有し厭世觀を理解する上に重要なものであるが厭世思想そのものゝ理解説明批判といふことは全くその立場を異にする價值學特に哲學的立場に於てのみ可能である。私は今厭世觀や厭世的事實の經驗的發生的動機原因等に就て科學的立場に於て考へ様とするのではなく思想そのもの否、寧殊に宗教に於ける厭世觀に就て論理的哲學的に解剖し批判してそれが到り着く超厭世的傾向に就て論じてみやうと思ふのである。

既に述べた様に厭世觀の根本には共通な然も重要な要素として人間生活の無情殊に生物的生命の無常といふ觀念が流れて此等厭世觀の動機原因をなしてゐる様に思はれる。何となれば若し何等か存在的意味に於て生命活動が永劫であると意識されてゐるならば現世的生物的生命的單なる忌避によつてその生命活動を悲苦の地獄から救ふことは他土の世界を豫想しなければ不可能であるが然しそれでは

全く生に對して一時的忌避を企て生への反逆をなしても若し永劫に生を免れぬものならば結局その自殺的行爲も徒勞に歸するからである。亦永生といふ事が決定的なるものと意識されてゐるならば人は寧ろ有限的生物的生命の無常滅亡を教ふる生物學や地球崩壞の終末を説く地文學や生理活動の止に依つて意識活動の斷滅を教ふる經驗心理學の如き自然科學的知識に基く特殊自然科學的世界觀や人生觀の下に生の一時的癡痺陶醉を味ふ爲に自暴自棄的敗類者の享樂主義に陥るものが多いに違いないのであるが私共の經驗的事實として生物的生命活動の無常滅亡といふことは動かされぬ確實な知識であり亦それ以外の生命活動は經驗的知識に於ては全く考へられぬから自然科學的立場以外の即存在の世界以外の世界例へば價値の世界に於て可能であるとしても生物的生命の無常滅亡觀は動かすべからざるものである、この生物的生命活動の無常滅亡觀が厭世行爲を成就させ、これが亦厭世思想の根底を流れてゐる共通觀念であると想はれるのである。生物學地文學等から考へても人類の永存といふことはなく亦心理學から考へても靈魂の不滅とか輪廻轉生といふことは全く考へられぬ、人間の生命は生に始まり死に終るのである。自然科學的知識からすれば全く死後の生活や世界といふものは無いのである。斯る學說に對して能く宗教信者は自然科學的知識は萬能にあらず。人智は有限なり。故に死後の靈魂やその生活及世界を見る力なしと力説して自然科學的知識の否定を爲す者があるとすればその

人は自己に自然科学的知識の否定を主張する力もないことを自から主張するといふ自己矛盾の愚を曝らし自殺的論法に陥入つてゐることを知らねばならぬ。私共は存在に對する自然科学的知識の嚴然たる獨立性と浸すべからざる權威とを認めねばならぬ。従つて自然科学的知識としては人類の永存や靈魂の存在及その不滅性並に天國や西方淨土や地獄といふ世界が全くないことを承認せねばならぬ。若しさうでなかつたならば人間は自己の理性に對する信頼を全く根本的に捨てるといふ人間自身の自己否定即自殺に陥る外はない。かゝる自然科学的知識に對して宗教はこれを肯定することも否定することも能きない。何となれば宗教には自然科学的知識に對して肯定亦は否定する何等の權利もないからである。自然科学的知識として人類は永存せず神は實在せず、靈魂は存在もせず従つて不滅にもあらず天國や地獄といふ世界も宇宙の奈邊を探查しても全く存在するものにあらずこの主張が確實不動のものであると論すれば宗教信者は宗教の根本を倒壊されたかに感じて或は狼狽し或は反駁挑戦して所有思想史上に見らるゝ如き自然科学と宗教との争を想像するであらう。如何にも自然科学は神、靈魂、天國の實在のみならず人類の存續といふことを全く否定し、宗教は之を肯定して然も之に據つて成立してゐるのであるから一見全く矛盾する重大問題であるかの如く考へられる。そして結局此場合宗教信者は斯く主張するであらう。自然科学的知識は人間の有限なる經驗的知識に據つてのみ見る世界な

るが故に神や靈魂や天國の如き超感覺の世界を見る力が無い。宗教の世界は知識に非ずして佛知や恩寵といふ如き信仰意識に據つてのみそれ等の實在界を見得るのであるから自然科学者の經驗的知識の量り知ることの能きぬ世界であると。反之自然科学者は嘲笑冷罵するであらう。全く無きものを有ると信じ、見られざるものを見得ると空想し、興奮に因る感情の癡痺陶醉者、幻を追ふて走る夢遊病者に過ぎぬ。宗教は阿片である。人間の文化生活を害する毒であると。私共はかゝる水掛論争が各々全くその知識の限界を越えた無益の論争なることに注意せねばならぬ。勿論相矛盾して兩立し難き不統一的思想はその思惟の本性上有るされなさに違ひない。けれども此自然科学と宗教の立場は全くその世界を異にするものである、立場を異にするものゝ間に於ては全く矛盾はあり得ない。同一線上の相逆行する二つの汽車は衝突するが異線上の二つの汽車は如何に何方に走つても全く相關せざるところである。自然科学者は自然の存在に關する非價值的知識の世界であり宗教は文化生活の理想に關する價値的世界である。されば全くその成立の根據を別にしてゐる。従つて私共はカント(Kant 1724-1804. A.D.)と共に神を存在として古來の實體論的に或は宇宙論的に或は物理神學的に証明せんとすることの全く不可を主張するのみならず神を存在として自然科学的知識に於て見る事を全く斷念し唯實踐理性の要請としてのみ成立する價値的なものとして考ふべきである。と同時に存在として假定



するのでなく價値的生活を深き根底に於て生かすところの絶對價値的實在として體驗に於てそれ自ら現實するところのものと考へねばならぬ。さればかゝる神の實在に對しては全然自然科学的知識の關知せざるところのものである。自然科学に於ては經驗的であるも自然的存在としての神や靈魂を否定するに止まるものであるから全くこの立場を異にして成立するところの理想目的であるも體驗せらるゝところの價値界のそれ等に對して云云すべきものでもなく亦それに立入つて肯定亦は否定するといふ權利を有しないのである。信仰に於て體驗せらるゝところの宗教の價値的事實は文化科學亦是哲學に於てのみよく認識され把握主張されるのである。故に私共の批判哲學的立場に於ては一面自然科学的知識の獨立性を保證し従つてそれが説くところの知識内容に對しては絶對に容嘴しないと共に他面的知識の獨立性を保証してその信仰内容に對しては絶對に容嘴するを得ないものである、唯自然科学的知識の上に世界觀人世觀を立て、形而上學に獨變し宗教の信仰内容が亦思辨的形而上學の仮面を覆ふて相互に相戰ふ時その各の立場を明かにしその各の知識の權利を無視し限界を越えたる場合警鐘を亂打して各々のその成立根據を明かにしその限界を規定する、かくて自然科学は宗教を犯すことも宗教が自然科学を壓することも能きぬことを理解せしめる。されば自然科学が否定する神や靈魂の存在は全く宗教が肯定する神や靈魂の存在とは全く意味を異にして居るものであるから一見矛盾に見えた

るものも全く兩者相互に相關知せざるところのものである。従つて神亦是靈魂といふ同一語ではあるが自然科学が否定するところのものと宗教が肯定するところのものは全く本質的にその意味を異にするのであるから自然科学的知識の主張も宗教の主張も共に眞實なるものであつて決して相矛盾するところのものではないと云はねばならぬ。實際に於て自然科学者に宗教信者あり宗教信者に自然科学者があるのも當然の事實であるといはねばならぬ。私共は一面自然科学的知識として生物的生命活動を考へその無常を是認すると共に他面理想的生命活動としてその高下淺深是非善惡を味はひみてその價值的意味から或は否定し亦肯定することが能きる。この意味は先に述べた生物的生命といふ同一語の異義を照合して考ふれば明瞭するであらう。既述の如く生物的生命が一時的有限的現象なることは宗教に於ては價值的意味からは是を考へ斯る無常觀を根抵として厭世觀が發生描出される。斯る思想に基く厭世觀は單に自己を殺すことに由て一切結末を遂ぐるからそれ以上想ひ及ぶ何物もない様にはれる。乍然實は然らずして、その背後に於て生命の常恒といふことが生命の無常を悲しませ厭世觀を惹起せしめてゐるのである。厭世觀に於て意識されてゐるものは生物的生命の無常であるがその無常を意識せしめてゐるものはより深かき普遍常恒なる生命の意識であることに氣付かねばならぬ。

古來キリスト教に於ても佛教に於ても凡そ宗教と名付けらるゝものは單にかゝる生命の無常斷滅を

説かず必ず彼岸の世界や永劫に働ける絶對的生命者（神）を信ずる。例へ厭世的傾向を多分に有つてゐるものでも一面現世の一时的有限的生命活動を想定してこれを厭離し他面彼岸の永劫的無限的生命活動を有する絶對者を想定してこれを渴仰戀慕するといふ様に宗教的厭世觀は常に同じく後者を豫想し根柢とし理想標的としつゝ常に兩面を相關的に有してゐる。かゝる二元的生命觀に於て現世的生活の厭離（否定的、消極的）に重心を置くものと、彼岸的生活の欣求（肯定的、積極的）に重心を有してゐるものとの二つの傾向があるのを注意せねばならぬ。多く前者を指して厭世觀と稱ぶ場合が多い。それは厭世觀といふ字義が前者に相當してゐるからである。けれども單に現世を厭離するといふのみでは何等宗教的と云ふ性質を持たない。何となれば宗教は常に理想世界を目的として成立するからである。宗教に於ては單に絶望に因つて自己を殺すと考へられる消極的なるものに於てさえ本來の世界彼岸の生活を漠然ながら意識してゐるし亦積極的なるものにあつては寧ろ永劫の生命や彼岸の幸福なる生活を欣求する餘り生滅無常なる生物的個人的生命を殺すといふ善導の如き往生思想を持つのである。他土を欣求するといふ点から考へると何等悲觀や厭世をして居るのではないから厭世觀と考へられぬが然し此土を厭離するといふことが必ずその他面に隨伴してゐるから勿論厭世觀として積極的な排現世的なものである。宗教價值から考ふれば單に現實の現世的生活を厭離するといふ動機に因り彼

岸的生活を望むといふ消極的なるものよりも理想の彼岸的生活を欣求する餘り現世的生活を厭離するといふ積極的信念に基く厭世觀の方がより深くより高きものである。勿論理想主義的二元的生活觀に基くこの二つの傾向は相互關係を有つてゐる不可分のものであるがよく考へてみると此等の厭世觀に於て現世的生の否定をなすのも單に死なうと思ふ動機に因るのでなく生きやうとする本能亦是意志に基くものである。元來自ら生きんとする熱望の餘り生きるべき理想を失ひ現在に於ける自己の將來に於ける理想が自己の力の到底及ぶべくもないことを悲しみ、現在の自己否將來の自己に望みを見出し得ず終には生存の價値否定的思想に基いてそこに厭世觀が生れるのであるから經驗心理學上から考へると一般に厭世觀は生に對する失望に基くと考へられるがその實深かい生そのものへの執着が生に對して失望を起さしめ終には自己を殺すに至るのである。即自己を「生かさうとするもの」が自己を「殺す」のである。然し自己を殺して無に歸すと思ふてもその實彼は自己を殺すことに由つて或世界に生きてゐるのである。超個人我は個人我を殺す、神は人を殺す。人は殺されて眞に人は神に生きる事が能さる。生への意志も執着も持たないものに自己を殺さう等といふ深刻な考へが起らう筈はない。かゝるものに於ては生死のことは意識外のご故厭世といふこと自身が既に無意味である。厭離とか欣求とかといふことは元より私共の欲望及理想に基くものであり此土他土といふことも欲望生活

に因るものであるから價值觀上に於てのみ言はるゝことである。何ものが自己の理想を欲求しその欲望の満足を得られぬ時初めて失望が起り失望の極自己否定的厭世觀を抱き自殺を決行する。自己否定は自己と環境との關係に於て生ずること考ふることも能さるが飽迄も欲望と理想の關係に於けるその充足如何に因る。人間が萬物の靈長たる所以はその理想化的生活をなす点にあり自然の理想化といふところに文化が成立する。私共の生活は凡てこの理想に關係する。經濟學に於て欲望と財（被欲望物）との間に於て價值關係が生ずるといふのも宗教學に於て宗教とは人（欲望）と神（理想者）との（價值的）關係なりといふのもよくその間の事情を物語つてゐる、單に生の無常を悲しむ者と雖もその生に對する自己の欲望の滿不滿に基いて起されるのであるから寧ろ生そのものへの執着といふよりも一步立入つて考ふればそれは欲望の滿不滿に因る價值事實に基くものといふべきである。故に價值が眞に生命をして生命たらしむるものだといはねばならぬ。宗教に於て——文化生活は凡てさうである——謂はるゝ生命概念は凡て價值的生命であるといふことが能さる。現世的とか彼岸的といふことは全く價值的に考へられて區別されたものであるから此等兩界に對する否定も肯定も價值的立場に於てなされるのである。そこで現世的生の否定をなすには何等かそれ自身に否定さるべき缺点と理由根據とを有しなければならぬ。勿論現世的生それ自身では自己を評價し否定する何等の理由根據も評價

の標準も有たぬのであるから否定も肯定もそれ自身としては全く不可能のことである。然らば現世的生を評價する價值標準とは如何なるものであらうか。正しく此價值標準は理想的生そのものでなければならぬ。理想的生に相照合して始めて現實的生の缺點を觀じ無價值を認識し且これを評價することが能きる。理想的生といふ價值標準に據つて現世的生が評價され然して後初めて現世的生の否定が可能となるのである。即無常的有限的生は永劫的無限的生を理想とし標準とするから厭離され否定されるのである。單に現世的生の無價值や價值否定を主張する消極的厭世觀も必ず此理想的彼岸の世界を豫想することなしに生ずるものではなく亦理想的彼岸の世界を欣求する餘り他面現世的生を厭離する積極的厭世觀に於ては更に明瞭にこれを觀取することが能きる。

私共は右の如き理想主義に基く現世否定的厭世的宗教に一見全く逆反する現世肯定的樂天的宗教を見る事が能きる。一般に現實主義の宗教と呼ばれてゐる。然し現實主義といふこの語は極めて誤解され易い。それは人類の生命活動の究極の意味は因果法則に因つて自然——萬物を支配し現實の幸福を増進し現實的欲望の満足にありとする實證主義 *Positivismus* と間違へられ易い。唯在るところのものは現實的事實のみであると考ふる實證主義は全く宗教と相容れぬものである。何となれば宗教は何等かの意味に於て常に理想を追い理想に據つて生きるものであつてそれは本質的に理想主義に立脚

するからである。單なる現實的自然主義は宗教の本質を無視するものである。亦總ての文化は人間の實際生活に役立つ爲にのみ必要であるといふ實利主義 (Pragmatism) と間違えられ易い。實利主義は學問も實生活の爲に宗教も實生活の爲にのみ必要なりといふのであるがそれは明かに學や宗教の神聖を冒贖するものである。學の爲の生活宗教の爲の生活こそ神聖なるものである。勿論かゝる實利主義と間違ふべきではない。故に現實主義の宗教と云つてもそれは所謂厭世的宗教の現實否定主義に對する現實肯定主義といふ意味であつて兩者共に理想主義に立脚してゐることは動かし難いのみならず共にそれが本質的に宗教と稱ばれる所以でもある。所謂現實肯定的宗教はその本來の理想世界を現實世界の中に實現して眞に理想の實現であると共に更に理想が自らの本然の姿を表はす世界が現實世界即現世であるといふ点から依然として理想主義に基くものである。然してそれが一面に於て理想的生を考へ他面に於て現世的生を考ふる点に於て厭世的宗教と何等その價值的意味に異なる處はない。亦それが單なる現世的生を厭ふて理想的生を渴望する点に於ても異なる處はない。唯厭世的宗教も理想的生に由つて現世的生を救ひ以て眞に生きやうとするものであり現實的宗教も單なる現世的生を理想的生と見るのではなく理想的生に據つて現世的生を眞に生けるものと觀て現世的生を救ひ以て眞に生きやうとするものでありそしてそれが共に信仰意識に於て成就されるといふ点から考ふれば宗教哲學の立

場から兩者の宗教的價値に就て差等是非を一概に附けらるべき性質のものではない。勿論既成宗教が如何なる意味に於て現世的生を觀、如何なるものを理想的生としてゐるかは各宗教の教義内容に立入つて味ははねば解らぬことであるが教義内容に立入つてその是非善惡を評價することは宗教哲學の權利外のところであるから慎しまねばならぬ。唯私は次の如く言ひ得るであらう、宗教は理想に立脚してゐる。従つて厭世、樂天何れを問はずそれが價値意識の要求に基き理想的生と反理想的生換言すれば彼岸的生と現世的生とが一往對比的に差別され再往後者が前者に即現世的生が何等かの意味に於て理想的生に統攝され救済成佛せしめられる。即宗教の本質からして理想化される世界であるといふことを。如何なる意味に於てか宗教は現實的生を理想的生に由つて救ふ理想化生活といふ意味から所謂厭世的宗教も樂天的宗教も共に現世的生活を厭離しつゝ然もこれを救ふといふ超厭世的なものであることを私共は理解することが能きた様に想ふ。ところが私共は極めて重要な最後のものを殘してゐる。何ごなれば以上に於て説かれた有限の無常的相對的價値的な現世的生と無限的常恒的絕對的價値的な彼岸的（理想的）生とは私共の價値意識に基いて創造され判別されたる二つの相對的價値界である。現世的生が厭離されるのも理想的彼岸的生に對比して考へられる爲であり彼岸的生が渴仰されるのも現世的生に對比して考へられる爲である。さればかゝる彼岸的生は絕對的生ではない。寧ろそれは相



對的なものであり同一像の表裏と考ふべきものであらう。然し表裏を合しても同一像は出来ない。何となれば如何に二つの世界を一つにまとめ様として依然として二つは二つであるからである。されば現世的生と對比して描かれた彼岸的生に由つては如何にしても現世的生は統攝され救済されることは出来ない。創造され考へられたる絶對的理想的生は價值標準とされ亦それに依つて現世的生が評價されるには違ひないが、斯る理想的生は亦現世的生に對比して評價されるものであるから眞に絶對的無限的永劫的なる生では無い。相對に對する絶對は依然として相對的絶對であつて眞の絶對ではない。従つて創造され考へられた絶對的理想的生はそれ自身に依つて現世的生を厭離することも統攝することも乃至は救済することも出来ない。斯る立場に於ては何故に絶對的理想的生はその相對性を抜出ることが出来ないであらうか。それは全く創造され考へられたるもの即ちその二つの世界は共に意識内容であるに止まるからである。従つて意識内容としての二つの世界が對比的に考へられ全く異つたものと想はれるのは當然の事である。されば私共はかゝる死せる抽象的な意識内容としてのもの以外の何物かを考へねばならない。如何にしても客觀的意識内容とならずして然も意識内容を創造し統攝するものを考へることが出来ないだらうか、宗教に於ける先驗的なものを考へることが出来ないであらうか。私共は生きた具體的な普遍的一般者を考へる事が出来ないであらうか。私共をして厭世せしめてゐる

ところのものは何であらうか。それは生きた普遍的理想的價值的絶對者でなくて何であらう。意識一般を實在と考へることは許るされないけれども宗教はある生ける普遍的絶對者を考へることなしに宗教を理解することはできない。かゝるものこそ創造者であり統攝者である。かゝるものは客觀的に觀ぜらるゝ内容的なものではなく常に一切の背後にあつて一切を創造し統攝してゐるものである。私共はこれを直觀に現はれる主客未分の實在者といふこともできやう。かゝるものが意識の背面にあつて初めて厭世の意識も欣求の意識も生れるのである。従つて眞に普遍的理想的絶對的價値者が生きてゐる世界である。理想的世界が欲望されるのは現世的生に對する缺乏の感が然あらしめるのである様に考へられるが實はその欲望の意識はその背後に完全者普遍者が働いてゐるから現世的世界の不完全を意識し缺乏の感を抱き、その意識、その感が強く働けば働く程、強く完全を欲望するのである。それは二つの世界が意識内容となつてゐる相對的意味のものゝ場合とは全く異り普遍的完全者が不完の何れの世界にも現世彼岸の何れにも一切に生きてゐる即普遍者自身が働いてゐる絶對の世界である。私共はかゝる普遍者を絶對價值的實在者と呼ぶことが能きであらう。従つて不完全なる現世的生の成立も厭世の情も亦完全なる彼岸的生の成立も欣求の情もその根本に完全なる理想的絶對的價値者が働いてゐることに因つて初めて可能であること云はねばならぬ。普遍的完全者のみ能く普遍的完全者を

見、佛のみ能く佛を見るこゝが能ざる。かゝる生ける普遍的完全者に由つて意識内容としての兩界が創造されかゝるものが眞に此彼兩界を生かすものである。斯く考へることに由つて初めて眞に統一的絶對的なるものを考へることが能ざる。絶對的無限者の自己限定に由つて有限者が生れるのである。内容として考へられた彼岸は有限の彼岸である何となれば現世に相對せしめられたものであるからである。生ける絶對的生のみよく相對的生を生かし眞に生ける救済を想ふことが能ざる。されば無限者は有限者に内在すると云つても有限者は無限者に據つて生かさざると云つても同じである。かゝる意味から親鸞の如きは佛力の外何ものも考へず信力さへも佛力なりと一元的に徹して來たのであらう。單に上昇的に理想的彼岸の世界を欣求するといふのみでなく彼岸の世界否普遍的完全者が下向的に來迎して現世を救済するといふ世界は既に厭世觀ではない。亦上昇的に彼岸を欣求するのも實は究竟者それ自身の自己反省の心であり行であつて現世を最も強く生かし眞に現世をして現世たらしむるものであるから最も深かき彼岸の立場に於て現世を生かしてゐるものと言はねばならぬ。

元より事實、實在する生命活動に二つの全く別個のものがあり得ないことは明かである。價值意識がかく二つの世界を判別するに過ぎぬ。價值意識と云つても別に價值意識といふものが獨立的に實在するわけではない。私共は宗教に於ては先づ第一にかゝる唯一絶對的價值的實在者を考ふることなし

に何事も論ずることは能きない。かゝる實在は事實として思惟言説を絶したものである。思惟し言説されたものは抽象的なものであるに過ぎぬ。具体的事實としての實在者は直観に於て自己自身を顯現する。思惟は直観の發展といふことが能きるが思惟言説された實在は既に普遍者でなく思惟内容としての部分的なものである思惟内容となつた部分的なものを一つの手懸りとして私共はその中に普遍者を観る。かくて觀られたる普遍者は抽象的なものである。實在の似姿に過ぎない、私共が思惟によつて今把握したところのものも抽象的理論に過ぎぬことは論ずる迄もない。直観的實在的に考ふれば生命は唯一絶對なるものであると同時に内面的聯續を保つて無限發展をなすものである。價值的絶對的實在者が直観に於てそれ自身を現はして來る。そしてかゝるものが眞に三世十方を貫徹する絶對者であるといふことが能きる。宗教は徹頭徹尾神が「生きる世界」である。そこには現實も理想もない。唯神が生きる世界こそ眞に光明壽命無量の世界である。これに對すべき何の世界もないそれが總ての世界であり絶對の世界である。

×

×

×

×

私は今此に筆を擱くに方つてもう一度論頭に還つて考へてみやう。周圍の人々が死ぬのを觀て淋しい悲しい心持ちになるのは何故だらうか。心理學的には他人の死に於て自己の生物としての死の宿命

を直接聯想するからだといふ聯想説とか自分の感情を彼に移入することにより彼を慫み悲しむ情が起るのだといふ感情移入説等に依つて説明されてゐるが私は單に他人の死によつて自己の死を聯想するからとか或は自己の感情を彼に移入し亦は移入することによりて彼の感情が更に自己に移入され斯くて自己感情の融通交錯によりて淋しい悲しいといふ氣持になるのだといふのでなく或は亦他人ごは自己の意識に内在する他人なるが故にその内在的他人の消失は自己意識の一部の滅亡消失であるから力を落して悲しむのだといふのでもなく、全く自己が彼に於て生き、彼が自己に於て生きてゐたからであると思ふ。即彼に生きてゐた自己も自己に生きてゐた彼も個人我對個人我の關係ではなく超個人我の中の個人我であり然もその個人我に内在する超個人我のこゝろであるから要するにそれは一自我のことであり、その自他超越的自我の生き方に對する言ひまわしの異に過ぎぬ。正しくそれは超個人我が個人我の經驗的價值的存在としての姿の消失を悲しむこゝろである。價值的に生きる即永劫無限なる絶對的價値者としてのこゝろが普ねく恒に強く働けば働く程經驗的現世的生命の消失を悲しむ情が一層深かいのであらう。それ自らの姿を直觀に於て表はして來る他人自体といふ直觀的實在者がその直接的現實の姿を消失して再びそれ自身の現實的姿を表はさず單に再生觀念として反省意識に非實在的觀念に依て追憶想起されるに過ぎないからといふのでなく亦單にその悲しみが單なる個人我の悲し

みでなく個人我の背後なる普遍者がそれ自身の價値的見地から「他者」といふ個体的經驗的存在を惜しむこゝろからであると想ふ。單に死を悲しむその情が佛だといふのでなく實は自己に於ける普遍者即佛が悲しむでゐると考ふべきである自己の死を悲しむといふのも佛の情から悲しむのでなければ無意味である。千年も万年も生きたいといふこゝろは凡俗の迷情でなく眞に佛がさうこゝろさせるこゝろであると想ふ。

——一九二九、一〇、二八、——

或舊い原稿の一部を幹事君の懇請により拔出して淨書したのであるが締切期日が既に過ぎて再讀熟考の時を與へられずして奪はれた爲に思想の未熟、叙述の不正、語の過不足、意味の不徹等種々の缺點を多分含むでゐることゝ慮ふ。殊に生命、生活、生存といふ如き語の區別を概念的に規定して論を進めてないのは舊稿の一部の拔出であるから致方ないとしても讀者に多々煩ひをかけることゝ憶ふ。伏して洪湖の智者の叱正を希ふ。但しこの稿を讀みて他宗から我宗を學ぶことをせぬ爲に外道謗法呼ばはりされることゝ御免を蒙りたい。唯哲學の立場に於て自然科学に對して宗教の立場を辯護した点を容れられ多少なりとも所論に拾ふべきものありとすれば喜び身にあふるゝを覺ゆるであらう。

# 座右之銘

竹 庵 遺 稿

師曰縱雖讀一切書通一切事若無菩提心不如愚者深信而不欺也有智辯而無道心者動輒破法壞人。

又曰世之所謂器用者乃謂記憶文字辯折義理吾意不然性雖魯鈍而篤志好道決欲成此一大事矣此之謂器用矣。

又曰世間無益事大抵從人而可也唯學與行當嚴而已矣。

# 艸山三章

艸山集

高祖

末法導師人天眼目稟承竺乾敷揚日域格外教意豈泥繩墨手執經拂議  
諸宗補處菩薩也不識

延山絕頂

投身湯鑊拯羣毛終向雲山深處逃宗祖九年猶忍苦吾儕一日豈辭勞若  
研蒼海記鴻業欲聚須彌爲兔毫別有風教可追慕瞻望父母陟斯高

天台大師

述而不作集成贊詞雙弘定慧兼善毘尼承法靈山示跡陳隋斯法何法也  
四教三觀五時斯人何人也天台智者王公大人之師



# 佛說法滅盡經讀後の感

松 木 本 興

## 一

總べて經典の説く所に對して、是れ佛陀が万年の後を懸記せられたる金文なり、となす信仰的の見方と、少部分の原始經典を除く外は滅後諸賢聖の創造せるものであつて、其の經典の文字は、其の經成立當時に於ける教會の實狀を寫したるものと見る、歴史的、科學的見方とがある。

經典の文字が、金口の梵音を寫せるものにせよ、滅後無名の大士の思惟創造せる所を記述せるものにせよ、其の當時の教會の實狀を物語る事は同一である。此の意味から五万八万の佛教聖典は、其の儘が佛在世及び滅後二千年間に渡る教會史であり、教理史であるといひ得る。

根本原始經典の文字にせよ、佛陀の四衆に對する垂訓であるは勿論なるも、而も其の説ある所以を推尋する時、反面教會の状態即ち其の説あらねばならぬ理由を知る事が出来る。發達大乘佛教の如き、佛陀内証の布行を佛説の形式に依つてなされしものであり、同時に其の時代の教會相に反撥せら

れて成立せるものが多い。

今の佛說法滅盡經の如きは消極的に教會の衰滅を慨けるものであり、法華經、維摩經、涅槃經、大無量壽經の如き諸大乘經は、積極的に高く理想を掲げて教徒の進路を示し、以つて教會の弊風を矯正せんと企てしものと見る事が出来やう。

## 二

經典を信仰的に尊奉するにせよ、科學的に其の教理を批判し、歴史的に成立年代を探究するにせよ。是等が既に、我等の聖典であり、修証の羅針である事に異論はあるまい。従つて是を客觀的に物語りを讀むが如き態度に見終らんか、古聖の所謂、終日他の實を數へて自に於いて半錢の分無き、に終るであらう。佛教徒の使命は、經典を自己に反省し、時代に生かす事である。換言せば總ての經典の文字の中に自己の血を通す事が我等の態度でなくてはならない。此の態度で經文の豫言に對し度しん思ふ。

經文の豫言は一樣に、惡見の起る時代を末法堯季と説かれてある。其の尤も確然として年代を區分せるは正像末三時の説である。而して末法の徵として、戒定慧無く、僧徒の品位退下し、奴を比丘と

なし婢を尼とし、僧尼嫁娶し、俱に子息あり、袈裟の色變じて其の行狀獵師の如し等々末法の相狀を説く事至れり盡せりの感がある。其正像各千年末法万年といひ、或は正法五百年像法千年末法万年といひ、或は正像各五百末法万年等といふも俱に佛滅を去る尤も遠きを以て、末法といひ堯季と呼べるものであるが、是は且く年代の差に依て正像末に區分せるものであつて、若し實質的にいふならば、強ちに正像を過ぎざれば末法なしと限るべきではない。

時の中心となるものはいつても人である。それが佛在世であらうと、滅後であらうと、佛眼に映じたる衆生は、いつも迷へるものであり憐れなる窮子であり、惡見の所有者である。此の意味から衆生を中心として見た場合は、いつも堯季であり、末法である。但個の中、惡見の多少、証悟の有無を批校して滅後三時の區分を生ずるに過ぎないのである。經典の中に指摘せられたる堯季の主体は一切衆生であり、剋實して云へば今經を讀む我々自身であるのだ。佛陀は三千年の往昔、豫言の形式を以つて現在我々の爲に慨き、我々の爲に説法し給ふたものである。此處に遍法界の佛陀の慈悲に感泣せずには居られないのである。

### 三

佛說法滅盡經は小乗部に從屬し、僅に八百八十餘文字より成る至つて短い經典で、其の譯出は支那南北朝末期と推定する丈で譯者は不明である。其の説く所極めて深刻に、讀む者をして、寧ろ戰慄せしむるの感がある。何れの經典を見るも、佛陀の將に法を説かむとし給ふや、光明十方に遍く、四衆八部隨喜して之を待ち、説法終るや、歡喜して去るのが常途である。然るに此の經は其の序分に、世尊寂靜。默無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>説。光明不<sub>レ</sub>現。と説かれ、結文に、四部弟子。聞<sub>レ</sub>經悲慘惆悵。皆發<sub>レ</sub>無上聖真道意。悉爲<sub>レ</sub>佛作<sub>レ</sub>禮而去。といふ。何すれば斯くも通途の説相と殊るや、其の正宗分に接せば自明である。

蓋し本經正宗分中、法滅盡の相十四ヶ條を舉示してゐる。即ち、

- 一、好飾衣裳。
- 二、飲酒噉肉。
- 三、殺生貪味。
- 四、憎賢嫉善。
- 五、荒撫寺廟。
- 六、偷三寶物。
- 七、貪財不施。
- 八、販賣奴婢。
- 九、耕田種植。
- 十、婬嫉濁亂。
- 十一、不修戒律。
- 十二、懈怠不學。
- 十三、貢高求名。
- 十四、望人供養。

の十四項目、檢し來れば、悉く是れ現代僧衆の實生活を寫せるものである。

其の第一項を見るに、著<sub>二</sub>俗衣裳<sub>一</sub>樂<sub>二</sub>好袈裟五色之服<sub>一</sub>。と説かれてゐる。現代所有階級を通じて、僧侶の服裝ほど煩雜にして、絢爛たるものはあるまい。尤も嚴肅なるべき法要時に彼等の服裝を見る時、返つて嚴肅の氣分は殺がれて、拙劣なる假裝行列然たる感さへある。之を在世の僧伽の服裝の森

嚴であつたらうそれに比し寧ろ滑稽なる感がある。何を苦しんで切迫したる經濟狀態の中に在りながら、數十、數百金を投じて、好袈裟五色の服を求め之を着用して得意然としてゐるのか。由來僧侶の生活様式は其の簡素なるを以つて特徴としてゐる。然るに今や、一般社會に於いてさへ生活の簡易化の叫はれてゐる時代、寧ろ其軌範たるべき僧衆が昔日より今日、今日より更に複雑なる生活様式を迎へんとしつゝあるは何ぞや。此處に取り殘され行く階級の姿があり、法滅盡の相がある。我々は先づ服裝の簡易化を叫び、我等の生活より法服單司の必要を除去せねばならぬ。

飲酒噉肉、殺生貪味の弊に至つては餘りに自明にして寧ろいふを欲しない。僧伽のある所酒あり肉あり、然して和合の相は非ずして破和合の叫喚あるのみに至つては論外と云はざるを得ない。

憎賢嫉善に至つては、何の時代も是あるが爲に動亂を免れぬのである。勸持品の三類の強敵の如き亦此の類例であらうが、今の經には、清淨の比丘あり教化平等にして、身を損し物を濟ひ、自ら己を惜まず。設有此人、衆魔比丘、咸共嫉之。誹謗揚惡。擯黜驅遣不令得住。自共於後不修道徳。と説かれてある。是亦餘りに明了なる現代僧衆の實狀ではあるまいか。僧團の和合を缺くは多くの場合、憎嫉が其の最大原因である。教團の分裂然り、宗内の動搖亦然りである。更に、但貪財物。積聚不散。不作福德。に至つては、冷汗三斗たらざるを得ない。

荒蕪寺廟。偷三寶物。貪財不施。亦現實描寫と云はざるを得ぬ。販賣奴婢はやる者無からんも、耕田種植に至ては、天下晴れて行はれてゐる。

姪妖濁亂。不修戒律。懈怠不學。貢高求名。望三人供養。擧げ來れば、悉く以て現在僧衆の不如法ならざるはない。

## 四

月は村雲の爲に覆はるゝが、月其物は永久の存在である。佛教亦然りて、勝義正法即ち、佛教其物は、万年の後を照すべき力を有すべきも、僧徒不如法の村雲に依つて、世俗正法、即ち民衆と佛教との關係は絶たるゝのである。一般民衆の信仰心の薄りぎ行くを慨く聲は聞くが、それが原因の自己に在る事を恐るゝの聲を聞かない。不修戒律と懈怠不學は蓋し尤も誠心せねばならぬ事ではあるまいか。

傳教大師が、自らの時代を指して、今時は像法最末時也。彼時行事既同「末法」、然則。於「末法中」。但有「言教」。而無「行証」。若有「戒法」。可有「破戒」。既無「戒法」。由「破何戒」。而有「破戒」。破戒尙無。何況持戒（末法燈明記、全三四八五）

と記しながら、尙比叡山上、大乘圓頓の戒壇建立を理想とせるは、煩鎖な形式に束縛せられたる律儀

は無かるべきも、大乘法華の精神に依る戒の永久存続すべきを物語るものである。然り而して其の半生を戒壇建立に奔命し口頓戒に依る菩薩僧を養成せんとせる、傳教は、其の入寂前諸弟子に遺誡し、  
若我滅後。皆勿<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>服。亦山中同法。依<sub>二</sub>佛制戒<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>飲<sub>レ</sub>酒。若有<sub>レ</sub>違<sub>レ</sub>此者。不<sub>二</sub>我同法<sub>一</sub>。亦不<sub>二</sub>佛弟子<sub>一</sub>。早速擯出。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>令<sub>レ</sub>踐<sub>二</sub>山家界地<sub>一</sub>。若爲<sub>二</sub>合藥<sub>一</sub>。莫<sub>レ</sub>入<sub>二</sub>山院<sub>一</sub>。又女人輩。不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>近<sub>二</sub>寺側<sub>一</sub>。何況院內清淨之地哉。每日長<sub>二</sub>講諸大乘經<sub>一</sub>。懇懃精進。令<sub>二</sub>法久住<sub>一</sub>。爲<sub>レ</sub>利<sub>二</sub>益國家<sub>一</sub>。爲<sub>レ</sub>度<sub>二</sub>群生<sub>一</sub>。努力努力

と云へる叡山も、此の遺誡の精神は、早く既に喪失して、大師をして地下に泣かしむる現狀となり了つた。

天台宗を始め、當時の伽藍佛教の弊を慨き、大聖佛陀の眞意に返り、法華本圓戒の樹立に一生を捧げられた、日蓮上人の流れも、亦再び伽藍佛教に歸り、宗祖の末法無戒の言を惡用して、好飾衣裳乃至求名、望人供養の惡風に身を心を委ねてゐる。

豈唯僧徒のみならんや、不如法なる人程、社會は歡迎するに非ずや。といふ事を止めよ。自らの罪を他に推す事は惡中の惡である。現代の如き、不如法の信者俗衆を作れるは、皆僧衆の罪である事を自覺せねばならない。

法欲<sub>レ</sub>滅時。女人精進恒作<sub>二</sub>功德<sub>一</sub>。男子懈慢不<sub>レ</sub>用<sub>二</sub>法語<sub>一</sub>。眼見<sub>二</sub>沙門<sub>一</sub>。如<sub>レ</sub>視<sub>二</sub>糞土<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>信心<sub>一</sub>。乃至懸官計尅。不<sub>レ</sub>順<sub>二</sub>道理<sub>一</sub>。皆思樂亂<sub>一</sub>。惡人多如<sub>二</sub>海中沙<sub>一</sub>。善者甚少。若一若二。

餘りにも恐るべき經文ではあるまいか。結文の四部弟子。聞經悲慘惆悵。と云へるも宜なるかなである。若し夫れ、法滅盡經を聞きて、悲慘惆悵せる、四部の衆をして現在あらしめば將して如何、唯々恐懼憂惱死あるのみか。

如日月光明。能除諸幽冥。斯人行世間。能滅衆生闇。教無量菩薩。畢竟住一乘。の文を色讀するの人は出でざるか。



身延文  
庫藏本  
行學朝師奧書集

江利山義顯

補施集百十二卷

序品七卷（一二三無奧書）

四卷末

延德三年辛亥九月日、日朝生年七十才。

五卷初

明應六卯月廿五月初之。

六卷初

六月廿五月初之。

六卷末

行學朝師奧書集

明應六年丁巳八月廿日、生年七十六才日朝花押。

右去七月中旬俄發病不慮得減氣兩條書之了。

是併連々廣宣流布得已滿足精誠、以此功德余薰四恩法界平等利益云云、日朝自身不顧老耄遂寫功意趣、專在臨終正念、懇祈雖爲願望繁多大概有之、万一後見人偏住道念可有廻向者也、拭老眼注之奉扇冥覽者也。

七卷末

延德三年辛亥極月廿七日、七十才日朝花押。

師父母及法界衆生以此功德力皆共成佛道。

方便品十卷（三四五九無奧書）

一卷末

延德第四壬子仲冬十九日、七十一才日朝花押。

右爲令法久住廣宣流布奉書之者也、依此功德願師父母自身及法界衆生、得入無上道速成就佛身、別而爲日恩菩提也。

身延山內田代木屋奉書之、折節世上忿劇之間、徒送時日難補施故老眼書之上、後見嘲哢憚不少、只可訪令法久住志者歟穴賢く。

二卷末

延德第四壬子九月廿日、日朝花押。

師父母自身及法界衆生日軌尊靈位得入無上道。

六卷末

延德第四壬子三月九日、七十一才日朝花押。

右爲慈父妙善菩提、從二月十四日以後撰之者也、所修善根二世大利四恩法界平等利益。

七卷末

延德三年壬子卯月日、七十一才日朝花押。

願以書寫力師父母自身及法界衆生皆共成佛道。

八卷末

延德第四曆壬子卯月廿日、七十一才日朝花押。

願以此功德師父母自身法界衆生皆共成佛道。

十卷 末

延德第四曆壬子南名日、七十一才日朝花押。

右爲令法久住撰集處也、依此功德日成比丘尼令逐證大菩提意懷而已、乃至師父母自身及法界衆生皆共成佛道如件。

譬喻 八卷（六七無奧書）

一卷 初

明應五年丙辰八月廿五月初之。

二卷 末

明應五年丙辰九月廿七日、生年七十五才日朝花押。

右八月廿五日始今日書寫了、首尾卅日、譬喻品內法說四段書了、折節老病二苦頻而見聞雖無正躰、餘命不幾許拭淚注置者也、後見嘲哂可耻可耻、願以此功德爲令法久住、一々如所願皆令得滿足。  
師父母自身及法界衆生、得入無上道速成就佛身。

三卷 初

明應五年丙辰九月廿七月初之。

四卷 初

十月十七月初之。

五卷 初

十一月一日初之。

八卷 末

明應五年丙辰十二月廿七日、生年七十五才日朝花押。

右爲廣宣流布爲令法久住集之處也、依之四恩法界平等利益相當、爲臨終正念卽詣靈山也、後見之輩敢勿偏執、偏可被斯自他覺悟者也、拭老眼淚豈有餘義乎、只是爲師父母自身皆令入佛道也、懇志如件。

信解品 五卷（一無奧書）

二卷 末

明應五年丙辰六月廿七日、七十五才日朝花押。

二帖首尾廿三日寫功了。

三卷 初

明應五年丙辰六月廿七月初之。

四卷 末

明應五年丙辰八月七日、七十五才日朝花押。

右爲廣宣流布令法久住也、依此功德一夕所願皆令滿足、四恩法界平等利益如伴。

五卷 初

明應五年丙辰八月七月初之。

藥草品三卷（一二無奧書）

三卷 末

明應五年丙辰五月十九日、七十五才日朝花押。

右卯月三日初之、首尾四十六日逐寫功訖、老眼老苦老病、誠以見聞覺知豈正乎、只是後世既近、徒難送時節之故、且爲補施、且爲拔苦、所

染禿筆也、後見人若一字披覽之上、偏可預廻向者也、盛年比懈怠後悔無詮候歟、極老比何勵乎、只愁淚而已、伏乞廣宣流布令法久住如件敬白。

願以書寫力師父母自身我等與衆生皆共成佛道。

授記 品 一卷

一卷 初

明應五年丙辰五月初之。

一卷 末

明應五年丙辰六月三日、七十五才日朝花押。

右首尾十五日一品寫功訖、既及老耄三業何由正乎、只時節難默止之故、偏期後世菩提誌之者也、乞願依此功德現存聞廣布之趣、未來結三佛之緣而已。

師父母自身及法界衆生皆共成佛道云云。

化城 品 四卷 (三四無奧書)

一卷 初

明應五年丙辰潤二月一日初之。

一卷 末

明應五年丙辰潤二月十四日、七十五才日朝花押。

右爲令法久住利益人天奉書寫者也、仰者依此功德廣宣流布得已滿足、  
四恩法界平等利益別爲慈父妙善頓證菩提也。

二卷 初

明應五年丙辰潤二月十五月初之。

五百 品 二卷

一卷 初

明應五年丙辰正月朔日初之、日朝七十五才。

二卷 末

明應五年丙辰二月十一日、七十五才日朝花押。

右爲廣宣流（原本布之字無）所願滿足也、以此功德力師父母自身及法界衆



生皆共成佛道、別爲慈父妙善成等正覺也、老耄如此、興行後見雖憚徒送時日虛受信施爲補之見聞處注置也、損字落字後輩可被糺之歟、泣々染筆意趣如件。

人記 品 一 卷

一 卷 初

明應五年丙辰二月十一日初之。

一 卷 末

明應五年丙辰二月廿八日、七十五才日朝花押。

願力書寫力及法界衆生、師父母自身皆共成佛道。

法師 品 三 卷 (二無奧書)

一 卷 初

明應第四乙卯七月七日。

一 卷 末

明應三年乙卯七月廿日、七十四才日朝花押。

右拭老眼意趣偏爲令法久住也、乞願以此功德相當日軌尊師成正覺、乃至四恩法界平等利益。

三卷末

明應四年乙卯八月廿四日、七十四才日朝花押。

右爲廣宣流布本化所傳令法久住利益法界也、別尊師日出日軌並慈父妙善悲母妙秀殊爲養母妙久今日所當日宣等一夕出離生死證大菩提也、去七月六日雖始之、中途發病徒送時日了、雖然慮外得暫時平癒逐寫功早、老眼蒙昧不可稱計、但爲四恩法界又爲補施也、懇志可哀、後見嘲哢憚入候如件。

寶塔品 四卷（二四五無奧書、三欠本）

一卷初

明應三年乙卯八月廿五月初之。

勸持品 一卷

一卷初

明應三年乙卯十月初之。

安樂行品 三卷（二三無與書）

一卷 初

明應三年乙卯十一月九日初之。

涌出品 五卷（二三四無與書）

一卷 末

長享二年戊申三月日、日朝花押。

於片阿澤行學院書之。

右爲尊師日出三年菩提也、乃至法界平等利益。

五卷 末

明應二年癸丑十一月晦日、生年七十二才日朝花押。

右日延聖人第卅三廻翌年寅年也、余旣極老也、豈待其時乎、剩兵亂競起了、報謝之志依難默止、只任自力如形備法施者也、涌出品相應併在師弟懇志、老耄之上見聞定有誤者歟、只以懇志所備報恩者也、乃至四

恩法界平等利益。

壽量品五卷、(二三四五無奧書)

一卷末

明應二年癸丑九月十六日、日朝生年七十二才花押。

右爲養母妙久善提也、以令法久住志注之了、冀冥顯三寶哀愍納受所願  
滿足云云、願以書寫力師父母自身及法界衆生皆共成佛道。

隨喜品三卷、(二三無奧書)

一卷初

明應三年甲癸三月六日初之。

藥王品三卷、(一三無奧書)

二卷末

明應第四歷三月十六日、七十三才日朝花押。

右爲廣宣流布大願成就也、以此功德四恩法界平等利益、別而今日所志  
悲母妙秀伯母妙久、速疾解脫頓悟涅槃而已。

妙音品一卷

一卷初

三月廿八日。

普門品二卷（二無奧書）

一卷初

廿日初。

嚴王品一卷

一卷初

五月十八日初之。

勸發品二卷（一無奧書）

二卷末

明應第四乙卯六月廿日、七十四日朝花押。

右爲令法久住拭老眼奉書寫者也、仰願者依此功德、師父母自身及法界衆生、親疎遠近等皆共成佛道、別而今日爲日軌尊靈菩提也如件。

開經私二卷（一上無奧書）

三卷下末

文明十三年辛丑八月十三日。

右初秋廿一日初之仲秋十三日結願了、惣爲廣宣流布令法久住、別寶塔勸進沙門日用爲二世所願、皆令滿足所修之也意趣如件。

結經私二卷（上無奧書）

下卷末

文明十一年己亥九月時正書之訖。

於身延山久遠寺行學院、愚見之趣抄物撰之、願以書寫力師父母自身有緣無緣等皆共成佛道。

玄義事三卷（二三無奧書）

一卷末

長享三年己酉三月十八日、日朝花押。

右依學侶之望談之、及七句企此所作非無憚、雖然時日難默止、亦爲補

施談之書之者也、後見顧此志可有之廻向者歟、仰願者以此功德、別爲  
日出日軌兩師、將又相當妙久卅三廻擬之早、惣在法界衆生平等利益、  
化功歸已故日朝臨終正念即詣靈山意趣如件。

# 原始佛教々團に於ける

## 平等思想と其歸結

結 城 瑞 光

### 一、古代印度の階級制度

印度は古代から絢爛な精神文化の叢苑として幾多の宗教、哲學、文學を産んでゐる、彼の神秘的な天啓文學である吠陀や、深義を藏める奧義書、高雅を誇る大敘事詩、扱は千古不滅の人格に幽遠限りなき救世の教義を説ける佛教等々枚擧に遑ない程夥しい産物である。然し其等は文化史の立場から讚美も感歎も惜まないが、其の恩寵を蒙る住民が不合理な階級制度に怨詛の聲を放つてゐるのは見脱せない事實である。

アリヤン民族浸入以來先住民を征服した其の自負と被征服者を輕視する觀念とがリグ・ベーダの完成末期頃固定した差別の制度を造るに至つた、彼等の信仰した宇宙創造の神は其の身体から四姓



(Catur varuga) を分出したと確信したのである。(P.V.Purusa sutra) 所謂 Brahman (婆羅門族＝僧族) Ksatriya (武士族) Vaisya (農工商族＝平民) の再生族と Sudra (賤民) の一生族の四姓で婆羅門は最高位、以下順次に低く賤民の如きは後世に至つて Gautama dharma sutra XII には吠陀の聲を聞くことさへ禁じてゐる、然し時代の進展は此の婆羅門至上の階級差別に慊らず梵書の時代から奥義書の時代になるに従つて武士族の自由思索や、教權打破の叫びが次第に差別を名目的にならしめた、殊に奥義書の終期になれば其の本体と現象との關係に於いて現象界の存在は本体を知らざる無明より起る故に本体の梵に歸せば一切差別なき一如の境涯であると主張した事や、一般社會の階級制度に對する不平の勃發に最高權威を誇る婆羅門族は自姓保護と社會制度の秩序のために三種の經書を編纂して之が抗禦を策した、就中法經には四姓の義務及び社會的法規を嚴重に定め反動的に其の差別を力説するに至つた。

但し或る程度の變姓は認めてゐた (Vasisha dharma sastra Vol 3 or Gautam. D. S. IV. 22) 尙再生族と雖も奴隸となることがある。雜寶藏經卷四、又一生族でも自由民であるといふ。W. Hopkins 教授の Cambridge History of India ch XI P. 268 等參照。

是の如く復活的防禦的に陣容を建直した婆羅門族の策略に下三姓は習慣上の階級差別思想が手傳つて

實際の平等の世界に進出を沮まれて仕舞つた、奥義書にしても自由平等を論じて居ながら又反對に現象界の存在を欲とその結果に成る業に依ると説くために差別をも認めねばならぬ自己矛盾に陥つた一元論的二元論をも説いて居る。其の他何れの宗教哲學を見ても悉く吠陀思想の敷演ならざるはない有様であるから歸する所は婆羅門至上主義になるのである。要するに平等の世界は理想であり問題外ならざるを得ない事實は奈何ともすることが出来ないのである。

當時の人々が衷心から熾烈に自由解放を望んだことは當然であると肯かれる、佛陀の出現は實に斯る時であつた、佛教は果して絶對の平等を實現したであらうか。余は原始聖典殊に阿含部經典に現はれた事實に由つて原始僧伽の平等思想の實際に就て簡單に述べやう。

## 二、佛陀の平等思想と僧伽

佛陀は其の人生觀に於て凡ての苦惱は（差別觀も）個体的生活意志の肯定に依つて生じたもの故個人的小我と偏狹的宇宙我を否定した絶對無我の境に入れば寂靜として何者にも動かされぬ妙樂處に到ることを教へた、換言すれば人間の苦惱は其の意志の根本に於て盲目的活動（無明）があつて、それが生命の特質（欲）をなし、其の發現が仮象を生じて現生苦を受けるのである、即ち無始無終の輪廻

の苦惱は認識した因縁と不認識の業が集合して次生の苦を受くるのである、又世界觀に於ても吾人の認識に依つて世界は意義がある故、其の認識が其れ自体に於いて無明である以上當然苦の世界でなければならぬ、佛陀の苦心した所は如何にすれば此の苦を離脱するかにあつたのである、佛陀の有らゆる教義の目的は離苦の手段に外ならない、最後に於て佛陀は現實を超越して苦業の繫縛なき所謂有漏身を滅して清淨なる解脱涅槃 *Moksa Nirvana* に入り絶對自由無我の大道に没入する所にある。即ち再び生を受くることのない常住不滅の法に歸するのである。佛陀は「四諦の法を見れば欲は除かれ再び生を受くる事なき云」と言へるが如く涅槃の境に入るものは再び現實の苦惱を経験しないのである。斯く言へば頗る消極的な無活動の状態になるやうに思ふが、實は煩累のない精神的自由の世界に法の國を建設されることになるのである。此の國土の住民には何等階級的の枯枯もなく悉くが平等の法悦に潤ふのである。即ち國境もなく人種もなく況んや後天的の階級差別の如きものは認むべくもないのである。當時の民衆が糾卒として佛陀の慈光に浴さんとしたのは至當であると思ふ。此の平等海とは實に僧伽 *Sangha* なのである。僧伽とは同行者の集團（和合僧團）といふ意味で其の團體は教主、教法、教徒の三者から成立するものであるが佛教が創始ではなく古く婆羅門の教師（*Acarya*）と弟子（*Antevasin*）と神の啓示（*Śruti*）の關係に於ても見る所である、佛教は寧ろ之を襲用したも

のである、此外佛教に於ける修行の徳目などは從來の他派のものを隨宜轉用したものが多く、然し外形は似ても内容に至つては頗る相違がある、僧團の成立は佛陀鹿苑に於ける初轉法輪 (Dharma cak-  
ka pravartana) に於て五比丘の歸依に始まる。即ち茲に於て三寶は具足したのである。即ち佛阿羅漢  
が佛寶で、四諦等の教義が法寶、五阿羅漢が僧寶である、而して三寶といふ教會成立の三要素の上から  
は佛陀世尊は佛法として別にするが僧伽といふ團體生活の場合は佛陀も羅漢の一人であるから僧伽以  
外の方ではない。

衆人にして一度此の教團に加入するものがあれば教團は其の種姓や職業の何たるかを問はず悉く釋  
子 (Sakyaputrya) となつて平和と希望と努力に充滿した生活をするのである、雜阿含四十三「如天大  
雨水流隨下、瞿曇法律亦復如是、比丘比丘尼……若男若女悉皆隨流向於涅槃、浚輸涅槃」(辰四)と  
ある如く佛陀の教へに隨ふ在家出家は共に涅槃に入ること恰も洹河、耶牟那河等の諸流が大海に入つ  
て同一鹹味となるが如しとの謂である、即ち教團では人格の價值は佛陀の教化に浴するか否とに依つ  
て定まるものであるとした。故に教化に浴するものは人格價值に於て平等の地平に立つのである、但  
し必ず教團に入ることを前提として居る、入團せざる限り現世の差別は佛陀も之を認められて居た、  
猶阿含經典の諸所に種姓問題を論議して佛陀の教團に屬したものが澤山居る。

1' V.T.MahavaggaXI.29 D.N.Mahapariniibana (PI15)

二' A.N.V.99.or VI.135. 長阿典尊經 (昃九、二六)

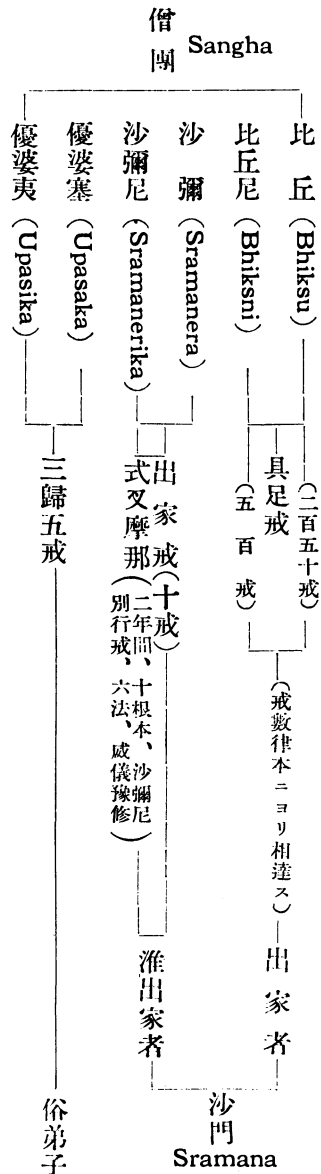
三、雜阿二十 (昃三、一四)

中阿一切智經 (昃七、八八)

長阿阿晝摩經 (昃九、六六)

### 三、僧伽の組織と理想の體現者

精神的王國たる僧伽は佛陀に依つて統一され靜平(一)にして歡喜に満ちてゐた、此の僧伽の内容組織を見るに中阿梵志品に「沙門瞿曇弟子或有在家、或有出家學道」(昃六、八〇)と述る如く僧團中には出家在家の弟子があつた、此の二衆の區別は勿論平等でなければならぬ筈であるが相當の色別があることは事實だ、彼の四姓差別の如き不公平な優劣ではないが教益の公平は缺かれて居た、(猶、不具者、病人、兵士、債務者、奴隸、不許可の子弟等は入團を拒絶された)其の種類を擧げれば四衆五衆乃至八衆九衆とある。尤も古い形の僧伽は四衆であつた。四衆とは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷である、次に一般に通ずる七衆を示せば



先づ僧團を大別して出家と在家とし出家は沙門と稱して息心又は勤息などと譯する。總じて出家者の都名である。二十歳(受胎から計算)で別解脱戒の至極である具足戒 (Upasampada) を受けて修道に退轉なきものである。但し比丘尼は女性であるからとて監督も嚴重であり、持戒數も比丘より多い。比丘が四波羅夷(姪盜殺妄等の四棄)ならば比丘尼は八波羅夷、比丘が十三僧殘(波羅夷に次ぐ重罪)ならば比丘尼は二十七僧殘等に過重である。佛陀は女子を惡魔の足械とか女子の入團許可の爲に佛法五百年にして斷三ゆるるとか頗る悲觀的な言辞を漏らされてゐる点から考へれば比丘尼の入團は好感を持たれなかつたに相違ない、然し具足戒を受ければ比丘同様出家成就者である。次に沙彌は勤策男と譯し十五歳で入團して出家戒(Pabbajja)を受け十戒を持ち比丘に仕へて修業するのである。沙

彌尼はその女性で勤策女律儀を受けるが十八歳になれば正學律儀即ち式叉摩那(Suksamanavika)の律  
を行ふのである、之は有胎無胎を檢するため二年間其の戒を豫修するのである。尙此の外資格を得て  
も二十歳に達せぬ場合、又收容するに差支へない者で今迄他教團に居たものには各々四(四)個月間の修  
行期がある、更に優婆塞は清信士、近事男などと譯し三寶に歸依し五戒を受けた俗弟子である、優婆夷  
は清信女、近事女と譯して同斷である、此の出家行者と在家信者は各自佛戒を嚴守し相互に法施(Dhī-  
madana—出家)と財施(Amisadana)の布施を交換し(五)教團を維持したのである。而して佛陀の理想  
を實現する修行に於ては在家よりも出家の方が適してゐると盛んに勸奨されてゐる。

一' A.N.VI. 135.

二' Mahavagga. I. 49. 61.

三' Cullavagga. X. I.

四' Mahavagga. I.38.

五' Iti vuttaka (本事經) 107.

#### 四、出家主義と平等の歸趣

佛陀が其理想を實現するの何故に出家を奨励したのであらうか、中阿含象跡喻經第五に「在家至狭塵勞之處、出家學道發路曠大乃至我寧可捨於少財物及多財物、捨少親財及多親族、剃除鬚髮、著袈裟衣、至信捨家無家學道乃至彼出家已捨親族愛、比丘要修習禁戒守護從解脫」(是六) 其他にも多く出家者の行位証果の便を述べてゐる、事實に於て在家者が入團しても家庭に社會に煩鎖な羈絆があるので修行も圓成し兼ねるのは當然である、一般的倫理道德を行ひ得ても解脫涅槃の實現は困難である、尤も俗信者でも比丘に近い修行をしたものであつたが之とて第四果は得てゐない、或は復、本事經(是六、三九)にある二衆証果の相違などから推して結局平等の教團にあつて在家信者は理想の實現に達し得ないことになる、故に佛陀の理想に従へば出家者ならざる限り眞實の意味に於ける人格平等は不可能である。長阿含沙門果經に「行法者彼於後時剃除髮服三法衣一出家修道平等法」(是九、一七) と出家に於て始めて平等の法を得て平等の人格に達するのである。其出家者の立場から振返つて見た時僧伽ならざる衆生は悉く差別に呻吟する哀れむべき凡夫なのである。又僧伽にしても眞の出家を除く以外は煩惱未斷の者として遂に平等の法を俱有する事が出来ないのである。斯く論究すれば佛陀の平等思想は人間生活の癡棄を實現してこそ到達すべきものであることとなる。即ち徹底した出家主義の實行に平等の世界は展開するのである。古來印度の四姓差別も此處に至つ



て眞に解決したのであるが、解決出来ないのは平等を説く教團に入つた俗信者等である。無論此の差別は人種的の侮蔑的差別ではなく梵行漏盡の涅槃に至る修行的教階制度であるから不服や抗議はないが聖果に達し得ぬ不満足はあつたことと思ふ。それも佛在世は如來の大人格に抱擁されて何等思想の動搖や質疑もないにしろ、滅後は師主如來の追慕<sup>(三)</sup>と諸佛出世の信仰<sup>(四)</sup>と出家平等の偏照に慊らぬ思想は後世の菩薩思想や大乘一般の成佛思想等を誘起したのである、而して一般に通用する人格主義の平等に迄高潮され擴充された時即ち出家主義の普遍化された時こそ佛陀の眞面目は發輝され平等論も事實に於て達成されるのである。原始佛教では其處迄は論じてゐない。

佛陀滅度より千五百有餘歲遺耀東に及んで佛使日蓮大聖、法華經本門壽量の觀心事の一念三千の法門を開示されて衆生成佛の直道を體現せられた。我等一度本化の教化に従へば出家在家、順緣逆緣の差別なく悉く同一法味を享受して等しく完全なる人格者となることが出来るのである。灌頂口傳鈔に「釋尊與我等一者本地一体不二身也、釋尊、法華經、我等、三者全体不思議、一法、全、無二差別也」(一〇二九)の聖文誰か欣奉せざらんやである。佛陀世尊、日蓮大聖に値遇することは叶はずともかゝる平等大會の眞法を受持することのできることは感激に堪へぬものである、原始佛教々團の懸案であつた平等思想は日蓮聖人に依つて確實に解決されたのである。

- 一、 M.N.38 Mahatanhasankhya 中阿三一賴吒和羅經、
- 二、 根本佛教三八四頁
- 三、 D.N. Mahaparinibbana P22. P51.
- 四、 長阿大本經（昃九、二） 增阿二十三（昃二、一四） 雜阿四十四（昃四、五五）

# 生と哲學的精神

望 月 舜 勝

生といふ語は現代思想界の流行語である。生の意義とか、深刻なる生とか、或は内面的の生とかいふ語は現代人が興味をもつて普く用ゆる語である。然し生といふことは極めて直接なる事實に拘らず、十分にその意義が促へられてゐない。元來人間が生物的の生存を保つには即ち單に生きるといふためには、自己の生活とか自己の意識とかいふものを反省するよりも、外界の事物を知ることの方が直接必要である。自己の生活内容を反省することは、低き生活の階段に於いては割に益のないことである。人間が原始的の階段を遠ざかると共に、生活が高まり複雑になり、従つて生活に種々の破綻が生じて、その結果生の内面的意義といふものが反省さるる様になつたのである。而して近頃に至つては、動ともすれば生の内面的意義とか生の體驗といふことに重きを置くが爲に、哲學の如き理論は迂遠である。生活の體驗を持つて居れば、既にその人は深刻な哲學者であるといふ風に論ずる人が出

る程である。ニイチエの如きはその一例であつて、彼は多くの哲學者を攻撃して、哲學は人生とは沒交渉であると主張したのである。これ程までに生の體驗が唱へられ、その意義が尊ばれた。

併し吾々は一步進んで考へて見なければならぬ。凡ての人が生活をしてゐる又は生を體驗するといふことは事實であるが、生活の意義を明瞭に解釋してゐるか何うか、生を體驗してゐるといふだけで直に哲學者と稱する資格があるかないか、これは余程考へて見なければならぬ問題である。

世の中には實行といふことは困難であるが、考へるとか知るとかいふことは比較的に容易だといふ。三歳の童兒も猶ほこれを知り、白髮の老翁も猶ほ之を行ひ難しと。これは理解が實行に比して容易なことを道破したものである。併し實行と對照しての理解の容易さは、或る事件或る對象については當嵌まる。例へば倫理の法則、盜む勿れ詐る勿れといふことは、小學校の兒童にも解る。併しながらそれを行ふといふことは、一生修養を積んでも困難である。理解は容易で實行は困難といふことは斯う云ふ場合には當嵌まる。しかし或る事件或る問題については實行は容易で理解は困難な場合がある。生活などといふことはその最も著しい例であらう。生きとし生けるもの皆生活してゐる。賢者愚者に拘らず善人惡人に拘らず、藝術家と非藝術家とに拘らず皆生活してゐる。而してその内には可なり深き體驗を持つてゐるものもあるが、生の意義如何といふことを理解して居るものは極めて稀で

ある。斯う云ふ場合には古人の所謂『百姓は日に用ひて之を知らず』といふ言葉が適用すると思ふ。百姓とは農夫といふ意味でなく、無學の田夫野人といふ意味である。かゝる人々でも生きてゐる限りは、宇宙の眞理に従つて實行して居るに相違ない。即ち日に用ひてゐるがその眞理を悟らぬことを言つたのである。

生といふものは何人も或る程度までは經驗し、或る程度までは所有してゐるが、その意義は解らぬ。そこで生といふものを吾々の世界觀にしなければならぬ。けれども生が直に世界觀であるとは云へない。茲に生の經驗と、生の意義とを別けて考へて見なければならぬ。世界觀といふものは生の意義の一種の解釋である。生を經驗することが直に世界觀にならずして、生の意義の解釋、これが世界觀となるのである。

然らば生の經驗といふことゝ、生の意義といふことゝ何うして別ち得るか。今一つの畫をこつて考へて見る。今名畫家はその畫をかいだこする。その畫に現して居る意味はさまつてゐる。しかしそれを見る澤山の人々は夫々皆自分の從來の經驗習慣、或は修養に應じて畫の意味に對して種々様々に經驗する。併し畫に表はしてゐる意味はさう澤山ある譯ではない。ゲーテの最大傑作ファストは今でも謎と稱せらる位に困難な文學的作品であつて、これに關する註釋評論を輯めたならば、立派な一つの

圖書館をなす程であらうが、しかしながらファスト劇に對する解釋は、種々雜多であらうとも意味そのものは幾つかはない。一つに纏まつたものであらうと思はれる。斯くの如く意味そのものと意味の解釋とは違はねばならぬ。意義の解釋は解釋せんとする個々人の心理上の働きであつて、その個々人の心理上の働きの向ひゆく對象は意義そのものである。現代の哲學は經驗と經驗の意義、或は心理上の作用とその作用の對象たるところの内容とを分ける。されば世界觀といふものは生の經驗そのものでは直に出來上るものではない。それは生の意義更に廣く世界の意義に對する解釋でなくてはならぬ。

所が生の意義といふものは決して單一なものではない。吾々の評價作用心理作用が向ひゆくべき對象となるものは種々様々である。科學上の眞理、道德上の善、藝術上の作品即ち美、或は親が子を愛し國民が國を愛する如く愛の對象たるものもあるに相違ない。即ち吾々の評價の方向に種々ある如くそれに對應して評價さる種々様々の價值とか意味といふものがある。即ち生の意義は決して唯一つのものではない。單義的のものではなくして多義的のものである。吾々が眞の生活をしよう。換言すれば意義のない生活に比較して一層意義ある生活、價值のない生活に對し一層價值ある生活をしようと思へば、何うしても吾々の生活の經驗の向ひゆくべき對象物言ひかへると生に意義を與へるもの、多

方面なる多義的なる生の意義を或る程度まで統一しなければならぬ、人々が深刻なる生活であるとか或は内面的生活であるとか或は精神的な生活といふ稱び方はこれは通俗の言葉であつて皆生の意義を現はそうとの要求から出たものである。外面的の生活に對して内面的の生活といふし、外面内面といふことは一体空間的な語であるが、我々の生活は別に空間ではない。生活について淺いとか深いとかいつても然り。これ等は皆物質を現はす語から借りて來ただけであつて、實はより意義ある生活、より價値ある生活を然らざるものより區別せんが爲にいふのである。

斯く我々の生には種々の意義を含んでゐる。その意義は多義的であるから我々はそれを統一しなければならぬ。この統一の仕方に種々ある。その統一の仕方の種類によつて、或は宗教的世界觀も生れ或は詩的世界觀も生れ、哲學的世界觀も出て來る。世界觀の種々の模型は生に含まれた意義の統一の仕方の相違に依存するのである。宗教的世界觀詩的世界觀は哲學的世界觀に對して言ふならば意義の統一が充分に理論的でない。意義の統一が理論的でないといふことは概念を統一の機關として利用しないことである。更に學的に言へば範疇的統一をしないといふことである。これに對して哲學的世界觀は生の意義を範疇的に統一することである。宗教的世界觀詩的世界觀はその非範疇的の統一である。

斯くの如く哲學的世界觀は生に對する我々の反省であり、生の理論的統一である。従つて哲學的精神の出發點が生活に在ることは明かである。然らばかゝる哲學的精神は如何にして出てくるのであるか。吾々はこれについて以下少しく考察して見なければならぬ。若し吾々の生活が極めて圓滿であり滑かなものであり何等障礙なく進行するものであつたならば、生活に對する反省といふものは起きないであらうと思ふ。生活に對する反省から哲學的精神が起るのであるが。生活に對する反省の起る條件が何であるかを更に根本的に考へると、それは生活の破綻といふことが更に根本的の條件であらふと思ふ、換言すれば生の破綻といふことが一番根本の出發點によることと思ふ。一個人としても深刻に生の意義を反省するといふのは生活の行詰りの時である。八方塞り袋小路で出て行く道がないからである。佛教でいふと所謂大疑團が生ずるのであるが、併し疑ふといふ前に生活の破綻行詰りといふことがなければならぬ。即ち生活に破れがあるから之を繕ひ直さうとして反省するのである。民族に於ても亦然り。支那の状態を見ても希臘の状態を見ても獨逸の状態を見ても、社會の秩序が整つて國家が安泰であるといふ時には却て深刻な哲學は生れない。支那に於て哲學的思想の最も隆盛であつたのは所謂春秋戰國の時代であつて、社會に統一がなくなつて諸子百家競ひ起つた時代である。希臘に於てもソフィスト、プラトン、アリストテレス等の出た頃はもう末期であつて、社會が紊れて生活



の不安時代であつた。希臘哲學の起源はもつとそれより古いけれども、その古い頃の希臘哲學はたゞ自然界の現象を眺めて宇宙は地水火風から出来てゐるとかいふ風に、自然哲學といふ形で現はれたけれども、人生そのものを含めての哲學的の思索は未だ起つて來なかつた。それは物理を中心としての研究であつたが、ソフィスト以來始めて人間生活を入れて研究したものである。獨逸に於てもカント・フイヒテの出た頃は、獨逸が四分五裂して佛蘭西に始終苛められて居つた。イエナ大學の如きは奈翁に壓迫された爲に閉校の憂き目を見たといふ様な状態であつた。ヘーゲルの如き自分の處女作を書いてゐる時にその町に佛蘭西の軍隊が駿入して來たのを見て、馬上の世界精神と呼んだと云はれてゐるのは有名な話である。これ等は社會が亂れて來たから人間の精神が反省的になつたといふべきであらう。斯の如く個人に於いても民族に於いても生活に何等かの破綻がある時には、それを繕はうとして反省が生じて來る。故に個人生活に於ても民族生活に於ても比較的生活が樂で何等生活の破綻を経験しない様な亞米利加などに於ては哲學は進歩しない。米國人は單に生活して居る人間であつて、生活に對して反省を持つて居ない人間である。米國人が非哲學的の國民であるといふのはその爲である。元來意識そのものが鋭敏に動くのは吾々の精神の平衡状態の破れた時に於てである。獨逸のシエリングといふ哲學者は、物質は精神の平衡状態、物質は眠れる精神、意識は破れたる精神だと云つた。

ベルグソンも意識は生活の破綻に於いて生じたものである。だから生活が秩序正しく無雜作に出来る時に於ては意識は眠つて居ると考へた。そこで生活の破綻と共に生活の破綻を繕はうと云ふ要求から反省意識といふものが鋭くなつて来る。そうして生活の破綻が繕はれずして苦悶してゐる最中には、生活の原始的な極く昔の状態を慕ふのである。人間で云ふならばよく苛められる人間は平和な樂しげな少年時代を慕ふ、民族でいふならば『自然に歸れ』と云つて極く素朴な原始的状態を慕ふのである。併し吾々としてはもはや自然の状態に歸る譯には行かぬ。一たび生活が破れたる以上は破れざる以前に歸らふといふ譯にはゆかぬ。然らば生活が破れたまゝにじつと止まつて居ればいかといふと、それも不可である。後退も停立もいかぬ。然らばさいつて前進するには未だ目當がつかぬ。こゝに於てか哲學的精神が目覺めて來り、今日の生活状態を反省し批判して、それを繕うて行かう、即ち前進せんが爲に現實を反省する。即ち哲學は批判的精神となつて現はれて来る。生活の破綻に即して出て來る批判的精神、これ即ち一種の哲學的精神である。而して哲學は現在の秩序傳統を盛に批判するけれども、批判は目的にあらずして、或る終極のものを求めやうとするのが批判である。希臘のソフィストの如くたゞ攻撃のみでなく、プラトンの如く構成のための批判である。吾々が哲學的精神の發生したといふ時に於ては、一度立つた黄金境たる過去の状態を慕ふてゐる譯には行かぬ。現實の

破綻したる渾沌たる狀況に甘ずる譯にも行かぬ。兎に角不安ながら將來に出發しなければならぬ。がそこには羅針盤と海圖なくしては荒海に乗り出す譯には行かぬから、先づ批判をしやうといふのでカントが批判を書いた時、世の中の懷疑派はどうも航海が危険であるから航海せざるに若かずとして船を陸に上げて仕舞つた。これは懷疑論者虚無論者である。それから兎に角吾々はじつとして居る譯には行かぬから、羅針盤も海圖も無しに冒險的に航海しようといふのが獨斷論者である。批判的哲學者は懷疑論者の如く航海を止めてしまはず、海圖も羅針盤もなくして冒險的の航海をするものではない。羅針盤と海圖とを用意して而る後に除に船旅に出るのであるとカントはいつてゐる。これは即ち進まんとする爲に先づ批判する態度である。基督教ではアダムイブが智慧の實を食つたから天國から追放されたといふが、實は吾々は下界の苦悶のうち破綻のうちに智慧の實を食つたものであつて、食はざる以前は無心の状態である、その時に於ては天國も眞の天國にあらず、地獄も眞の地獄ではない。故に生活の破れざる以前の原始的素朴の生活は必ずしも黄金境であるとは言へない。それは反省以前の原始的の生活と云はざるを得ない。吾々は生活の統一を求め生活の意義の統一を求めなければならない、破れざる以前の子供らしい時代、アダムイブの天國時代を慕ふべきではない。一度破れたる生活に這入り込んで、努力奮闘、統一ある生活を見出さなければならぬ。そこに哲學的精神があると思ふ。

## 重罪犯にて刑務所にある

### 某眞宗徒に送れる手紙

綱 脇 龍 妙

御手紙を嬉しく拜見しました。御健康で益々懺悔生活の勤務を勵まれてゐるのが何よりです。人間は考へて見るに一生懺悔です。これが別らずに自分だけは正直者善人の積りでゐるから間違が起るのです。人をも恨むのです。お釋迦様といふ様な、非常な崇高な人格者、大きな正直な人を標準にして吾人を側量して御覽なさい、大分立派な積りの自分が、如何にみすぼらしく、穢く、小さく、哀れな、穴があらば這入りもしたい程の、眞に深障深重、愚痴暗鈍の凡夫だといふことが別ります。この意味で沈香も焚かず屁もこかずして、而も自分免許の善人であるよりも、過つて大罪を犯して、然もそれが動機となつて翻然悔悟して懺悔生活に入り、眞實の救濟をうけ得た者の方が、どれだけ幸福であるか別らぬものだと思はれます。

貴君！、貴君は主人殺し斬取り強盜等の大罪惡を犯し、後良心の呵責に耐へず齟齬僧となつて淨き懺悔生活に入り、最後に二十一年の長年月を凄慘なる苦難と闘い、遂に耶馬溪中の三百八間の大隧道を開鑿した前名市九郎僧了海の事をお聞きになつてゐるでしよう。あれです。あれです。私共の行くべき路は實際あの外には無いのです。只自發的にするのと、強制的にさせらるゝのとの異いはあつても、結局同じ所に進まねばならぬと思ひます。

私は佛門に入つて、自己が罪障深重の凡夫だといふことが、段々深く別らせらるゝ様になりました。過去生々を考へるこゝ、何をして來てゐるやら別らぬと思ひます。私は深敬病院を經營しかけて、今年二十四年になりますが、初めは氣の毒な人達を救ふといふ念が強かつたが、段々に自己の凡夫といふこゝが悲しくなつて、これは懺悔滅罪の隧道開鑿だといふ心が強くなつて參りました。それから他から誹謗されようが、中傷されようが、當然だと思ふ様になり、否寧ろ喜ばねばならぬと思ひ得る様になりました。それで私は此の命のあらん限りは、日本に癩病が盡きるまでは、此隧道を堀りつけて行かねばならぬと思ふ様になりました。私はこゝに根本懺悔の大方針を建てゝゐます。

御蔭に、私は此頃、自己の心の奥底に、少しく眞の光明がさして來た様な氣持が致します。私は毎曉約一時間程、佛祖三寶の御前で、眞劍に、大聲に、一々文々に、法華經の半卷宛を讀誦し、日蓮聖人

の遺文一頁計りを拜讀し、それから南無妙法蓮華經の御題目を數百遍、これも心ご力とを罩めて唱へます。それから又昨年から高臺に安置してある久遠本佛殿といふに參り、立像釋迦牟尼如來の御前に、至心三禮の後、法華經方便品、如來壽量品偈、常不輕菩薩品偈を、殆ど聲涙共に下るといふ様に感激を以て讀誦し、唱題數十遍、祈願文、四弘誓願等を高唱して殿堂を出でます。此時宛も東方富士山と此の身延山との間にある天子ヶ嶽といふ高い山から、爛爛として騰る朝暉に向つて、靜かに如來神力品偈を讀誦し、唱題十遍計り、燦爛たる太陽の光明を佛陀の眉間の盡十方に輝く光明と假定して、眞すぐに額にびつたりと當て、冥目合掌して、自己内性の佛性の發揮を祈り、更に如日月光明、能除諸幽冥、斯人行世間、能滅衆生闇、不染世間法、如蓮華在水ご一心に唱へます。これは私が永年變らずに續けて來た行事であります、それから境内の掃除を手傳ひ、朝の食膳につき、一同と共に合掌して、本佛無縁の大慈悲は、罪障深重の我等にも、御國の居住を許したまふ。

『民の骨を碎ける米、人の血を絞れる酒』鮮光淨水皆悉く、本因菩薩道の御功德に非ざるは無し。願くば如來恒に我が上に在しまして、哀愍加被を垂れたまへ。常念痴慢を離れ、貪慾瞋恚を去り、深敬の行に住し、國土莊嚴の務を勵まん事を。

と、至心に唱へ、且つ祈願しまして、感謝の内に食事を終り、それから事務に移ります。雑多な、終

日忙しい用務の間に、新聞雜誌位を讀みますが、雜誌も忙しい爲に、到底氣のきいた物は讀めず、況して書物は哀しいかな滅多に讀む事が出来ません、夕飯後又本佛殿に參り、四境靜寂の間に本佛釋迦牟尼如來に面奉し、深達罪福相、遍照於十方、微妙淨法身、具相三十二讚文を心の中に唱へ、靜に唱題を修し、或は禪定三昧に入り、心鏡を淨拭し、皆懺悔を修し、如來禪寂の妙境地を、ごくおぼろげなれども、少分味はして戴く様な、何ごも謂い様のない、感激感謝に満ちた好い氣持の三十分乃至一時間を濟まし、それから其日の殘務を爲し終りて佛陀に感謝して寢に就きます。

以上が私の日課であります。事務が大層停滯したり、旅行する時等は、無論此れが障げられます。が、有難い事は、最近私は、御蔭で私は何となく心が日光の照り映ゆるが如く、蓮華の美しく咲きいでゐる如く、歡喜の心自づと身に充滿してゐます。随つて總てに對し感謝感激の心を禁ずることが出来ません。これまで、家庭の者、同居の種々の人々に對しても、兎角不懣の心が起り、それが何となく煩悶となる事もありましたが、近來何事にも不懣を感せず、歡喜怡悅の心に満ちてゐます、随つて滅多に小言を謂いません、それで家人も皆氣嫌好くしてくれ、それ〴〵の任務の仕事も着々と、命せずして運んでくれます。家庭が先づ我此土安穩、天人常充滿となつて來ました。在院患者が、又實に勤勉に働いてくれました。種々の野菜が實に豊富に出來てゐます。紅白紫黃様々の草花が、院内の

限々に、實に麗しく咲き満ちてゐます。柿栗梨桃くるみ無花果等の果物迄が、彼所此所と熟する様になりました。禮拜堂(天鼓殿)には晝夜と無く、太鼓に和して御題目の聲が絶えません。幾棟の病室からは笑ひの聲が、何時もさゞめいてゐます。眞に園林諸樓閣、種々寶莊嚴、寶樹多華果、衆生所遊樂、諸天撃天鼓、常作衆伎樂とは、一般世間からは兎角不快の感を以て觀らるゝ、この私の深敬病院の事だと心の奥底から涙ぐましい程嬉しく感ずる様になりました。

如來神力品偈の『日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人、世間に行じて、能く衆生の闇を滅し』の意味が、漸くの事に別りかけて參りました。自己の心の佛性が、神殿のほがらかなる鏡の如く、大空の太陽の如く、秋夜の満月の如く、煩惱雜念の雲霧、執著の塵垢、我慾の糞穢を、綺麗すつかりと捨て去る時、そうして、其輝きの心にて人々に接する時、對者は又其人の心の太陽、月、鏡に照されて、自づと、其人の様に、心の闇黒を去り、清淨光明の歡喜心に住することが實際だと、確信する様になりました。

『諸の惡は作す莫れ、衆の善は奉行すべし、自ら其意を淨くす、是れ佛陀の教へ』といふ七佛通戒偈の有難い徹底した教の意味が、大分別つて參りました。

日蓮聖人が、四條金吾女房御返事に書かれてある『明なる事日月に過ぎんや、淨き事蓮華に勝るべ



しや、法華經は日月と蓮華となり、日蓮又日月と蓮華との如くなり(故に日蓮と名く)』の金文の意味も同様理解し得らるゝ様になりました。

無學無智なる私は、斯くして根本佛教の意味も、實大乘法華經の意味も、日蓮聖人の唱題成佛の意味も、全く根底に於て同一であると理解し得て、眞に安心し喜びに堪へません。

貴君、貴君は刑務所にゐる事を、刑務所といふ文字や詞に固執してはいけません。自己が情け無い地獄にでも墮ちてゐる様に、又他が無理やりに墮しこんだ様に執念せられてはいけません。刑務所こそは眞に貴君が救はるゝ寂光淨土ですよ。佛陀の光明其物ですよ。救済に要する唯一の綱ですよ。貴君の目覺めが、信念が、此處まで來ねば駄目ですよ刑務所があつたらばこそと、歡喜感謝の涙を絞るまで來ねばなりませんよ。

貴君、貴君は先づ數秒時間乃至一分間でよろしい、佛陀の光明の前に照されて淨潔の心になつて御覽なさい。何に佛陀なんて存在が別らぬて、愚らぬ屁理屈に拘泥したものですなあ、面倒だから、それでは東山から出づる太陽でよろしい、何科學が許さぬ、其科學なる物が哀れなものさ、足許の草一本だとして科學で眞の説明が盡さるゝと思ふてゐますか。小さな頭で佛陀の博大なる悟境を疑うものではありません。先づ佛陀の智慧は太陽の光明の如く、其慈悲も太陽の熱の如きものであります。太陽に

對つては誰しも明るさと暖かさとは直感しましょう。なぜ太陽が實在するから、なぜ光る、なぜ暖い、そんなことは今の問題ではありません。兎に角下らぬ理屈、凡慮をすてゝ、清淨光明の心を起して御覽なさい、次に其心を一分間から二分間、三分間と持續してご覽なさい、毎日此を練習して精々此の時間の延長を計つてご覽なさい。此の間一切を打忘れて、太陽の如く、明月の如く、明鏡の如く、蓮華の如く、清淨光明の心の中に没入して行くのですよ。其所に貴君は何時となく、新しき眞の自己を發見するでしょう。そうして貴君は根本から救はれます。自己の心の中に何時の間にか佛陀が御貌を浮べたまうを發見するようになります。

貴君、貴君は無理に、一日も早く此場所を逃れよう、一日も早く放釋されようなどと思ふ様では駄目です。それでは矢張り救はるゝ日は容易に來ません。總てを佛陀に任せたまつり、前述の光明の心、歡喜感謝の心のみを續け、一切を只命ぜらるゝまゝになさい。私は、貴君が、已に斯に來つて、私の至心に祈り、且つ勸むる意味を御了解ある事と信ずる。

貴君は、私が先年贈りました佛敎聖典中の、鶯窟摩（指鬘外道）の事を熟讀なされたでしょう。釋尊が前月九十九人も人を殺した彼に、『我生れて已來、曾て人を殺さず』と唱へよと仰せられました時に、鶯窟摩は愕然として驚いて涙を垂れ、『私は大唐人であります』と泣き乍ら申すこゝ、何ぞ釋尊は

仰せられましたか、實に釋尊の仰せは、『生れてとは、懺悔に依つて、眞實の汝が生れたのだ、それを謂ふのだ』とあるではありませんか、私共は鴛窟摩と共に、釋尊の御前にひれ伏さねばなりません。それでも未だ眞實の懺悔が出来ませぬか。私は刀を持つては、未だ人を殺しはしませぬが、隨分と言辭や心を持つて、他を傷け害して來ています。現世の身三、口四、意三の罪業だけでも、嚴密に計算しましたならば、確に鴛窟摩以上と謂はねばならぬかも知れません。鴛窟摩は、實に、氣の毒な動機から、澤山の人を殺しましたが、眞に同情すべき罪惡と謂はねばなりません。私のなどは佛教修行者こか、ヤア教化者だとか申し乍ら、邪心、穢心、名譽心、慾心、嫉妬心等から、長劫に罪を作つてゐますから鴛窟摩以上に懺悔せねば救はれぬと思ひます。

貴君！、貴君の造つた罪は、鴛窟摩の罪の何分の一、何十分の一であつたらうが、根本懺悔をせねばならぬ事は同一です。願くば大釋尊の御前に、至心懺悔して、光明界裡に新しく、美しく、生き／＼と一日片時も早く生れて下さい。非常な忙しさですから、これで筆を止めます。折角寒暖を注意して御自愛下さい。遙に私は、此の身延の靈地から、貴君が、如來照顯の下に蘇生せらるゝのを眺め、且つ祈願してゐます。

南無釋迦牟尼佛 南無釋迦牟尼佛 南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經

# 日持上人の遺跡を訪ねて

望 月 是 順

我が、海外布教の先驅者たる、日持上人が、一天四海皆歸妙法てふ、聖祖の理想貫徹を期し、不惜身命の覺悟を持つて、言語も通せざる夷地を指して、永仁三年正月元旦（四十六才）孤影漂然として、故郷駿州庵原郡松野邑を發足し、北海の荒海を超へ、北海道より、樺太を経て、滿州の地に渡り給ふてより、既に六百四十餘年の星霜を重ね、現在北海道の地には至る所其の靈跡を存するも、我が樺太には遺跡として傳ふる所、纔に西海岸に一ヶ所を止むるのみ、それも人口に喧傳せらるゝに至りしは極めて最近の事である。幸にして、今夏八月下旬、樺太日蓮宗布教師大會に列し、同志十餘名と共に、此所に參拜する事を得しは實に幸と思ふ者である。

樺太東西兩沿岸を縦貫せる二大鐵道中、東豊原、西眞岡の間に横斷線あり。西海岸線は本斗ほんとを起點として、目下終點野田迄開通し、眞岡より八ツ目の驛、本斗より三ツ目おこちが阿幸にして、持尊の靈跡は

此處に在り、眞岡より一時間半にして達する事が出来る。樺太の沿岸は出入少く、従つて良港に乏しい。阿幸の邊、海と山と接近し、纔に谷川の傍に寒村ありて、漁業に従事してゐる。驛を中にして、部落へ四丁、御靈跡へ二丁餘ある。

惠まれし天氣を喜びつゝ、御遺跡を訪へば道路より數丈、山手寄りの高所に、木もて作られた階段あり。傍に二間に二間半の一堂あり、階段を上れば、正面に木柵を圍らし、中央に題目の寶塔と、二個の大石起立するもの、是れ日持上人の小舟に棹指して、何れを目當ても無く、今の北海道の地より、荒海を渡りて漂着せられた地である。一同讀經、祈念暫くして、眼下を見れば、北海の白波磯を洗ひ、數百年變り無く、寄せては返し、返しては復寄する様、日持上人が此の浪に搖られて此地に着かれし事かと思へば心無き波にも事問ひ度き親しみを覺へる。更に漂着せられし上人の苦辛や如何に、現在文明の世に布教する事さへ尙且つ難事なるより推して、六百餘年前の事が偲ばれ、知らず目頭の熱するを覺へ去り難くある事數刻、辞して阿幸の部落を訪問する。

部落は戸數約五十ばかり、而も宗門の人無く、眞宗の人に非ずんば禪宗の人であるが、皆熱心なる日持上人の鑽仰者であると聞くもなつかしい。三浦某氏の宅を問ふ、同氏は、靈跡保存に丹誠せられし人である。來意を告ぐれば、五十才位見るからに質朴な主人は、一行を迎へて快く、尋ぬるが儘に、

今日迄の苦心談や、奇蹟を物語つてくれた。

由來樺太は岸石に乏しく、現今秋の漬物石なども遠く北海道より輸入し、一貫目何程と買ふ有様、内地の如き至る所、遺跡靈跡等に巨大なる碑ありて往時を傳ふるも、此地其便無く、加之往昔未開野蕃の時代なれば筆紙の残すべし便りもなく、日持上人來島時の如き、如何にして其の足跡を後世に遺さんかに苦しまれしか想像に難く無い。現在遺跡に存する石の如き、此の附近に見るを得ざる大石なるも、其質弱く爲に上段より碎けて、二個並立するの現状を呈してゐる。従つて、石面を調ふるも、文字の見るべき無く、然も是を持尊の遺跡と傳ふるに至りしには、一つの奇談がある。之を三浦氏の言に聞く、部落民は大体北海道より移住せる者で、此の石に就ては先住者よりの口傳へとして傳へられし所ありしも、大正十年前後の頃、部落民全体に夢告あり、而も一夜ならず三晩も、「我は本化沙門蓮華阿闍梨日持なり。」と告げ、海水に浴しては讀經し、經石の所へ至り、或は夜中、高聲に法華經を讀誦する事數夜に及び、村民聲を尋ねて至るも姿無く、一同不思議に思ひ居たる所へ、眞岡法華寺某師來り、之を聞きて、日持上人の徳を讚し、法要を營む、村民亦深く感ずる所あり、一回發企して、千數百金を投じ、大正十五年現在の堂宇を建立せるものなりといふ。其の碑の近在得難き石なる故持ち行きて道標にせんずなんどの企てあり、數人して動かさんとするも能はずなんどこもいふ。石の周

圃、最近雜草生ひず、七葉の笹生ひ茂り、遠近の者奇となし、持ち歸つて、藥となすに不思議に卓效ありともいふ。是は三浦氏の物語りであるが、此の地が上人の靈跡なる事は、種々な方面から考へて確實らしい。

昨今樺太廳に於いても、六百余年前、上人の來嶋せし事は、樺太開發上、非常に意義深き事なりとし、此の地に紀念碑建設の企てあるやに聞いてゐる。我等も全嶋布教師大會に於いて、約二万圓の豫算を持つて、上人の銅像建設を發企し、已に大半の資金を得、昭和六年の御遠忌迄に完成すべく目下努力中である。

日持上人に依つて、先づ題目の聲を印した我が樺太は、目下五箇所の寺院と、十三箇所の布教所を有し、更に將來の理想に向つて、法陣を張つてゐる。聽ては樺太全嶋に法鼓の音の響き渡る事であらう。

更に各地教會の狀勢等は次回に報ずる事となし、遠く懐しの身延の有様を胸に描きつゝ擱筆する。

(昭和四年十月十八日)

# 身延の實相

渡邊正教

近時文運の發展に依つて、諸種の思想が千様萬態の形式及び内容を以つて、社會の各方面に現れ來つた。是と同時に諸種の社會的運動も、各所に出沒してゐる。學としての世界も、無限なる人生の智的欲求に依つて、瞬間の止みもなく、進展の歩を進めつゝある。此間人類が直接間接に、享受しつゝある福祉と災厄とは、亦枚擧に暇なき有様である。吾人は如斯き文化の惠澤を享けて、生存を意義付けて行くのである。然し乍ら吾人は、更に一層深き考察を社會及び人類の上に、施さなければならぬ。何となれば此等の社會的思想及び運動は、悉く唯物史觀の上に立脚せる故である。吾人は物質文明の背後に、何ものか、より已上の偉大なるものを見出さなければならぬ。無論物質文明と雖も、永い歴史の中に、高遠なる思索の産物として、實に人生の慶福を創造しつゝ開展し來つたものであつて、其の恩澤や亦大なるものがある。従つて吾等は、瞬時と雖も、物的要求を離れて、生存を認容され難



きは、明白な事實である。然し吾人は是れを以て、人生の總てなりと満足する事は出来ぬ。何となれば、物質文化のみを以て人生々活の圓滿完全を期する事は不可能なるが故である。此に於てか吾人は現實としての世界に、精神文化の光明ある事を認容せねばならぬ。即ち永遠なる歴史の中に、燦爛たる光明を放つて、而も最高の價値を保有し乍ら、常に物質世界の指導原理として存在するものは、精神文化である。故に物質的社會は、精神文明の偉力に依つて、常に淨化せられ、理想化せられつゝある事に氣付かなければならぬ。精神文明も亦た多種多様の形式、及び内容を持つてゐる。即ち其の高遠なる理想を深遠なる哲學に求め、人間生活の根本要件としての倫理に求め、此れを最高理想の表現としての宗教に、求めんとするありて一様ではないが、兎に角斯る物的と心的との兩要素が、人間本來の欲求に依つて活動し、流轉し來つたものが社會史の頁を繰つたものである。

如斯き複雑多岐なる現代に於いて、吾人は何處に絶對の安住所を求むべきか、其の歸結に迷ふのである。一切の世界的民衆に、最勝の安全地帯を與ふべく、古來幾多の偉人聖徳が現れ、各自の主義主張を携へて、間斷なく、吾等に警告を與へ、覺醒を促し來つたのである。此間に在つて、吾が青史が生んだ偉人、否世界の文化史上の一異彩として、鎌倉時代を震撼せしめた聖人は、日蓮其人である。即ち彼が六十年の血涙の生涯は、實に人類愛の結晶であつた。或る時は北海の孤島佐渡の寒國に、道

義的國家の衰運を歎き、或る時は伊豆の伊東に「數々見擯出」の聖文を讀み、更に龍ノ口の刑場に「我不愛身命但惜無上道」の金口の説法を體驗して、末法救世の佛勅を遂げ、實に悲風慘雨席暖まる暇なき、奮闘史は悉く吾々人類に對する慶福の祈りであつた。

即ち吾等をして、純淨なる宗教的情操の試練の中に、信仰意識の力強い、而も永遠的な自覺に依つて、現實生活の中を流るゝ、眞の生命を悟らしむる爲であつた。

此の原理は、三千年來大聖釋尊に依つて顯示せられ、法華經に依つて傳へられ、聖日蓮に依つて躰顯せられたる、所謂人生其のものゝ本然の價值への自覺で有らねばならぬ。故に「法華經」は釋尊の中心思想を述べた、全人類への福音書であり、日蓮上人は法華經其のものゝ活動体として、人類の生存競争裡に、躍動せられたる躰験者である。故に釋尊の説ける永遠の眞理は、單に思索的觀念の對象ではなく、大上人に依つて證明された、宗教意識の極致である。故に吾人は、全的生活としての人類社會を、此の尊嚴なる信仰に依つて、統一し美化して行くべきである。此の聖者が畢生的事業の總結として、晩年の身延山の生活がある。

廿有餘年間、權勢の壓迫と、重疊たる迫害を廢して絶叫し續けた聖人が、一朝漂然として山間に退かれ、爾後九ヶ年間沈思默禱の生活を續けられた事に對して、吾人は深く思を致すべきである。

聖人の一代を通しての主義は、立正安國である。安國の範圍は、地理的の日本に限られたものでは勿論無い、精神文化に依つて物質的世界を淨化せんとせしものが、所謂立正安國の叫びであり、信條である。其の精神文化の根本道場として選ばれたのが身延であつた。如斯考へ來つた時、身延は獨り聖人に取つて「難忘山であり、永久棲神の山」であるばかりでなく全人類の等しく渴仰し、味ふべき聖地である。「多くの月日を送りて、讀誦し奉る法華經の功德は虚空にも餘りぬべし」と言はれ、「此の砌に臨まん輩は無始の罪障忽ちに消滅し、三業の惡轉じて三徳を成せん」とも仰せられたが、雄大崇高なる山河は自ら實相不滅の月を浮べ、山色宛然として久遠本佛の常說法教化の法音を傳へ、忠孝一本の倫理的基調を示す聖跡は道義的國家の建設を豫想し、佛凡一如の絆たる唱題の聲は萬邦平和の鍵鑰を示すものである。實に靈山一會嚴然未散の表象としての身延、穢惡充滿の現實界に精神的王國を活現すべき、最高至上の聖地として愛すべく、渴仰すべき山、形を去つて實の身延、其處に聖者の御魂は棲み、信仰の道場として、文化の中心としての尊さはある。

—— 以上 ——

筆  
と  
心

木村 鍊 戒

秋の一日、私は机に向つて、金色に輝くペン先を通じて思索のまゝを、白い紙上に走らせてゐた、想ひはそれからそれへと推し進められて行つた。書き記したい事は頭にみち溢れてゐた。幸にペンと手は従順に大脳の命に服し忠實に活動した。

ふとペンを休めて、今迄たどつた思索の跡を回想し乍ら、机上のインクを以てうね／＼とわが思想を染めた紙を靜かに黙視してゐると、何とも名狀し難い神秘不可思議の感に撃たれた。如何にして我等の形なく影なき思索が、斯くは判然と、青き液体を細長い棒の端に取り付けたペンと云ふ金屬性のものを先に附着けて、白紙に滲み込ませられたものに於て象徴し得られるのか。

常識的見解によれば、紙やペンやインクは單なる物質ではないか。而して思索は純然たる精神の一作用ではないか。この物質を借りて表現された私共の意識内容を、更らに視覺に仍てうけとられて理

解思考されるのが如何にも不可思議に想はれる。かくて今我眼前に横はる一個のペンも、我等に取つては誠に不可思議な存在であつて、彼（ペン）我（思索）の間の本質的關係を考へずに居られない。實に此の「驚き」は哲學的思索の萌芽ではないだらうか。止むにやまれぬ形而上學的な欲求に基く思索は斯る驚きより出發するのではなからうか。

斯くてこの「驚き」を追窮してゆく時、ペンとは何かインクとは何か紙とは何か、それを支へて字を書くところの手と肉体と机とは一体何であるか。またこれ等をして字を書かせる人間の精神とはそも／＼何であるか。然しこれ等微妙不可思議なる現象は其の相様々であるが、試みに是等を炎々たる火中に投じて見よ。そこに残るものは何か、たゞ一抹の灰のみではないか。人間精神と雖も然り、老少不定賢愚無別、如何に偉大なる賢聖と雖も一度死に遭へば、永劫に彼等は再び生れて其の容貌其の肉体其の心を以つて、其の思索を縦にするに由もない。

斯くの如くこの現象界は凡て千變万化極りがない。我等は永劫に不變不動なる本体とも云ふべきものを求むることは出来ないであらうか。

かくて一本のペンを持つて字を書くといふ、些細なる事實を反省し思惟する時、それはやがて宇宙存在の原理に就いて語り、又人生そのものゝ秘義を説かざるを得ない。

古來人類思索の歴史に就いて、世界人生の謎を説かんとするに方り、世界の本質は「物」なりや「心」なりや、或は「物」と「心」との相關して成立つものなりや等の疑問を掲げ、その思索的解決に痛ましき努力をつくしてやまなかつた。偉大なる賢哲を思ふとき、如何に人間の形而上學的欲求、實在認識の熱烈なるかに想到せざるを得ないのである。

今たま／＼「ペンを取りて文字を書く」といふ事實の神秘に驚きし我は、古來の哲學的思索を吾がものと想定して、「ペンを取る」事實を例にし、以て形而上學的思索を試みやう。今唯物論的にこの事實を考へるとき、唯物論は世界を全く唯一つの「物」をもつて實在の究極の本体（原因）となし、すべてを物的に説明しやうとするものである。是の宇宙に存在してゐる凡ては、物質的なものばかりで、精神などと云ふものは存在してゐるのでなく、精神と云ふもそれは物質のある意味の働き、又は物的活動の一現象に過ぎないのであると云ふのである。こゝにペンを持つて文章を書く場合、すべては物質のはたらきであつて、我等の微妙なる精神作用と雖も單に大腦といふ物質活動の所産なりと考へられ、ロバートマイヤーの如きは「精神とは要するに腦髓の小便なり」とまで極言してゐる程である。されば唯物論者に従ふときは、物質を離れたる獨立なる精神生活などは全然承認しないのである。

然るにこれと反對に唯心論は、世界の本質は心であつて物ではない。ペンがあり紙があつて我等が

これに文章を綴るのは、吾等に心があつてペンや紙の存在を認識し心ありて物を考へるからである。といふのであるから主観的觀念論的な唯心論は、認識論と離れることの能きない關係のあるものであつて、ペンや紙やインクは一つの觀念的存在即ち精神現象なのである。故に本統に存在してゐるものは精神ばかりであつて、物質とは精神現象の一つの形式に過ぎないのであると云ふのである。

此唯心論と唯物論とは共に一元論的に説く点は、軌を一にしてゐるが、かく全然お互の説くところが一方に偏し相反してゐるので、これを解する上にも極めて無理と獨斷と難解とに陥らざるを得ない。勿論哲學的欲求は、いつも一元論の方へ向つて行くのであるから、二元的に立てることも形而上的要素として満足されぬであらう。そこで物質も精神もたゞその表はれる形式の上で異つて來てゐるのであつて、物質と精神とは互に並んで行く關係があるのだと云ふのがスピノーザの所謂物心並行論である。而して私共はこれを經驗的並行論に簡むで形而上學的並行論と名付ける。

この説に従へば、物質は獨立の存在にして精神と共に宇宙の二元素である。されば今ペンを持つて思考を紙に連ねることは、精神活動と物質活動の兩者によつて成立するのである。即ち物心兩者に高下傍正を別たさずして、何處までも同價値と觀、同等の存在權利を持たせるのである。而して形而上學的並行論は、物心二元の統一的立場を神に押付けたがこれは明かに獨斷である。

更に經驗的並行論に従へば「經驗」は眞に形而上學の據つて立つ根抵である。そして實在の眞相はこの經驗に依つてのみ説明しつくさるのである。經驗こそ唯一の實在の成立根據である、これ所謂直接經驗と稱し純粹經驗と言はるところのものである。

直接經驗の事實に於ては、未だ主もなく客もなき主客未分の境地であつて、何等思惟の混じない事實其のまゝの現在意識である。實在は此の場所に於てのみその眞の姿を顯はす。

唯物論者は物のみが唯一の實在であつて、万物は皆物力の法則に従ふと云ふが、然し實在の眞相は果して斯くの如きものであらうか。物体といふも意識現象を離れて別に獨力の實在を知り得るのではない。物も心も皆この事實を説明する爲に設けられたる概念にすぎない。元來精神(心)と自然(物)との二種の實在があるのではなく、此の二者の區別は同一實在の見方の相違より起るのである。純粹經驗に於ては物心主客の區別對立はなく、物心は實在ではない。體驗的事實としての實在の見方に於ける抽象的概念であるに過ぎない。

經驗的並行論とは、先に述べた形而上學的並行論の如き物心の並行を云ふにあらずして、直接經驗の中で意志的方面と表象的方面との並行を指すのである。

例へば、是にペンを持つて文章を書いてゐる、この「書く」といふ事實は知識でも意志でもなく、



唯一つの体験的事實であつて、直観体験の發展は思惟である。思惟は形式化即ち概念化作用である。前のペンで書くといふ体験的事實が對象化せられた時、既にそれは反省されたる表象亦是概念といふ抽象的知識的なもので、もはや實在ではなくなる。然しこの場合の知識するといふ作用そのものは、依然純粹經驗である。この知識作用と「書く」といふ体験とは表裏をなしてゐる。かゝる体験は意志作用とみることも能きるからこれを並行關係と云ひ、かゝる考へを経験的並行論と云ふのである。

現實に於ける意識体系の發展する状態を、意志作用は所謂直接經驗である。この場合反省作用が起り、この發展状態を反省する知識作用は所謂間接經驗である。ペンを持つて字を「書く」意志作用とペンを走らせてゐる事實を反省する知識作用は、一つの並行的なものが見ることが能きる。かくて私共は唯物論唯心論形而上學的並行論といふ如き、古き思辯的な形而上學的立場を抜け出て、新しき認識論的試練を経て、深き經驗的立場に基いて形而上的世界を觀ることが能きる。

斯く觀來るとき、唯一本のペンと心とのかかりあひに於て、深い哲學を味識することが出来る。ペンを擱いて、靜かにその金色に光る姿に視入つてゐると、何となく一種言はれぬ神秘不可思議の感に擊たれる。

——四、九、二六——

# 現代社會の要求する人物

方 哲 源

ルネサンス以後其の先驅者とも云ふべき、ルソーの自然主義的個性を尊重する感情主義は歐州人の視野を廣め自由研究の端緒を開いた。中世の根本題目は神國の興隆と尊崇とにあつたがルネサンスにあつては、神に代へるに人を以てし、かくて人間自然の本性と價值とが高調された。

人文主義は個人の開放と大自然の征服を目標として猛進した。かくて物質文明は實に凡有一切のものを支配する所の原動力となつた。

文化の進展に伴ひ社會は絶えず重大な而も複雑極りなき鬭争を續けてゐる。かゝる現代社會の凡有方面に於て眞實なる指導者が要求されるのは自然の傾向である。此の意味に於て我等は常に心身の健康と修養の力とに相俟つて先づ自己完成を志しつゝ漸次國家及び社會の指導者たらん事を期さねばならぬ。指導者としての資格は次の諸條件を満足させる人物でなければならぬと思ふ。

## 第一、知識力

高く深かき知能と鋭利で堅實な判断力とは人生の行路を觀極める唯一の眼である。我々は此の知力に依て人生の根本原理を掴み生存上必要なる方法を發見して合理的に歩み以て完全なる生活を期することが能きるのである。迷信を打破し問題を解決し、正義に基き自他共存の生活を營むには必らず人生の根本的原理に就ての思索を要する彼のキリストが『天の父の完全なるが如く汝等も亦完全なるべし』といふたのは完全なる人格者としての修養をなせといふのでその爲には第一知能の修養が肝要であるが此智は單なる世間智ではない。ルーターが言つた様に神を離れては如何なる知慧も理解も機智も人格完成には深かき意味を持たぬ亦日蓮上人が『日蓮の頭には大覺世尊かわらせ給ふ』と云ふ強き信念に依て得た妙智はギリシャ的世間的物理科學界の所謂智に非ずして出世間的宗教的信念を源としたる佛智の謂ひである。日蓮に働いたこの佛智は實に彼の鋭利なる判断力と明晰なる思索的探究力とのその根本に佛が生きてゐたからである。此佛智の故に不惜身命の大信念も生じたのである。聖人は常に事件の核心を考え人生の根本原理を捉ふべきことを示された。

私共は眞に日蓮聖人の如き確乎不斷なる信念の力に依て得たる信仰的體驗を基調とする探究的思想

に依つて深く高き人生の根本義を把握して一路自他の救済に邁進せねばならぬ。

## 第二、心情力

心情の力を養成するのは人生の平和を保證する前提である、人は往々悲哀と寂涼とに襲はれる。かかる場合種々の惡魔の誘惑に陥り易いのが常の情である。然亦我等は悲哀の苦境に陥つた時美しき同情心を渴望するのは日常生活に於て常に經驗する事實である、キリストは『隣人を愛せよ』と言つた。

隣人とは弱きもの、憐れ極まりなきもの、謂であつて決して距離の遠近を論ずるのではない。一度眼を大にして、廣く世界人類の現状を観察するに、實に憐むべきは人種間に於ける葛藤と反目である。南アフリカ、南アメリカ、太平洋沿岸の諸國等に於ける被壓迫民族に對する所謂文明人と自稱する壓迫民族の殘忍な弱肉強食的現状をいかに見如何に救済すべきか。血と涙とを持つ人間であるならば必ず彼等の全く自由を奪はれた立場を涙なくして見ることは能きぬだらう。文明民族が皆同情と眞實なる愛情を以て彼等の悲しき胸底を慰める大慈悲心の佛子であつたならば必らず永遠なる平和と融合の曙光を見出すであらうと信ずる。これ即ち大覺世尊の大慈悲心を理想とするもの、特に情懷涵養を重要とする所以である。

## 第三、意志

理想を實現する力とは、私共が向上的欲望に基いて自己の理想を實現すべき原動力即意志力である。高遠な理想實現の爲めに勇往邁進する意志の人こそ偉大者であり延いては人生の勝利者ともなるのである。青年こそ特にこれに當るものであらう。前途多き青年が敬愛されそして最大の期待を持たれる所以も此にあると想ふ。個人、民族、社會、國家の如何を問はず皆悉く此の目標たる理想とその實現力を失つたならば必らず滅びゆくに違ひない。常に生き生きとした理想を抱き着々その實現への努力に然えつゝ人類社會の上に生きた佛國土を建設するのは正にこの意志力である。故にいかにか我々が堅固な信念を持ち高遠な理想を抱き亦深い同情心を持つてゐるにしてもそれを實行すべき意志がなかつたらそれこそ空論にすぎないのである。

偉大なる人とは實に意志の堅固な人を云ふのである。先づ人生々存上、重要なることは堅固なる意志力を養ふ事である。而して意志力を養ふには何よりも常に絶えざる練磨と陶冶と尅苦忍耐とに依るのが最善の方法であると確信する。

## 第四、協同心

家庭、國家、社會等の團躰生活は必ず個人々々の集合に依つて組成されたものと考へることが能きる然し單に個人的にはいかに有能であつても、他人と協力することが出來なかつたならば彼が經營する事業は全く局部的な偏狹なものに終らねばならぬ。

我等は他人と協力することに依つて同じ働きを周圍の者にも亦は來るべき將來の人々の上にも殘す事が出來得るのみならず彼自身の偉大をなす所そのものである國が他國民と協力し得る度合ひに比例することは歴史の明示するところである、リンカンは實に此の精神に富んだ人であつた。彼は國家の幸福の爲めには自己の私情を捨て、その政敵にさへ尙且つ政治的椅子を與えた事は彼の協同的愛國心と偉大なる襟度とを暗示するものである、斯る精神の所有者であつた彼が偉人と呼ばれ後世南北アメリカに散在せる黑人から「聖父」とまで呼ばれたのも決して偶然ではない。

## 第五、 犠 牲 心

犠牲の心とは高遠なる理想を達せんが爲めに個人的なるものを殺して超個人的理想に生きることである、その實個人的理想に生きることに由て眞の個人が生かされるのである、無智と貧困、病疾と闘争、迷信と罪惡等を根絶して理想我に生きるために最大の獻身的努力が必要である。釋尊、日蓮、キ

リストの如きは實に此犠牲精神の典型的權化と稱すべき人々である。

## 第六、超 人 力

人間は自己の力に由ては超人たり得ない超人間的實在の力を信することに由つてのみ超人的力を得ることが能きる。我等の宗教意識による人格統一の力こそ人間の全行爲を支配し運行して彼岸に到達せしむるものである、神は愛である人は信である。人は信に由つてのみ神の愛に生きることが能きる即ち宗教信仰は我等の全生活の中に織り込まれて我等は無限の生命の源泉たる神佛の超人間的力に由つて生きることが能きる私は確固不動の信念により、かゝる超人間的力を恵まれかゝる信念を基調として知情意の圓滿完成を期しつゝ協同犠牲の精神に生き以て自他救済の實を擧げる人こそ現代社會の要求する理想的人物であると信ずる。

# 虚空藏菩薩と蓮長法師の祈願

武 田 快 照

虚空藏菩薩は觀世音菩薩のやうに古來日本民族間にも普く信仰されてゐた菩薩であるから、恐らく知らぬ者はないであらう。殊に日蓮宗とは切つても切れぬ深い關係がある。けれども虚空藏菩薩とは如何なる菩薩であるかを悉知してゐる者は少い事と思ふ。故に菩薩の事に就いてほんの道しるべだけを述べ而して後の日蓮聖人たる蓮長法師の虚空藏菩薩信仰にふれて見よう。

虚空藏菩薩は梵名アーカーシャガルブハの漢譯で虚空孕菩薩と翻譯されてゐる。智慧の庫藏廣大無邊なる事虚空の如く、大慈悲一切の功德を包藏する事虚空のやうであるから虚空藏菩薩と稱せられると諸經にある。實に虚空は無上の存在であり、寶藏は欲する者にをしみなく施して盡さないものである。虚空藏菩薩も亦是の如く一切衆生に無量の智慧を與へ無盡の大慈悲を施し自在に受用して窮りがないのである。



菩薩には本化迹化此土他土の別がある。虚空藏菩薩は他土より娑婆世界に來て衆生救濟をするから他方來の菩薩である。しかし菩薩とは佛子である。此土他土と別けて考へるのもよいが事實はあらゆる人々が悉く菩薩なのである。悉く吾子とあるから人類皆菩薩。この意味で虚空藏菩薩は現に史上の人物でないから實在しない迹化他土の菩薩だと云ふ事はできない。信仰の世界と歴史の世界は別である。史上著名の人であらうと無からうとそれは問題にならない。注意すべきはその菩薩が如何に吾人の日常生活に影響し、亦その模範となるかにある。

原始佛典にも生天思想彌勒信仰の萌芽はある。後の發展佛教たる大乘教典には廣く十方諸佛の信仰が非常に濃厚に表現されてゐる。虚空藏菩薩に關する佛典は殆んど大乘經である。殊にその方等部の聖典に多くの散説を見る。就中大集經虚空藏品が一番詳しい。

世尊大衆に仰せられ玉ふよう。

東方八佛世界微塵數の佛土を過ぎて大莊嚴國がある。この淨土の一寶莊嚴如來は今現に多くの大菩薩衆の爲に妙法輪を轉じて居る。大菩薩衆の中には衆生救濟の自在神通力無碍知辨を有する虚空藏菩薩が居る。この菩薩は十二億の菩薩を引率して娑婆世界に來たり私を禮拜し供養し、娑婆世界の人々を如來の法を以て救濟し諸魔外道を調伏しようとしてゐる。今現れて居る虚空の光明はその瑞應であ

る。  
 虚空藏菩薩一念の間に娑婆世界に來たり莊嚴寶臺上に現れ、紅白の蓮華を雨らし供養し佛を禮拜して申上ぐるよう。

世尊よ、御壯健でせうか、一寶莊嚴如來から宜しく仰せられました。どうぞ是の菩薩衆の爲に御說法なさいまし。昔より世尊の御教化に預つて居る菩薩ですから。大慈悲如來の本願力よく衆生を救ひ玉ふ。

世尊大菩薩衆に告げ玉ふよう。

虚空藏菩薩は戒を持つて衆生救済の本願を成就し、大願を成就してなほ戒をまもる。初中后持戒清淨なる事虚空の如くである。この戒律と本願力により火に焼けず水も漂す事はできない。正法を受持し諸佛を供養し大菩薩行に精進する無量の功德は虚空と等しい。一切衆生の蒙る利益は皆虚空藏菩薩の願力による。虚空藏菩薩の願力は如來の本願力である。故に菩薩の教化救済みな諸佛の法である。法とは無上大乗妙法であり、救済は世間法に即する佛法の救済である。虚空同量の心行世法即佛法の無上大乗妙法を成就した虚空藏菩薩の功德は無量無邊である。世間の生死を捨てずして大菩薩衆の爲に佛法を説く。一切の法は皆是れ佛法である。正法を受持し大慈悲救済自ら身命を惜まず常に教化傳

道して倦まない。如來の一切法を悉く記憶し、無量の言語文字了義不了義眞諦俗諦第一義諦等自在に分別解了し無礙辯を以て解説する。慈悲智慧神變神通福分無量無邊である。これ皆如來秘密神通力である。自在に生死を示現して衆生を救ふ。正法を受けず誹謗し報恩を知らぬ惡魔を金剛寶劍を以つて推殄する。また佛なき國に行つては八相を現じて衆を度する。

彌勒菩薩虛空藏菩薩の過去談を訊ねる。

世尊答へ玉ふ。

虛空藏菩薩は今より無量恒河沙塵点劫の昔大菩提心を發したのである。無量無邊の佛土を微塵として塵々を一劫として數へたよりも昔淨一切願威德勝王如來迦陵の妙法を説き一會の大衆中の轉輪聖王が大菩提心を發した。この王とは今の虛空藏菩薩であり、大衆とは今の大力大智菩薩等である。菩薩はこれ以來弘誓の本願如來の不行を修する事無量劫の間毫も疲倦しない。菩薩の心地は大地の如く一切善根を生じ、その大慈悲は水の如く一切衆生を潤す。八万四千の三昧あつて万能虛空の如くである。これを聞き舍利佛等五百の聲聞大菩提心を發す。これより虛空藏菩薩無礙辯を以つて法輪を轉ずる事縱横無盡、天より花ふり自然の音樂聽え佛と佛子を讚美し、梵天帝釋天魔悉く來下して聞法席に連る。この菩薩の神變をみて集る大衆に世尊妙法を説き玉ふ。佛法を信ずれば天魔破旬も佛となる。こ

れを如來滅後に弘通せよ。末世法滅時この妙法を持つは虚空藏菩薩の威力によると。

その時功德菩薩、後五百歲法滅時廣く此妙法を弘めやう。佛法を久住さす爲に。と釋尊を禮拜し合掌しながら申し上げる。

これで見ると虚空藏菩薩は東方大莊嚴國の菩薩であり、虚空藏菩薩陀羅尼經も同説であるが、虚空藏菩薩經、虚空孕菩薩經と同本異譯なる虚空藏菩薩神咒經及び大日經には西方一切香集依世界勝華敷藏如來の菩薩と説く。

虚空藏菩薩娑婆來臨の説相は諸經大同少異である。菩薩此の世界に來るや娑婆世界は七寶莊嚴の淨土となる。山河草木光明にみち、病痛一切諸苦消除し、衣食具足し殿中采女溢れ皆皇后の相あり五樂を奏し菩提を讚へ聞く者悉く大菩提心を發す。それから法華經觀音品の説と似てゐる佛説がある。一度も虚空藏菩薩のみ名を稱へ懺悔する者は根本重罪消滅し一切病苦根絶す。その名を聞く者すら水不能漂火不能燒刀不能傷毒不能害無病無飢渴であつて、臨終には菩薩十方佛と共に現じてみ手を授け玉ふ。亦欲する者は彌陀の淨土に生れて佛をみる。愛別離苦等の四苦八苦、寶藏を求めて海を渡り盜賊に遇ひ、獅子虎狼蛇等に遭はゞ虚空藏菩薩の名を稱へよ。彼等皆慈父悲母の想を起す。自身を示し他身を現じて衆生を救ふ虚空藏菩薩の智徳神通無量不可説である。——虚空藏菩薩問七佛陀羅尼經も同

説——虚空藏菩薩は文殊菩薩の如く智慧の菩薩であるが、慈悲も觀世音菩薩と比肩してゐる。千手經には當知虚空藏菩薩常以空慧視衆生とあつて、其智慧は諸典多く空慧であると説く。

提婆品の今皆修行大乘空義の空思想であらう。しかるに羅什三藏の注維摩には虚空藏菩薩實相慧藏虚空の如しとある。これによれば法華經の諸法實相の思想である。虚空藏菩薩が自他身の無量身相を示現し衆生救済の如來行を修し、一度稱名する者には無量の智慧と福壽を授け諸苦を斷除する事は妙音菩薩觀世音菩薩と等しい。虚空藏菩薩念誦經には一度念じ一度稱すれば所得の功德智慧福壽虚空の如しとある。

觀虚空藏菩薩經には佛説の形相がある。

無量身を現じて衆生を救済する虚空藏菩薩の大身は觀世音菩薩と等しい。一度も虚空藏菩薩を念じ名を稱へれば衆生を愍念してその妙身を示現す。金色燦然たる菩薩の頂上には十方諸佛顯現の如意寶珠——この中に菩薩の天冠を見る。天冠には別に三十五佛があらわれてゐる。——佛説虚空藏菩薩陀羅尼經も同——虚空藏菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法經には金色身寶蓮華台上に半坐し容顏喜悅寶冠上五佛あり、左手に花上如意寶珠ある白蓮華を持つ。大日經には白服刀を持つとある。大疏には此菩薩如來と等しき智慧あり。大寶劍を持つは智慧の標幟、服白衣なるは持戒清淨無垢なる事を明す

と譯してゐる。

五大虚空藏菩薩は別に五菩薩あるのではなく一虚空藏菩薩の功德を讚歎する爲に別勸請したものである。——その形相別は略す——

前述の如く其の住所は東西兩説——經説——あるが金剛界曼荼羅には賢劫十六尊中に坐し、胎藏界曼荼羅は第六釋迦院と、第十虚空藏院の中尊である。

宿曜儀軌に若し人福智を求めんと欲せば此菩薩に歸依せよ。日月星皆虚空藏菩薩の所變とある。文句卷一にも明星天子は之虚空藏菩薩の作とある處からみると虚空藏菩薩は三光信仰の神格化ともみられる。摩利支天が陽炎の人格化であるやうに、菩薩と三光の關係は支那佛教に行れた事は空海傳に海求聞持法を得て阿州大龍岳に嚴修す。天晴朗寶劍座前にあり。明星飛んで口より入る。聞持成就すとあるのに明かである。この聞持經には虚空藏菩薩に祈願すれば一度耳目に入るもの心に記し永く忘失せず。諸福計り無けんとなる。

虚空藏菩薩は慈悲と智慧を兩具し衆生にをしみなく施與し玉ふ。

本尊問答鈔の生年十二同郷の内清澄寺と申山にまかりて……たま／＼佛菩薩に祈請して一切の經論を勤へて十宗に合せたる〔P.1803〕清澄山は奈良朝時代寶龜二年不思議律師の開山、(日蓮聖人の生涯説)慈

覺大師の中興で台密系であるから、本尊は虚空藏菩薩であつた。光日房御書斷片には予は且知召され  
て候が如く幼少の時より學文に心を懸けし上大虚空藏菩薩の御寶前に願を立て日本第一の智者とな  
し給へ。十二の年より此願を立つ。其の所願に子細あり。とあるから祈願の事はすでに光日尼が知つ  
てゐた。また善無畏三藏鈔には幼少の時より虚空藏菩薩に願を立て云く日本第一の智者となし玉へ。  
虚空藏菩薩眼前に高僧とならせ給ひ明星の如くなる智慧の寶珠を授けさせ給ひき。其のしるしにや日  
本國の八宗並に禪念佛宗等の大綱粗伺ひ侍りぬ。〔P.58〕此諸經論諸宗の失を辨へる事は虚空藏菩  
薩の御利生と當時の實況を描寫してゐる。また清澄寺大衆中には

生身の虚空藏菩薩より大智慧を給はりし事ありき。日本第一の智者となし給へと申せし事を不便と  
や思し食けん。明星の如くなる大寶珠を給ひて右の袖にうけとり候し故に一切經を見候しかば八宗並  
に一切經の勝劣粗是を知りぬ。……此惡眞言鎌倉に來りて又日本國を亡さんとす。其上禪宗淨土宗な  
んどと申は又いふばかりなき僻見の者なり。此を申さば必日蓮が命と成べしと存知せしかども虚空藏  
菩薩の御恩を報ぜんが爲に建長五年四月二十八日安房國東條郷清澄寺道善之房持佛堂の南面にて淨田  
房と申す者並に少々の大衆にこれを申はじめて其の後二十餘年が間退轉なく申す。〔P.1370〕と仰せら  
れて虚空藏菩薩の御利生を感謝されて居る。

清澄山の虛空藏菩薩は慈覺以來顯密雜亂の台密思想の信仰を捧げられてゐた。それが日蓮聖人によつて正法護持の菩薩であると云ふ事が明瞭になつたわけである。それと同時に明星の如き智慧の寶珠は日蓮聖人の生涯を光あらしめてゐる。日蓮聖人の信仰には久遠の本佛が生きてゐたやうに、智慧の寶珠を授けたる虛空藏菩薩が生きて居つた。叡山及び後の傳道法論の場合も虛空藏菩薩の智慧が輝いてゐるといふ自信力をもつて居たから諸宗の學者をみる事小兒の如くであつた。

民の家より出でて頭をそり袈裟をきたり。此度いかにもして佛種をも植へ生死を離るゝ身とならんと思て候し程に皆人の願せ給ふ事なれば阿彌陀佛をたのみ幼少より名號を唱候。いさゝかの事ありて此事を疑し故に一つの願をおこす。日本國に渡れる處の佛敎並に菩薩の論と人師の釋を習ひ見候はゞや——此等の宗々技葉をばこまかに習はずとも所詮肝要を知る身とならばやと思ひし故に〔P.170〕虛空藏菩薩に御祈願遊ばされたのである。

是等の御書に依れば虛空藏菩薩を日蓮聖人が幼少の時より信じてゐた事が明かである。その菩薩信仰の目的は一代佛敎の歸趣を究め一切衆生を救濟せんとする若き連長法師の切なる上求菩提下化衆生の理想實現にあつた事は云ふまでもない。

日月星は虛空藏菩薩の所變なりと云ふ信仰からみれば後年龍口に現れたる月天子、依智本間家の梅



に下る星天子は虚空藏菩薩の靈驗であらねばならぬ。

種々御振舞御書に月の如くなる光物……天より明星の如なる大星下りて前の梅の木の枝にかかり。  
〔P.1397〕とあるのに明かである。

また佐渡に於ては光日房御書に天の加護を信じて、日月我をすて給はずばかり入りて又父母の墓をも見るへんもありなんと心づよく思ひて……本國へかへし給へと高き山にのぼりて大音聲をはなちてさげびしかば……文永十一年二月十四日の御赦免狀同三月八日に佐渡の國につきぬ〔P.1406〕と仰せられてゐる。

なを智慧の光明を確信しては義智者にやぶられずば用ひじ〔P.816〕と喝破し、身延に入つては蒙古退治を天に祈られたのである。實に日蓮聖人の御一代は虚空藏菩薩の祈願に始まりその驗應に終つてゐる。

迹化他方の菩薩として一概に排斥する事をやめよう。妙法によつて開顯せられたる菩薩は迹化する斯の如く正法護持の爲に御活動遊ばされる。自ら本化地涌の菩薩なりと名乗る日蓮門下生よ、大いに反省しなければなるまい。

——四、十、十三——

## 事一念三千が

### 如何にして信心義なりや

堀 内 義 光

一念三千に事理の二あり。理一念三千とは台家に於ける佛性論に立脚したる一念三千にして、凡夫在迷理性具足の一念三千である。されば其の具は事相可見にあらざるも、此の一念能く一切諸法三千を具して隨意に顯現し行くものである。故に衆生未だ見ず未だ發せずと雖石中の火、木中の花の如く、凡夫の心中本より具するを、理性所具の三千と云ふのである。而してその一念とは、凡夫在迷の一念なるを以つて、識体より云へば八識在纏真如の分域にして、その觀法は吾人現前刹那の妄心に即して真心、佛性を磨き出すの修行である。随つて台家に依ればその壽量品觀に於ても、文上五百塵點有始の佛に過ぎず、九界又有始を免がれず、のみならず空間的にも十界に於ける融通を理性に説明するも、事相は未だ隔歴を離れないのである。

事一念三千は、本門佛陀論に立脚するが故に、その壽量品觀に於ては文上能顯の巧説たる五百塵點有始の佛の秘奧を極めて、文底無始本覺の上に立脚したる一念三千である。即ち久遠元初の佛智の一念に映じたる所證の法体である。随つて其の三千たるや、九識心王出纏清淨真如の謂ひである。然し其の本覺は始覺佛てふ人格的實在を離れて存するものにあらず、始覺佛の奧に秘められたる三身具足の本覺佛なるを以つて、茲に無始と云ふも中古天台の單論本覺、密家の素法身に異なり、飽く迄も人格的實在と云ふべきである。

然れば本覺門の教理に立てる宇宙觀は、その宇宙其儘が本覺の一大円佛にして、幾多の現象は其儘本佛体内の現象にして、一として本佛を離れての現象ではあり得ない。本佛の光明に照され、本佛の慈悲の顯現としての千變萬化であり、百態である。だがその流轉變化は本佛体内中に於ける現象に過ぎずして、一大円佛の慈悲は常に此の現象を保ち行く、無始無終本有の存在である。

人生觀に於ては正法の凡ては此の本佛体内、本覺果海中の凡てである、故に此の正報は其儘の姿に於て本來覺了である、迷ひの衆生は未だ本覺無始の佛の人格實在を信じ得ぬ者のみであるが、一度自己が本來覺了の如來なる事を始覺せば、其當位其儘に本佛体内に無始以來救濟され居る處の佛子なる事を知るであらう。即ち九界は無始以來佛界との交渉を有し、生佛感應の信心態の姿に外ならざりし

ではないか。之れを十界事常住と云ふのである。壽量本佛の人格實在を信ずる時、九界の衆生は限り無き本佛の慈悲に育まれ居るのであるから、其の恩寵に對する感激は不斷に永續するのである。

斯くの如き姿を壽量品には、而生渴仰心より俱出靈鷲山の文に至りて生佛感應、無始佛界と無始九界の愛の交渉を描き、我此土安穩の文より依報たる寂光土を出して居るのである。嗚呼吾等本來覺了であり、佛陀の愛子なる事を知らば飢時の飲食、寒時の衣服、熱時の冷風、昏時の睡眠皆此れ本有佛陀の慈悲と愛にあらざる事なしではないか。

當家の觀心は自己本來覺了の姿を觀る事に於て觀心なるも、更らに進みて本來覺了の由つて來たる所以を尋ねて、即ち本佛体内の一分身たる事を窮むるに於て、自から全宇宙は無始以來生佛感應の流れなりし事を自覺する時、本佛への灼熱的感激を捧げざるを得ない處に觀心は進みて信心と化し行くのである。事の一念三千の本覺門の教理に立てる吾が宗こそ唱題即觀心の信心宗と云ふべきであらう。

# 日精上人書簡類蒐集に就いて

三 木 淨 達

島智良師、唯誠院日精上人については、世既に定評のある所で今こゝに詳記するの要はあるまい、身延山史には「師は實に近古を通じ祖山の生める高僧の一たり」とある。

この一事に見るも、凡そ上人が凡物でなかつた事は明確である。

宣なるかな、上人を追慕する人々によつて島智良師追慕會が組織され、島智良師遺稿及び小傳が世に出た事は讀者の既に熟知の事である。

今や宗門の官僧が都門に參集して、樽俎折衝合縱連衝に腐心するの状は、少くとも道に志すものゝ永歎に値するものである。こゝに於てか我々は隱聖元政和尚や本妙律師を敬慕し私淑して遂に高僧の列に入られた日精上人を追慕するの念益々俊烈なるを覺ゆるものである。世には紫衣金襴に身を纏ひ、高位に住する僧はある、が然し名僧高僧として其の名を永く青史に留むる者、果して幾人かあらう。

實や、日精上人は祖山の生める高僧であり祖山學徒の追慕、禁ずる能はざるの先師先徳でなくてはならぬ。

然しながら我等は不幸にして、上人に面奉する事を得ず、唯これを既刊の書に見、生前上人と交遊ありし諸氏、或は上人の教子たりし諸先輩に聞くのみである。

凡そ、追慕思念する者の常として、その人の片鱗にだに觸れようご勉め、且、より深く知らうとするは自然の勢である。

師逝きて既に十六年。我々は四方に尋ねて、上人の書簡を蒐集し、以て上人の法身、長に世を利し祖山學徒の二陣三陣の奮起を期せんとするものである。

冀くは棲神讀者にして、上人の書簡を有せらるゝあらば、進んで寄投せられて、我等が擧を成就せしめられん事を。

今こゝに上人外護者の一人たりし大阪早野氏に致せる當時の消息一篇をそのまま記載して上人の人格の一斑を偲ぼう。

### 身延より大阪早野氏へ與ふる書

拜呈、其後無事御歸國なされ候由、御通知有之喜奉候、申しも事新しきに似て候得共、誠に此度は不思議な命拾を致され再び御參詣なされ事夢の様に御座候、信心で病氣の治るは昔の事の様に思ひ今

の世にかゝる話は迷信か頑固の様に取り扱はれ僧も俗も醫者よ薬よと尋ね廻る中に見事信心の徳にて病は治り醫者を驚かし候など、末代難有利益を頂きし事に候、上行菩薩の利生愈末世に顯はれ候御義と、深く肝銘仕候

さて御登山中は小生不加減の爲め何の風情も仕らず却々種々御看護に預り候事何とも恐入り候、一時回復と存じ十四より稽古引續き居候處旧九日より又々工合悪しくなり學校も致しかね居候、手足だるく肩張り胸痛み机に寄り筆取る事難く一時は何ふなる事か心配致し候、昨日醫者に見て貰ひしに神經痛と分り暫く安心候、兎に角當分遊ぶ考に候、依て近日中、學校の運動會をかね富士五山を廻り内房にて都合により休養致しべく候、小生の考には學校をやり居りては、一向自分の行學ならず候故是れ尋に學校をやめ、何れかへ隠れ一心に學行をはげみ致し存居候、誠に人に教へるなどは我等の事にあらず、先づ我身の罪障消滅を祈り自身の得脱を願ふこそ本意なるに、一時の身の安穩に酔はされ、世間に交り候事返すくも誤にて有之候、たゞ此山離れては明朝上人の心血を注がれし著述の保存もならず、又改板の志願もならず依て今に決すかね居候、さりとて今の様では是も居ると云ふ斗りにて事業の進歩もなく、一生學校教師にて朽つる位に候か、此の考晝夜に心を苦め終に此病引起せしか、誠に大決心、大勇猛心ならでは佛道成り難しとは、初めて心付き候、身の出世や食ふ爲や學者になる

などは皆迷にて候、實のなき山吹の花の如きは蓮華經の精神ならず候、何れ内房にて相談致し決心仕るべく候

尼の方も御尋ね置き被下度枝山の横川へも参り度存居候

此夏休に本妙様の本の第二編出版の積りにて候故、東京か西京へ出張致しべく候

御依頼申置候買物、御ひま相見て相整被下度、バナマの帽子も一個願上候

乾板に「整色乾板」と云ふのがありて、赤みのある者も感光致し由、コハ御本尊などの古く赤ミたるものよかるべしと存候故一ダース御願候、試みるべく候

御歸國後御疲勞も出でず候や、随分御大事なされ度候、光藏さん方も御羽かきに預り忝く候

六月一日

草々

智良生

早野様

今日お一日にて初て御經に出候、随て疲れ候、相畧し候まゝ



文

藝

# 友 情

松 田 壽 孝

大正十二年の春は、輝かしくめぐつて來た。青春の礎を後にして故郷Eを去つて、冬雄は東京の文科に、繁は工科に、哲三は北海の農大にはいつた。冬雄と繁は府下の一隅に在る二階家の素人下宿から、市内のH高臺に聳ゆる學舎に通學した。朝早く起きて揚子を使ひ武藏野一帶にかゝる朝霧を眺めるのは、何ともいひやうのない爽やかな心持がした。

土曜日の午後など二人はよく寮歌や讚美歌を合唱した。

『哲三の奴、今頃は何をしてゐるかな、』

二人はよく哲三の噂をしては、故郷E町の自然を追想した。E町の海岸線に沿ふて遙か遠くまで連續して見渡される、たつぷりと雪のかゝつたアルプスの山々、雄大な砂丘の群など、夕曉の空を背景にして眼の前に浮ぶのであつた。

繁は時折巢鴨の叔父を訪れた。冬雄も一度彼と一緒に、彼の叔父といふ人の家に遊びに行つた事もある。叔父はその日は留守であつたけれども、叔母は家に居た。彼女は優しい上品な至つて賑やかな性質の持主だつた。そうして繁と同様に、氣持よくもてなしてくれたのが、生れつき殊更淋しい性の冬雄には何よりも嬉しく思はれた。

こんなことで空虚は一日々々と埋められて行くやうに思はれた。冬雄は圓滿なものに憧れた。美しきそして又冷やかな大理石の世界に光を求めて、磨いた玉のやうな人間になりたい、地藏様のやうな満足な容貌が、欲しいと思ふ事もあつた。併し時とするに、慈悲の念が滔々と押し寄せて來て、醜い自分の性情を省みて、散々に苦しめられた。自分といふものが餘りに少さく見えてしやうがなかつた。希望もなく、憧れもなくすつかり凋んでしまふ事などもあつた。そんな時は、彼は自然に考へさせられた。

『俺は淋しい——俺の未來は暗い——果て知れない平原に行き暮れた旅人の持つ心のやうに、そこには光明はない——いや俺には未來も何もありません、もうとうに死んで腐つてゐるではないか！一日でもよいから自分を尊い者に思ふ日があつてほしい』

と思ふ事もたび／＼であつた。こうした時、自分の此の淋しい暗い氣持を慰めて呉れ、勵まして呉

れるものは清い友情であつた、唯一人の友繁の友情だつた。

『また君、考へてゐるのか、いゝ加減に悲觀はよさうぢやないか、永遠に清くまじめに生きて行かうぢやないか、そうすれば僕等は何時まで純な友情を樂しむ事が出来るんだからね、お互に余り自分の運命から逃れやうとして焦つては駄目だよ、焦れば焦る程苦しむばかりだからね、與へられた運命の下にあつて暗澹とした人の世の相を、ぢつと見つめようぢやないか、悲しみの中に在つて、自己を深く掘り下げて行かうぢやないか、君がそうして考へる時、俺も亦たまらなく考へさせられるよ、しみぐゝと考へさせられるよ、併し僕は悲哀の中に浸つてゐる時に、眞實の自己を自覺するやうな氣がするよ、淺はかな快活は止めて悲哀の奥にこもる盡きない喜びも、悲しみも、お互に分ち合つて慰め合つて行かうぢやないか』

『有難う！君の言葉には何時も僕は泣かされ感謝をしてゐるよ、誰であつたか名前は忘れたが「友無ければ此世は荒野なり」とか言つたあの言葉の意味がしみぐゝわかるよ』  
と何時とは知れず感傷的な彼の手と繁の手とが、堅く／＼結び合されてゐた。

實際繁の此の言葉はどんなにか冬雄の心を慰め、どれだけ努力づけて呉れ又やゝもすると偏屈になる心から遠ざけて呉れたかわからなかつた。

郊外の自然はやさしい春の雨に恵まれて樹木はしつとりと緑に潤ひ、水々しい若葉の色は冷靜と情熱の程よい調和を示してゐた。そんな雨の晩等二人はよく郊外にふさわしいやうな蛙の聲を聞き乍ら夜更けまで語つた。こふした折二人はどんなに幸福であつたかわからなかつた。

『俺は孤獨だ……俺は淋しい……俺は荒磯に一本流れ寄つた流木ではない、併しその流木よりも俺は孤獨だ……俺は一ひら風に散つて行く枯葉ではない、併し俺はその枯葉よりもうら淋しい、併し淋しい者は何時も幸福だ……』

と冬雄はつくづくそう思ふのだつた。

或土曜日の午后——夕方からしよぼ／＼音もなく細かな雨が降り出してゐた。冬雄はこんな細かな絹糸のやうな雨が何よりも好きであつた。餘り心がすが／＼しかつたので、そゝのかされるやうに二人は傘もささ／＼ずに外に出た。何處といつて目當のない二人は足の向くまゝに染井橋の方に歩いて行つた。彼等は喜びの心で一ばいになり、話に夢中になつて歩いてゐた。染井橋を右に折れて何時の間にか二人は墓地の中を歩いてゐた。

『そこは沈黙の世界だ……寂寥と無限の神秘の世界だ……冷靜と反省の世界だ……』  
と冬雄は思つた。そこに行く何人にも無限の眞理を表示してゐるかのやうな苦むせる墓標の上にも、

此の細な雨が絶えず降つてゐた。冬雄は時折歩を止めて考へた。寒苦鳥の如き生活にその日くを過す人間は誰であらうと、いつとは知れずこうした唯一個の墓標となるのではないか、そうしてその冷い土の下から初めて眞の我に反つて此の地上の人々に何ものかを呼びかけてゐるのではないか、そうしてそれ等の人々の誰にも聞える筈のない小さな聲で唄ふ歌が、その暗い地の底にきゝ入る時、冬雄の耳に微かに聞えて来るやうな氣がしてならなかつた。又しよんぼりと濡れた赤い信女が怪しい居士の膝に凭れかゝつた儘、寢てゐる姿も何となくおかしいやうに感ぜられた。時折丘の向ふを省電の走る響が聞かれ、遠き市内の紅い仁丹の燈がチラホラと雨の中にまたゝくのが眺められたりした。二人が家に歸つたのはもう夜であつた、天井の煤けた中に電燈がたつた一つ雜然とした部屋の中を照らしてゐた。それから又遅くまで彼等は語つた。冬雄にはその日一日は永いく月日にも優つて尊く感ぜられた。

五月△△日

過去は満されない、現在は焦燥に苦しめられる、俺は明るい世界に住み、暗黒と闘ひ、光を求めて進む生甲斐のある生活を見出し得たい、羊かんを食ふ友達俺は俺は要らない、唯一緒に散歩する位の友達もまた、おれは必要としない……。

五月△△日

お互に信じ合つて行きたい、友情によつて俺はそこに此の世の何ものも融合し得ない、無上の樂園を拓いて行きたい、魂と魂との抱擁……胸と胸との共鳴……互に光であり、慰めでありたい……。

こんな事はその頃の冬雄の日記の斷片であつた。夏休みを前に控えてふとした事から繁は病氣になつた。そうして故郷E町に靜養の爲歸つた。彼が歸つてから冬雄は暫く彼のその後の病狀を氣遣ひながら、相變らずより一層淋しい氣持で學舎に通つた。日夜繁の安否を氣遣つてゐた彼は何度となく繁の夢を見た。こんなのもあつた。

廣い校庭の隅から黒い着物を着た繁が出て來た彼は大きな聲で『繁君！繁君！』と二度程呼んだ。繁は此方を振り反つて『聲が大き過ぎる……』と彼は闇の中に消へて行つた。

冬雄は此の夢が一番氣になつて仕方がなかつた。聲が大き過ぎると云つた此の繁の言葉は、何だか不吉の暗示でもあるかのやうに思はれてならなかつた。彼が歸つてからは一週間目の朝彼の妹から便があつた。

『兄の事に就いてはいろ／＼と御心配有難う御座います一昨々日までは體溫も左程御座いませんでしたのに今朝は大分熱もあるやうで御座います、けれど只今は餘程熱も退けたんで御座いませうが

時折枕邊に居りますと貴方の事等私に語つては兄は淋しい笑を見せたりして居ります……。」

此の手紙を見た冬雄はその日の晚上野から米原行の急行に乗つた。そうしていろ／＼の彼の様子を想像し乍ら車中少しも眠れなかつた。冬雄の心配を乗せた汽車は唯惜しげもなく闇の中をE驛を直指して走つてゐた。

—— 以上 ——



# 思親閣より秋をたづねて

松 井 桓 成

今年十月の初旬、吾等は身延山奥之院の斷崖の絶頂に草を藉いて、富士川を眼下に瞰下してゐた。紫褐色の鷹取山、天子ヶ岳等に依つてぐるりと屏風を立廻された身延の谷は摺鉢の底のやうだ。青緑色の身延川が、前日の雨で黄く濁つた富士川に注いでゐる。群山を踏まへて富士が一峰孤立してゐる。四合目あたりまでは銀よりも白い雪に山膚を被れ、雪色清くして四圍の大景に眼睛を点ず……と期待したが、意外！それはまだ冬の装ひにかゝらぬ桔梗色の姿だつた。古來幾多の英雄佳人は様々な思ひを抱いて、あの富士を眺めつゝ通つて行つたのを思ふと、屹然として高く雲表に聳えてゐる山の姿に憧れずには居られない。あげ雲雀の影も見えなければ、薄霞も這ふてゐない、空氣は一段と澄んで、谷一帯が一種の沈靜に入つてゐる。祖師堂、山門、仰ぎ見る大廈高樓もいろ／＼の人々が右往左往する華やかな且つあわたししい街も皆、吾眼下に展開されてゐる。そこに醜惡なる人間の聲は絶えて聞

えない。唯もう滔々たる水の流が、變化磨滅する事がない永遠不滅の相を示してゐる——と思ふと、何だか神聖な感じが骨の髓に浸み入るやうだ。天高く馬肥ゆるの秋！『吾等の志をして天の如く高く吾等の心をして氣の如く清からしめよ』と秋の風物が吾等に促してゐる。ふと見ると遙か左手に、吾等の目よりやゝ低く、一羽の鳥が應揚に曲線を描いてゐる、鷹だらう。

かうして閑の秋の豁然とした天地を見渡して、胸の中が廣々として來た時、快感の背に凋落の哀れが襲ふて來る。そのカラツとしてゐるのは、自然が衣をぬがせられ、あらゆる裝飾を取り去られて赤裸々な様を示したものだ。狐色した枯草に暖い日がさした西谷は小春日和だつたが、此處に滿る陽の光は、もう暑くも又さして暖くもなく、夏装ひの吾等には、うすら寒さが感ぜられた。

九個年が間、五十余町の此の嶮山を日毎に一度は必ず攀登つて、遙か房州を煙波の間に望み、父母の恩を拜謝せらるゝ聖者の影——八十一歳の老母を伴ひて至孝の跡を偲ぶ雅人元政の姿——吾等は時と歴史との背景に立つて、金剛不壞に、どつしりとした迷の無い、莊大な力強さを以て、天を目指して直立してゐる、巨大な御手植の老杉に、無限の思慕と憧憬の念を禁じ得なかつた。五月雨月の思親閣は、庭の若葉は日光に輝き、近くで山鳥が春を唄ひ、誦經の聲も朗かに木鐘の音と共に御堂に響いて、長閑な春の抒情に溢れてゐた……がそれも今は淡い過去の幻影と消えて、元政櫻は紅ずんでハラ

く落ち、御堂はひつそりと静まり返つて、居所を問ふ堂守の聲も淋しく、落葉を踏む足音のみがザクザクと、荒涼の景は目に満ちて、肅殺の氣がひたたくと吾等の肌に迫つて來る。やがて不斷の手向を松籟に託して、黒門を一路追分へ下つた。

樹林の間にチラ／＼と局面の變化するのを樂しみ乍ら……程なく吾等は思親橋の上に立つた。南アルプスの連嶺にもまだ白いものが見えない。腰から上を鼠色の流雲に覆はれて、七面山は低く見える。クッキリとした縦を通して薄煙る山腹に默在する苦屋の閑寂な眺めは、大觀の畫を見るやうだ。杉の中から高く抜き出て、白く骨のやうに立枯したのは、狼に食はれた麒麟の死骸のやうに、一層哀傷をおぼへる、道は殆ど平坦になつた。頭の上のアケビの茂みから紫の繭形の顆が、葉隠に嬌乎々々として笑つてゐる。吾等の心は子供の昔にかへつて、嬉々としてもぎ落して貪つた、種子が多過ぎて物足りない心持がする。併し谷間にとつては秋の唯一の産物である。秋は悲愁ではあるがその萬物を豊熟させる精神は、人の樂觀を喚び起すべきものではないか。戯れ乍ら追分に辿り着いた。先客の籠からは土附いた初茸が顔を出し、土間でも初茸を取圍んでゐる。早速煮附の馳走に舌づゝみを打つた。盛りものだけに、肉も厚く、香氣も高く、山厨の佳味實に侮るべからざるものがある。こうした豊かな秋に満足して靜かに落付いてゐる人達の生活が何となく雅やかに思はれた。再び足に委せて赤澤の方

へ。谷田には蕎麥が雪のやうに、花を持ち崖にはすゝきが銀絲のやうに、紅絹のやうに、風に戦いて孤立叢生、實に人の詩思を索き動かす。岩根々々に黄、白の野菊が咲いてゐる。培養菊が水道の水に磨かれた娘なら、野菊は山出しのうぶの乙女だ。町の乙女が空駕籠を連れて下つて來た。駕籠に草臥て草鞋が戀しくなつたのだらう。『箱根山駕籠に乗る人擔ぐ人其又草鞋を作る人』口ずさみ乍ら金剛杖を打振ふ。或は天も鳴れと高らかに唄ひ乍ら。足下に赤澤が瞰える處で踵を返した。

追分から折れて西谷へ……途中千本杉で採つた初茸を山土産に遠く下の方で谿流の響を聞いたのはもう夕暮に間もなかつた。

# 隨感片々

矢 谷 清 文

◇  
海底に溺れようとするものは其の水上に浮ぶ唯一條の藁ですら攔まうとする。それが僞らざる人間としての欲情だ。

此處に一隻の航海する船が難破したと我々に想像せしめよ。其の中の或者は僅かばかりの自分の力と、習ひおぼへた技術とに依てあらん限りの人事を盡し、島、船、或は其他の自分を救助して呉れるところのものを指呼の間に置いて、而も其の儘死んでしまふ、かと思ふとまた、何等の對抗力をも持たず、何等の爲すべき業をも知らないで、運を天に任せて浪の間に／＼漂はされてゐるうち、不思議にも一つの島の岸邊に打上げられて萬死を免れるものがある。それが人生なんだ。

正直に、そして働いても／＼彼は常に貧乏であり、虐げられてあり、輕蔑される。反對に邪惡で、

傲慢で、そして神を冒瀆するものが却て地位を得、財産を蓄へ、權力を把握してゐる。これが世の中なのだ。

◆  
生さんがために彼等は生活し、生活するために彼等は労働し、労働しなければならぬが故に彼等は生きなければならぬのだ。

◆  
太陽。——生活。——争闘。——血。血。血。眞赤く血の様に燃え續ける太陽、それは永遠に我々の生活のシムボルだ。

◆  
我々が直感から受ける其の次の思惟は多く周圍の環境に支配される。我々が田園にゐるとある山陰から、或は廣々とした野原の向ふからユツタリと立上る煙を見ると、如何にも自分が平和の世界に在ることを思ひ、ムク／＼とドス黒い色をして都會の工場の煙突から吐き出される煙は何となく生活——苦、争闘を連想せしめる。



畢竟苦難と、満さるゝところなき欲望と、不可解な疑問の限りない連鎖——だがお前はそれに對して感謝と喜悅とを持たなければならぬ。何故なれば、お前は生きてゐるから、生きてお前の體に赤い温い血が流動してゐればこそ、苦難も感ずれば欲望や疑問も湧いてくるのだ。

◆  
インスピレーションを待つ前に先づバースピレーションを求めよ。斯くしてカーネギーは財界の覇權を握り、ムツソリニは今や世界に君臨する英雄であり、ボンドフィールドはよく大英帝國の大臣とはなり得た。

◆  
例へそれが小さな結果ではあらうとも、何事か成し得たと言ふその愉快さ。

◆  
人生の眞の姿は寧ろ失意の時に見出だされる。懊惱を歡喜にかへ、涙の中に光明を認め得るものこそ幸にもまた偉大なるかな。

◆  
最もよく『不幸』を知るものは、最も不幸な者であると同時に、また最も幸福なものもそれを知つ

てゐる。たとへば彼のソロモンとヨブの語らひを見よ、それは實際と空幻の異りがあるのみだ。



我々是我々の過去に於て日蓮聖人のあることを誇りとする。だから自分は我々の歴史に一人のフォードと、一人のカーネギーとを持たないのを決して耻ぢはしない。然し希ふことなら今の思想界にガズナーの熱と、今の教育界にペスタロッチの眞劍を持つものが一人欲しい。



經濟學、社會學、自然科學、等々……そして宗教もついに宗教學とはなり終つた。宗教學は宗教ではない、其處には最早宗教としての生命は存在しない、我々が求めやうとするところのものは宗教であつて宗教學ではない。



# 日記中より

柳 井 榮

△月△日、お前は出駄羅目なあやふやな不真面目な、こんなだらしない勉強の仕方を幾日續けやうとする氣なのか？お前はお前の机の上に置いてある、お前自身が心に誓つて作つた日課表を見て恥かしいとは思はぬのか、自責の念に堪へないのかよく考へて見ろ、故郷ではお前の兩親達が土と汗とにまみれながら眞黒になつて、お前の成功を祈りつゝ營々として働いて居るではないか。お前は日々學校に通つて安らかに勉強の出来る幸福な身ではないか、然るにお前は日々不規律なだらしない勉強をするとは何事だ、お前は普通一般の人々とは責任が異ふ、お前は故郷を發つ時重大な責任を果すことを父や母に、更らにふる里の山川草木に誓つた事を忘れはすまい、精進せよ。そして努力せよと。僕は叱られる様に覺へた。

△月△日、十一時を過ぎた頃師範の△△上人から手紙が届いた、文面の一節にかうした文句があつ

た『帝大に於て龍尾たらん人よりは、祖山に於て牛頭たるその狭きやうなるつまらなげな牛頭は、即ち世界の首にて候、(中略)只だ只だ眞面目に進まれ度候、眞面目の前には敵も味方も無條件にて平伏可致候。泰山を抱きて北海を越へんよりは祖山に抱かれて名をなして、關門を越へられ度く云云。』僕は實に感佩に堪えなかつた。

△月△日、八時頃だつた、僕が佛敎讀本を讀んで居たら、隣室の松井君が自分の日記帳を持つて僕の部屋に入つて來た、そうして日記の二、三を讀んで聞かした。松井君の言ふには日記帳に三年間一日も缺かさずに日記する者は、必らず社會的に、爲すある人である。僕の日記は常に斷續だ。松井君に僕が來年の正月から一日も缺さずに記して見せるよと言つたら、馬鹿言つちやあ困まるよ、今日の日記が満足に出來ない者が來年からなんて、それはとても駄目だと松井君が笑つた。

△月△日、世の中が進むに従つて種々奇怪な、然かも複雑極まる事件が續出し新聞を出駄羅目に賑やかす。今日の新聞に曰く、最高學府たる帝大の學生があげれる。早稻田の右傾學生が横行して校庭に血の雨が降る。政治家があげれる。不良の生徒をなぐつて訓導が傷害罪で遂に檢事局に送らる等々これ所謂思想惡化の一現象とも云ふべきものだ。

# 野中春秋

遠藤霞外

千萬の思ひをこめて友がりへおくるもたのし歌の數々  
示さるゝまゝに衣の裏見れば實の玉のかゝるなりけり  
百年を胡蝶となりて花の上に遊ぶ聖の夢のあとかな  
ほがらく晴れてうつくし野も山もいとどのとき春にもあるかな  
待つ人のありと知らずや時鳥はやく來て鳴け山の下庵  
わか庵はしげる若葉につゝまれて木蔭涼しく風をよくなり  
大寺の門までつゞく並木道たどる夕ぞ涼しかりける  
訪ふ人のなき山里も秋風は木の葉さそひておとつれにけり  
山里の庵はいとゞ寒くして雪かとまがふ庭の霜かな  
流されし昔の聖思ふかなはなれ小島を船路より見て

# 短歌

小島一誠

## 身延雜感

山を見て山と思ふはこの山の姿雄々しき朝ぼらけかな  
變り行く峯の木の色見る度に我が胸の上も筆に染む哉  
まませし庵の跡を訪ふ度に胸うるほさる我が祖師のかげ  
濁れどもしぶきは白くたばしりて心しのぶる此の川の水

## 七面山にて

我も亦雲の上にて眺むれば富士の高峯もわが友のごと

## 寄宿舎にて

一室をわが住む家と思ひなば淋しき内に戀しさわきぬ  
室毎に茶など沸して招き合ふあたりゆかしき初秋の午后

# 秋

秋になつた。空は青い。水も青い。

木も草も青い。小春だからだ。

×

風も面白い。雲も面白い。

干草も情が見える。秋だからだ。

×

思索に耽ける時だ。歌の世界だ。

繪のかける時だ。静寂の境だ。

×

なにか努力せねばならぬ。真翊に。

不滅の生命を残さねばならぬ。眞實に。

秋

岳  
南  
生

# 短歌

石井緑線

## 信濃の高原に遊びて

白樺をシオリにせんと妹等は手剥ぎては見ていじらしくも捨つ。  
みすゞ路の高き賤家の庭の端に入陽に淡く月見草みゆ。  
山里に尾花亂れていつしかに秋訪れし寥しさを知る。

## 夕暮の鐘を聞きて

はるけくの故郷憶ふ窓の邊に一入耐へぬ暮れ方の鐘。  
暮れ方を靜かに告ぐる梵鐘にさびしからずやと友もさゝやく。

# 小鳥

中澤要實

夕べねぐらに歸り行く

小鳥の姿頼母しき

終日空をかけ廻り

あるは地上に蟲をはみ。

×

つかれし身をばいと軽く

やさし翼に身を託し

明日の陽の出を約しつゝ

あかねの空に飛んで行く。

×

汝が身はまこと幸多し

夕は暖爐の母の胸

朝に澄める青空を

慈愛の光に包まれて。

×

思へば悲し人の世ぞ

天地の慈愛知らずして

破壊、没落、暗黒に

浮きつ沈みつ流れゆく。

# 人生巡禮

近藤惠聰

屈從と妥協の中に

これが現實の姿であり

凡ての人間が生きて行く

社會相なのだ

×

運命に反抗してゆくものは

けれど強く生きて行くものには

叛逆兒の名を以て葬られる

人生の悩みがある

×

悩みを悩みとして体験する處に

現實から理想へ

人間としての價值が生れるのだ

生命の血潮はとめどもなく高調してゆく

×

唯もが理想の大を知り

けれど弱い人間達は

涅槃の境界を慕ふのだ

罪の地上を永遠に遍歴する



雜

報

# 祖山興學變遷略圖

(自西谷善學院開創  
至現學院昭和四年三七四年間)

西谷善學院開創

〔祖山十四世日鑑師代  
弘治二年聖滅二六五年〕

西谷檀林興起

〔二十一世日遠師代  
慶長九年規模益大シ  
テ第一化主トナル〕

(自西谷善學院開創  
至全檀林廢止三一九年間)

西谷檀林廢止

〔七十三世日薩師代  
明治七年十一月維新  
變革山内改正ニ付キ〕

學室移轉

〔全八年本山大火ノ際全  
部本坊ノ堂舎ニ充テ僅  
カニ學室ヲ鶯谷ニ移ス〕

中教院(宗立)

〔七十四世日鑑師代  
全八年六月本宗大會ニ  
ヨリ第三區中教院ヲ設  
立サル此ノ間凡八年〕

大檀支林(宗立)

〔日鑑師代 全十七年從來  
ノ中教院ヲ改稱ス、全二  
十三年甲府ニ併セラル、  
ニ至ル此ノ間凡六年〕

宗義専門學校

〔七十五世日修師代  
大檀支林ノ甲府ニ移轉  
後沙彌生ノタメニ教授  
ス、全二十八年ニ至ル  
此ノ間五年〕

小檀林

七十七世日嚴師代 全  
二十八年六月宗會ニヨ  
リ宗學林ヲ改稱シテ初  
等生ノ爲メニ教授ス  
三十六年ニ至ル八年間

小學林

七十八世日良師代  
全三十五年宗門教育機  
關統一ノ爲メ從來ノ小  
檀林全廢ニ付キ改稱ス  
合併ニ至ル七年間

祖山大學院創立

修師ノ遺志ヲ繼ギ七十  
六世日阜師全二十六  
年一月十七日創立宗内ノ  
英才ヲ集メ専ラ高等ナ  
ル教授ヲ開ク全三十六  
年學制ヲ改メテ本科、  
豫科トナス

合併 {七十九世日慈師代  
全四十五年}

祖山學院 現時

(沿革要)

二者ヲ合シ從來ノ大學院ノ大ノ字ヲ削リ扁シテ祖山學院  
トナス全四十五年制ヲ改メテ中、高、二科ニ分チ大正三年  
専門學校令ニ準據シテ、文部大臣ニ提出其ノ認可ヲ得、  
大正六年青山某ノ寄進ニヨリ校舍ヲ現地ニ新築シ今ニ至  
ル是レ西谷善學院開創ヨリ實ニ、三十四年經過セリ。

# 本學々報

本學院生徒ハ夙ニ宗祖棲神ノ靈窟ニ學ブノ宿福ヲ自覺シ止暇斷眠行學ニ道ノ口備ヲ期シツ、左記教科目ニ依リ修學シテ居ル

## 教課目表

### 高等部

科	宗	台	餘	佛	宗	東	西	教育學、社會學	法	卒	合	科
乘	乘	乘	乘	教	教	哲	哲	學	制、經濟學	業論	計文	外
報恩鈔	宗義鈔	集法華科註	各宗大意	印教史	印教史	論理學	論理學	經濟學	雄辯會	視察見學會		
二	二	四	二	二	二	二	二	二	三〇			
開目鈔	全全鈔	全全鈔	全全鈔	支那學	支那學	倫理學	倫理學	教育學				
二	二	二	二	二	二	二	二	二	三〇			
本尊鈔	全全鈔	全全鈔	全全鈔	台教史	宗教史	認識論	認識論	社會學				
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二六			
每週時數	每週時數	每週時數	每週時數	每週時數	每週時數	每週時數	每週時數	每週時數	每週時數	每週時數	每週時數	每週時數

每週又ハ便宜ノ時ヲ利用シテ隨時ニ之レヲ行フ

中 等 部

科 目	宗 乘	餘 乘	修 身	國 語	漢 文	英 語	數 學	歷 史	地 理	博 物	圖 畫	法 制 經 濟	合 體 計 採
第一學年	祖 傳	佛 文 集 傳	修 身	講 讀 文 法 文 字	漢 文 讀 法 文 字	文 法 文 字	算 術	日 本 本 術	日 本 本 物	植 物 本 物	自 在 畫	體 採	體 採
時每 數週	三	一二	三	一一	三	四	三	一一	二	二	一	三	三
第二學年	宗 學 綱 要	佛 教 觀 綱 要	全	全	全	全	代 數	全	外 國 數	動 物	全	全	全
時每 數週	二二	一二	三	一一	三	二	三	二	二	二	一	三	三
第三學年	題 目 鈔	弘 經 要 義	全	全	全	全	代 數 幾 何	全	東 洋	生 理	全	全	全
時每 數週	二二	一二	二	一一	三	一	三	二	二	二	一	三	三
第四學年	安 國 論	本 尊 畧 辨	全	全	全	全	全	全	西 洋	地 理 文 學	物 理 化 學	用 器 畫	全
時每 數週	三二	一三	二	一一	三	一	三	一	二	二	一	二	三
第五學年	撰 時 鈔	歸 宗 書 綱 要	全	全	全	全	全	全	西 洋 日 本	博 物 通 論	法 制 經 濟	全	全
時每 數週	二四二	二二三	二	一一	三	三	三	三	二	二	二	三	三〇

## 校友會通信

花の朝、月の夕忘れ難きは我が母校の事であり、共に巢立つた校友の事である。年を経るに従つて、懐しさを増すは若き日の思出である、大檀林が閉鎖され、小檀林と併合し、祖山學院の名の下に復活してから已に廿年に垂んとしてゐる。烏智良上人の牡丹餅の講義、納骨堂、釋迦堂、扱ては鶯谷寮の一個に於いて、關本恩師、龜口、遠藤、吉田等々の諸先生の講義を聞き、輪講に冷汗を覺へたのも、遂昨日の如くに思つてゐる間に、一昔前の思出となつてしまつた。富木教頭の温顔世を去つて數年になる。

此間、故武田宣明師の振はれた祖山學院の門標を見返りつゝ、巢立つて行つた我等の校友の胸に通ふものの中靈山身延に於ける學窓生活より懐しきものはあるまい。學窓を離れて、深刻なる社會苦に遭遇せる時思い出づるは校友の動靜である。

此の校友の動靜を互に知り合ひ、母校を中心として結束し、祖山教學の隆盛を期し、相互協力の實を期すべく生れ出た者が、我が祖山學院校友會である。

泉義敬君在山當時發企發會し、現在學院に松木、結城、野崎、赤松あり、本山に望月、小林、内野あり、支院の樋口、遠藤、芦川等と相議し、會の基礎確立に努力してゐる。更に校友は、滿州、樺太、朝鮮、上海、北海道等を初め、全國に散在して畢

生の活動を續けてゐる。近く團體を引卒して來延せるものに、靜岡縣の松下貞雄君あり、山梨の矢崎顯靜君がある。靜岡の望月宗康君も十月二日布教講習會の爲に來山した。更に最近左記兩君が轉住普山式を擧げた。

川口智隨君 熊本縣川尻町法宣寺へ

泉 義敬君 長野縣高遠町在蓮華寺へ

尙本年春巢立つた校友中、吉川啓善君は大阪の妙顯寺別院に、遠藤本勵君は會津若松市大法寺に、塩島鎮浩君は札幌經王寺に、渡邊正教君は福岡市の師房に、山脇麗剛君は長崎の檀林に各活動を續けてゐる。是等校友が、棲神寶窟に會して懷舊談に花を咲かす時が何れは來るであらう事を期待して止まない。

此の稿を書き終りし、十月廿四日校友井上龍將、渡邊泰深兩兄は九州より、長谷川泰鑑君は吳より、三人相携へて登山、學校を參觀して、母校の進運を喜びつゝ、中山入行の爲東上した事を誌して擱筆する。

(松木愚堂記)

## 本學寄宿舎創設報告

朝に思親閣の靈峰を仰では聖徳の偉大を偲び、自然に口づさむもの、夫は抑も何か、開目鈔の一節なる『孝とは高なり天高けれども孝よりは高からず云々』の文。夕に御草庵の深裏より流れ来る神水に滴つては、乃往『露深き草を分けて深谷に下りて芹をつみ、山河の流れも早き岩瀬に菜をすゝぎ、袂しほれて干わぶる云々』(身延山御書)の御聖訓に袖をしぼり、常に法悦に浴し報恩に送る日の早や暮に數十日。『同じ曉季の世に生れしも師に逢はず、』と草山の聖元政が嘆ぜし詩を思ひ出し、今更本化の上首に面奉の契はざりし自が罪業を省みると同時に、大聖の御膝下に在る我等同胞の未だ過去善業の絶えざる爲か。と又喜悅に堪えぬ。同じ思ひの吾等同胞三十三名は西溪の昔ながらの清流に面して建てられた寄宿舎に此の九月一日より自治と言ふモットーの許に大サークルを造り、吾祖の『行學二道を勵み候べし行學絶えなば佛法はあるべからず云々』(諸法實相抄)を遵奉し専念に其の行に、其の學に精進しつゝあり。

我等舎生は舎監に本院特命の學院教授丸山顛孝師全松田壽孝氏の二名を戴き、學生中よりは更に本院任命の許に舎長吉田孝秀君、副舎長水川雅門君の兩君を其主席として、三十三名の學生は舎則及細則に違反なく今日に及ぶ。舎の細則中毎日實行せるは起床午前四時四十五分、朝勤同六時(勤行後舎監に朝の挨拶)

朝食同七時、靜肅時間午前九時より同十一時迄、正午晝食午後二時より同四時迄靜肅時間、同五時夕食、同七時より九時迄靜肅時間九時(舎監に夜の挨拶)同十時睡眠とす。學生室は九室あり、各室に室長一名づゝ置き相互の融和を計る。通常八疊の間に三名平均とし、外に舎監室一棟、炊事夫室一棟、而して食堂一棟あり。

創立已來幾干もならざる爲、浴場及び佛間等諸機關の未だ調はずりし事は殘念となす所なるも、近々舎生の努力と本院の援助に依りて、逐次改良に改良を加へつゝあれば、不日完備する魄を見ん。殊に熱心なる信徒の内に於ては最近舎へ御援助下されし篤志の人を見る。

最初入舎せし吾等は眞劍なる態度を持つて、而も凡ゆる犠牲を拂ひつゝ來りしも、今後舎の前途の爲一名の墮落者も無く異体同心して進展を計らん事を舎生一同と共に誓はん。

現在の寄宿舎を見るに至る迄には其間先輩諸兄等幾多の人々の御後援は言を待たざるも、就中現身延山々務監督冷泉要淳僧正の絶大なる御盡力に依り及び丸山顛孝教授の自己を忘れて御奮闘の賜にして生等の深く感謝する所なり。

宗祖の御聖徳の日に増して輝くご同時に、吾等がさゝやかなる寄宿舎も日と共に隆盛となり後日宗門を背つて立つべき若黨の、舎内より二陣三陣引續き輩出せん事を希望して脱稿す。

# 同窓會々報

## 庶務部

不肖私等が昭和四年度の幹事として選舉に當選したのは四月廿五日である。即ち其の氏名は

庶務部 堀内義光

會計部 瀧川顯照

運動部 大野學正

辯論部 矢谷智秀

文學部 岡本前能

購買部 松永良詮

購買部助手 紀本孝美

の六名であつて直ちに本年度豫算案の編成に着手し、越えて五月二日午前八時より本學院階上に第十八回定期同窓會大會は開催され、豫算案の承認を了し、正式に就任の挨拶を述べ茲に引繼を了した。此の間僅かに二時間餘例年に無い議事の進行振であつた。

文學部幹事岡本前能君は四月下旬即ち幹事當選の頃より盲腸を患ひ、大會當日も缺席し其の後大宮病院に入院し、五月下旬退院する事を得たが尙ほ療養の爲め郷里に歸省する事となり辭

任を申出でられた。依つて次點者たる近藤惠聰君を以つて補充したのであつた。

購買部幹事松永良詮君も就任の頃より病魔の襲ふ處となり、其后全快軍務に召集され、當初より専ら助手紀本孝美君に依つて處理されて居たが、貸付金額の整理等その功績見るべきものが多い。

六月に入り當學院の古き出身の大先輩たる清水龍山先生は東京大崎町立正大學々長に就任せられ、宗祖様神の法窟たる吾が身延に登山、宗祖の鴻恩を謝し學長就任の旨を報告し、終つて後輩たる吾々に訓話激勵せらるゝ處があつた。吾々の修養に資する點多々有りし事を感謝して止まないものである。吾が學院より斯かる知名の士を出せる事は、古き歴史を有する學院の誇にあらずして何んであらうか。

同月下旬に至り本會各部部长の更迭發表あり、即ち新部長の氏名は

庶務部長 塩田義遜先生

購買部長 中條是明先生

會計部長 永倉唯嘉先生



辯論部長 松木本興先生

文學部長 徳富智徳先生

運動部長 野崎學穩先生

等である。因みに本會々長は學院長杉田日布現下、副會長は教頭高田惠忍先生である。

七月に入り矢張り當學院出身の先輩たる伊藤海開師より活動寫眞を上映して貰ひ度いと交渉ありたるを以て、二日夜身延公會堂に於て映寫す。内容は教育及び宗教映畫にして折柄の暑さにも拘らず階上階下數百名の觀覽者を以つて充たされ、近來稀れの盛觀を呈した。

同十五日例年の如く大阪明淨高等女學校來春卒業の最上級生百數拾名は、教職員引率の許に旅行の途に就き當身延にも參詣された。吾等は大客殿に於て歡迎茶話會を催ほし猶此の機會に於て日蓮主義の一端を御紹介する事を得た事は喜びとする處である。

長い暑中休暇を終つて九月早々吾々は揃ふた。次いで同下旬松永良詮君も軍務を果たして歸られた。

十月五日午後七時より辯論部主催にて第四回雄辯大會を身延公會堂に開き、男女青年團は勿論今年は特に京都光山學院及び兵庫縣下本門法華宗尼ヶ崎學林より辯士を招待し、此等の辯士に依り熱辯火を吐く大獅子吼は試みられた。聽衆無慮六百名極

めて盛大であつた。

同夜尼ヶ崎學林辯論部長は親しく吾々と會談したが青年教家の間に於て、斯かる機會を利用して親睦を圖かり將來吾々の手に依つて分派的觀念を排除し合同の機運を促進せしめ度き旨を述べられたが、私としても極めて意を同じうする處である。將來此の事が合同促進への微縁ともなれば幸甚の至りである。

十月十一日より三日間宗祖入滅報恩會式である。吾が同窓會は十二日夜釋迦堂に於て幻燈布教を爲し、終つて通夜説教に移つた。秋の夜は既に寒かつたにも拘らず熱心なる多くの信者達は最後迄座を離れなかつた。眞に文字通り報恩會である感がした。

行先地撰定難であつた旅行の件り富士五山と決定して漸く愁眉を開くに至つて、十一月四日早朝四十余名の者は鹽田教授引卒、大野運動部幹事諸般の庶務擔任の許に出發、同夜は大宮町に一泊翌日午後歸山した。

一部の者は修學旅行に殘餘の者は同じく十一月四日夜七時から池上學林生徒一行廿三名の歡迎茶話會を大客殿に開いた。近藤幹事の開會の辭、法主現下の御訓辭に次いで當方より武田海正君の元政上人の詩吟、方哲源君の演説あり、池上學林生徒六、七名登壇交々靈山身延の崇嚴は人賞ければ處貴しの習ひ宗社日蓮聖人の人格の輝きの流であるの旨を述べて感銘之れを深う

するものあり、松木辯論部長は教師課及び校友會を代表し、私塾より出で、名をなした明治維新前後の名士の例を擧げて激勵する處あり、池上學林教師濱田師は皆歸妙法の理想に眞しぐらに突進する旨を述べ伊藤海聞師又母校愛より出でて遂ひに宗門愛に論及し異体同心の祖訓に則るべき事を力説したのである。最後に不肖私も日蓮聖人の本覺法門は金剛不壞の法城であり此の法城を共に守るべき人々と親善の契りを結びたる事を欣快とする旨を述べて閉會の辭とした。殘留者一同夜であつたにも拘らず登陸致し大いに席場を賑はし呉れた事は唯に私共幹事の感謝するのみにあらず學林生徒に對して多大の満足を興へし事であらう。

以上に於て大略の報告を卒へた。思ふに吾々が其の任にあらずして其職を汚し、大過無くして今日迄會務を處理する事を得たのは一に會員諸君の一致團結せる御後援に依るものにして深く感謝せざるを得ない。私はしみじみと精神的合作の強みを感じ遙かに毛利元成の臨終に際して十矢を束ねて容易に折れざる事を試めし、多くの子等に協力して國を守るべき様訓へた故事を思浮べて愉快に堪えない。此の上とも御後援を御願ひして止まぬ次第である。

終りに外部より本會を御援助下されし方々の御芳名を列舉すれば左の如くである。

一金貳拾圓也	清水龍山殿
一金五圓也	貝山殿
一金五圓也	中島なか殿
一金五圓也	遠藤曉諦殿
一金參圓也	二宮龍嚴殿
一金貳圓也	三國義圓殿
一金壹圓也	小林貞宣殿
一金壹圓也	某殿

尙ほ十月五日身延公會堂に於ける雄辯大會の他校辯士二名を宿泊下されし小松海淨師及十一月四日池上學林生徒出迎への松木辯論部長と私に晝餐其他種々御便宜下されし下山上澤寺小松けい殿に對し併せて謝意を表す。

(堀内生)

## 辯論部

『百萬の大軍恐るゝに足らず、三寸の舌端や眞に恐るべし』とは彼のマケドニアの王ヒリッパが女神デモステネスに言つた言葉である。時間的に三千年、空間的に全世界を私達が見視するならば、其處には如何に雄辯が必要であり、又偉大な力を持つてゐるかを知らざらう。

身に寸鐵をも、たずさへずして、一語よく平和を齎しまた諍鬪を巻き起すものは實に雄辯であらねばならない。

教界は敢て諸君が能辯となる事を望んでゐる。然し法悦に親む人々から其の喜びを分ち與えられん事を眞剣に欲求してゐる。

吾が辯論部一百五十の人達よ、彼のデモステネスが一身を屠してアテネの都を救はんとした如く、信仰と慈愛と正義とを以て聖日蓮の魂に、そして乾きに乾ける草の如き心を持つ人々にそれらの法雨を與えようではないか。斯くするところ自らなる雄辯は生れる。今毎週一回の辯論會及び山内布教の外に五月以來本部が活躍した略報を記するに……

五月三日より四日 甲府市太田町公園に於て松木部長引卒のもとに左の諸氏を派遣し、交々街頭に立つて大衆に叫びかく  
武田海正君、近藤惠聰君、方哲源君。

五月六日より八日に至る釋尊涅槃會に際し幻燈及び道路布教

をなす。

谷川寛徳、最上英俊、三木淨遠、矢谷智秀、田代榮正、近藤惠聰、灘上惠教の諸氏及び松木部長（已上幻燈解說）

矢谷智秀、武田海正、近藤惠聰、灘上惠教の諸氏及び松木部長（已上道路布教）

六月八日 午後一時より本學講堂に於て一學期各級選出雄辯大會を開催す、當日のプログラム左の如し。

開會の辭

矢谷幹事

伸びんとする力

中一 佐々尾善智君

時代は戻る

中二 小浦孝勝君

未定

中三 白井玄法君

健全は偉傑のマザリなり中四 落井良昭君

小より大に至れ 中五 石黒茂一君

社會改造の起點 高一 福山智學君

思想國難の秋 高二 堀内義光君

未定 高三 灘上惠教君

挨拶 松木部長

閉會の辭 堀内幹事

六月七日、立正大學主催全國各大學高等專門學校雄辯大會に

武田海正君を派遣す。

六月十六、七の兩日宗祖御入山會を期し再び街頭に獅子吼す、

布教に従事の人々左の如し。

矢谷智秀、三木淨達、近藤惠聰、武田海正、堀内義光の諸氏及び松木部長。

六月廿日、上の山火光坊三光天子の祭典に際し乞ひに依り左の諸氏出張布教す。

矢谷智秀君、武田海正君、石黒湛全君。

七月卅日、覺林坊行學朝師の入寂日に左の諸氏布教し、時深更に及ぶ

矢谷智秀、近藤惠聰、武田海正、石井要宏の諸氏、及び結城瑞光教授。

十月一日、宗務院特派布教師平井學俊師の記念講演を乞ふ。

十月二、三の兩日、宗祖六百五十遠忌宣傳部並に本部主催にて柴田顛秀師を招聘し布教講習會をなす。

十月五日、午后五時より公會堂に於て、本門法華尼ヶ崎學林、京都光山學院、男女青年團第四回聯合雄辯大會を主催す、聴衆數百盛大なりき、因に當日のプログラム左の如し。

- 一 開會之辭 幹 事 矢谷智秀君
- 一 獨立 本 學 佐々尾善智君
- 一 何を以てか聖賢に酬ゆべき 本 學 小浦孝勝君
- 一 美しき田園は我等の故郷なり 本 學 末吉元敬君
- 一 思想國難の解決? 本 學 瀧川顯照君

- 一 野人の叫び 光山學院 三浦智見君
- 一 眞宗教への憧憬 本 學 岩田曉親君
- 一 オアシスを指す 尼ヶ崎學林池田學進君
- 一 宗教と社會との交渉に就て 本 學 近藤惠聰君
- 一 所感 女子青年 田中とよじ嬢
- 一 勤儉 女子青年 佐野もゝゑ嬢
- 一 直面せる日本を顧て 男子青年 井出逸平君
- 一 現代に生ける婦人として 女子青年 穗坂ちかよ嬢
- 一 現代の風潮と吾人青年の覺悟 男子青年 松田幸一君
- 一 平和の使 本 學 最上英俊君
- 一 芽萌えから成長へ 女子青年 古谷千恵子嬢
- 一 斷呼して權力萬能を排す 尼ヶ崎學林 小林貫翁君
- 一 物質文明に對する宗教道德の簡見 本 學 吉田孝秀君
- 一 現代宗教一斑を論ず 本 學 福澤觀教君
- 一 日蓮主義と村青年 男子青年 穗坂 寬君
- 一 理想への進展 光山學院 岡元鍊清君
- 一 闇暗の十字街頭に立ちて新宗教を求め尼ヶ崎學林 安立清雄君
- 一 久遠のあこがれ 本 學 武田海正君
- 一 宗祖に懐かれて 本 學 灘上惠教君
- 一 挨拶 辯論部長 松木本興先生
- 一 開會之辭 幹 事 堀内義光君

十一月十二日、宗祖鶴林會に際し午后七時より釋迦堂に於て幻燈布教宗祖一代記、及びそれに續いて通夜説教をなす。幻燈解説並に通夜説教の人々左の如し

最上英俊、矢谷智秀、三木淨達、武田海正、近藤惠聰、堀内義光の諸氏及び松木部長（已上解説）

矢谷智秀、福山智學、遠藤是孝、大橋潮育、平野龍亨、近藤惠聰、吉田孝秀、石井要宏、堀内義光、石黒堪全の諸氏。

——（矢谷生記）——

## 運動部

運動!!此の言葉はなんとたく力強い感を與へる、春の若葉萌立つ様な青春の意氣が窺われる。世の向上發展と共に運動は世界的に旺盛になつて來た。而も近時運動熱の旺んな國程先進國なる事實で運動が眞に理解されて來た事であると思ふ。或る人は云ふ、『三寸の舌頭良く大政を左右す』亦或る人は云ふ『住して目を千里の外に走す』大いに然り、文辯能く人心を支配し國の危急存亡を救ふ而し文辯亦肉体を離れては存せず故に其人の功績の大小は總べて身体の健不健に依る事は言を要しない、今や國事多端の時、『健全なる精神は健全なる身体に宿る』千古不磨の金言は愈々其の光輝を新にし來たのである。

此處に於てか眞の寂光土世界の巖山たる靜かな祖山に學ぶ我々も本化別途の大法を學ぶと云ふ事のみを以て足れりとしては居られない、渦巻く社會の人心を觀ては今更に現在將來の多事を思ひて身体の鍛錬に志まずには居られない、斯ふした眞の意味の運動に志す人の逐次にふへて來た事は眞に喜ばしき事である。

吾が運動部は庭球部、劍道部、弓術部の三部より成つてゐる。今左に部分けして簡單に説明をすれば

庭球部 當部は約三、四十名のテニスマンがあり隨分盛大である。從來コートが一個所丈しかないので往々練習者の意に添はぬ事は残念である。が西谷に第二學期より寄宿舎が設立され、寮生の丹精により近々の内にコートも設置さる事である、此の六月十日に下部に於てコート開きに際し、當學院より三組の選手を派遣す。又十月二日身經中學校に於て明治神宮の縣下郡市對抗豫選大會に二組の選手を派遣し、各選手奮闘努力の結果好成绩を以て祖山の面目を拍す、慶した外部の刺激もあるので益々盛大となる。

劍道部 當部は是又四十名の會員を有し一昨年初段の筒井君一級の清瀬君の去るに及んで一時落歎していたが今年新入の大平、藤井の諸君一級に二名、二級に三名、三級に四名、四級に八名、五級に三名、六級に三名、七級に十名、新入者拾四名の部

員を有し春季大會には盛大に行なわれ來學期の寒稽古納會には昇級試合を行ふ積りである、當部に於て最も感謝すべきは當運動部長野崎先生と身延小學校の訓導小野正夫氏の熱心なる御教導である、祖山の劍道は兩先生に依り益々旺盛に成りつゝあるは實に嬉ばしい次第である。

弓術部、當部は僅か十四名の部員に過ぎないが運動場が狭い爲に練習場の造られない事は遺憾である、其の内に良い地所を見付け完全な射的場を作り大いに發展を期そう。

最後に會員諸君『永世の闇を照すてう燈臺守は誰なるぞ』と歌ひ叫ぶ諸君よ眞の意味に於ける運動をして益々發達せしめ以て心身共に壯健を期し此の校歌をして意義あらしめん事を望んで止まぬのである。

——(大野生)——

## 文學部

社會文化の中心を行くものに、筆と舌との二つがある。此の筆舌の向ふ處、其處に嚴正なる社會批判の烽火は掲げられ、よりよき社會の出現を望み得る事が出来る。

近時出版界の洪水期に際して、吾が祖山に於ける唯一の文學的使命を持つものに雜誌『棲神』がある。即ち世の所謂自然主義的文學とその選を異にして、時代救済の前線に立ち惱める社

會大衆をリードするは勿論、内、祖山文學の粹を發揮してゆくものなる事は、今更言をまたないであらふ。

棲神刊行復活第二年に當る本年は、特に祖山に於ける凡有方面を網羅して棲神を洪湖に送りたい念願から、諸先生、並に校友諸氏に御寄稿を忝うし、併せて、各學友會をも列記し、尙本學々報をも發表させて頂いた事を、此上もない喜びとするものである。尙從來棲神の原稿が殆むど反古同様にされ、何等反みられなかつたものを、圖書主事江利山先生、松木、徳富兩先生の指導に依つて九冊に製本し、長く本學圖書館に納める事が出来た。更に近く棲神に干しての、所謂初刊已來の文獻、及寫眞數葉を整理して、同様納める期の早からん事を切望するものである。

吾々は常に世の文學を愛好すると共に、所謂宗門文學の中に三大寶策のある事どもを胸に忘れず、聖祖の行學二道増進の爲めに、止暇斷眠の研究を必要とするものである。

終に際して、校正の不備編輯の不振等を呉々も深謝すると同時に、之が一つのコペルニクスの轉回と爲つて、來る可き年の發展を深く祈ると共に、左記書籍、雜誌を御寄贈下されし諸氏に厚く感謝する次第である。

大阪佛敎

岡島 伊 八 殿

社會事業研究

全

大阪毎日新聞

全

天業民報  
身延教報  
立正  
覺醒  
傳導  
閑の光  
信友月報  
あさひ  
泰仕  
斯民  
教報  
宗報  
明治  
人道  
瑞雲  
慈善新報  
六大新報  
弘濟會報

以上

天業民報社殿  
身延教報社殿  
高松立正社殿  
大阪覺醒社殿  
大阪傳導社殿  
京城閑教社殿  
名古屋信友社殿  
大阪あさひ社殿  
佛教奉仕社殿  
中央報德會殿  
教發行所殿  
宗務院殿  
天業民報社殿  
人道社殿  
村雲婦人會本部殿  
慈善新報社殿  
六大新報社殿  
弘濟會報社殿  
(近藤生)

# 學友會々報

## 九州學友會

宗祖御隠棲の當初より六百五十年妙法の聲絶ゆる時なく、吹く風流るゝ水の音までも妙法の五字を唱ふる靈山が峯、祖山の學園に籍を置く二百有餘の健兒、遠く恩師慈父の膝下を離れ北は樺太、北海道、南は朝鮮九州と、負笈せる者も大半に及ぶ。茲に吾が九州學友會は異体同心の聖訓に基き會員の親睦と相互扶助の精神の下に生れ出たり。

吾が學友會は大正六年四月舊學友會の會則を改正し創立せられたり。爾後は會員努力により増々隆盛となり、大正九年には會則を改正せしが、更に時勢の變遷と共にその趨勢に測らんとて復昭和三年十月會則の改正を行へり。實に創立已來十有余年益々隆昌を見るに至れり。

左に本會の會則の重なるものを舉ぐれば

第二條 九州男子ノ意氣ヲ發輝シ協同一致事ニ當ルヲ目的トス  
 第五條 會務發展並ニ布教傳道ノ法器ヲ育成スル目的ヲ以テ左

ノ三部ヲ置ク

一、財務部 一、文學部 一、講演部

各部細則ハ別ニ之ヲ定ム

第六條 會員ニシテ不正行爲アル時ハ相互間ニ於テ誠告シ体面

ヲ汚ス時ハ除名處分ニ附ス

本則第五條ニ依リ各部細則ヲ定ム

一、財務部

第二條 乃至第二條ニシテ第二條又五項ニ分チ會計支出收入

ヲ整理監督セリ。

二、文學部

第一條 本部ハ福岡市東公園發行妙道誌上へ『延便り』ヲ同

誌編輯部宛毎月二十七日迄原稿ヲ送付スベキ事

第二條 本部ハ幹事五名ヲ置キ時機ニ臨ミ名士ノ講演ヲ速記シ

投稿スル事

妙道通信員 二名

名士講演速記員 三名

三、講演部

第一條 本部ハ幹事三名ヲ置ク

毎月二回説教、講演會ヲ交互ニ開催シ大ニ鍊磨ヲ行

フモノトス、

第二條 本部ハ毎年適宜ト認ムル時ハ夏期布教ヲ行フ事、

已上本會の會の重なる部分である。(福山生)



## 北陸學友會

本校中、笹峯、關西、九州等、幾多の會在り。夫れ等の會は其の範圍と人員の多きとに於て遙に我が會を凌ぐ。然と雖も我が北陸學友會の有する幾多の特色は他會のひとしく敬慕すべきものたるを信ず。北陸學友會!! 其れは會員相互の扶助信睦であり同郷人の合理的融和の集合機關であり、同時に北陸地方即ち新潟、富山、石川、福井、滋賀の五縣下の寺院全部を推載し、是れと連絡を取りて、將來宗教家としての一戰具たる、辯論の實地練磨をなし、是れ等禮信徒の來詣の便宜を計る等。以て吾が學友會の使命、面目とせり。然り然して吾が學友會は大正九年の創立にして、日未だ淺し、然れど已來十數名の卒業生を、相繼いで出す、是れ本學友會の歴史なり。蓋し其等諸先輩良く吾人の任務を全うしたりと言つべし。今や會員十五名中、責任者として記録、布教、會計の三部を設け、先輩諸師の意思を繼ぐ。愚昧淺薄も顧慮せず。吾等責任者は此の双肩に負ふ。本會の前途に、發展と幸福との彌益々盛んなるを祈るのみ。 完

『岩田記』

## 關西學友會報

『異体同心なれば萬事を成じ、同体異心なれば諸事契ふ事なし。云々』常に拜讀する聖祖の御遺文、而もそれが我々の身心に語り盡せむ教訓を培はしめ自づと胸禁をして正しくせしめる

事は、著婆が妙藥に接せし人と同じく、不知の間に殆んど自然に起る瞬間の動作であらう。

尊いみ佛の永久にいます國大竺の靈鷲山を初め、震旦に於ける天台山、さては日域の比叡山、の如き名山は是等の名山に尙勝れても劣るまじと本化の御稱讃遊ばされた、我が身延山。吹く風流るゝ水の音迄もの悉くが、劫初甚深の妙法を唱へざると言事なき聖衆に、吾こそ如意寶珠を授り本佛の法悦に滴らんと聚ひ來る者本化の正嫡遊いて茲に六百數十年已降幾人?。而も是等慕聖學徒の爲に建設された母校祖山學院は、過去三百數十年に至る可成り古き歴史を有する學院である。從東、從西、從南、從北、負笈の徒は、各自祖訓の行學二道を勵み八星霜を聞いたる後、弘法廣宣の一助として郷關に勇猛精進する曉を鑑み、近隣合同の學友會なるものを組織して相互扶助の觀念を培養する事に専念である。就中我等が親しむ學友會なるものは京洛を中心とする關西で、今試に其關西學友會範圍を示せば近畿、中國、四國及び中部の一部に迄侵入した所謂大學友會である。創立已來日尙淺く僅か七ヶ年に過ぎないが、然し熱心情との結合である代々の幹事及び會員の協力は今日漸く會をして新運の曙光を見るに至つた事を、會員の一人として喜ぶものである。

我等が會の内容は第十條よりなる會員規約並に細則第四項とを合せ成立せるもので、其一端を述べば規約第五條に依て關西出身有徳の師を顧問に推戴、及び第四條會長一名、幹事三名を

置き諸班の事業を遂行せしむ、且又每學期一回已上の會合を開く等に依り成立せるものである。(但し規約及び細則は多少變更を免れず)

大正十二年六月三日に會組織の會合、當時の發起者は中等部の中堅、重松學壽君、山口龍明君、吉川啓善君等、我等が先輩は幾多の涙ぐましき難關を斥け奮闘の結果茲に大正十二年十月廿九日顧問に現武井房住職、當時七面山別頭小松海淨師を仰ぎ、同師の熱心な御同情よりなる御援助を待つて、會長に岡觀修君、副會長に野崎學穩君、幹事に山口龍明君を選び會場武井房にして茲に漸く其第一聲を擧げた、當時會員は約廿名足らずであつたが現今是れが殆ど倍して卅五名に滿々とする會員を有し、各學友會中に名實共遜色無きに至つた前提をなしたものである。

大正十五年十月廿九日には關西學友會事業として東谷に淵獄寮を創設し學生の寄宿に充てた、此の事業は昭和二年十月迄繼續したが二、三の事情の爲武井房小松顧問へ返済した、然し當時の淵獄寮は現在に至るも尙數名の學生を收容せる事は、會の興つて力ありと云ふても過言で無からう。昭和二年五月卅日には關西學友會夏季布教の件を決議し直ちに同年度より辯士三名を派遣し實行した。只惜むらくは會基金僅少の爲充分なる應接の出來ざりし事を。又大阪明淨高等女學校の毎夏參詣旅行には會の許す限り歡迎している。

自分は希望として愛する學友會が最も眞劍味のある事業とし

て、そして又期待する大發展其等總てのキヤステンダ、ポर्टを握る會員諸子よ、私は此の誠意と熱情とに燃ゆる諸子を心から歡迎し一層の活躍を望むものである。晩近學友會卒業先輩者と提携薄き爲地方との聯絡が次第に疎隔となる事を痛事とするが、是は一般に見做れる弊害であるから早晩改良される事を信じて疑はない。

(吉田生)

## 東北學友會

東北は由來東漸佛教をして本化西漸佛教たらしめ閭浮統一の大理想を宣し玉ふ蓮祖の錫跡こそなけれ、永仁三年六老僧の俊傑蓮華阿耨梨日持上人海外布教の途上草茅を開拓し本因の下種遊ばされた地、身延山寄進の大檀越として勤王家としての波木井公の子孫永住の地である。斯の如き歴史的背景を有する東北は爾來益々妙教流布の機運に向ひ今や求道者研鑽の學徒漸く靈地身延の學院へ遙々負笈する者年々その數を加へ茲に郷友相會して談合する事屢であつた。會の搖籃時代は暫くおき來延する學生増加し會合の數も繁くなり自然に團體組織の必要を感じこゝに學院教授猪口海淨師、宗祖報恩の爲鏡岡坊に來住せる南部男爵を顧問として大正十三年春學生加藤鎮明君佐藤海澄君等の尽力の下に東北學友會は生れたのである。當時會員は十數名であつた。間もなく江利山義顯師が學院教授となられたので會の指導を懇願した。これより會の隆盛見るべきものがあつた。

會則等の設はないが異体同心の祖訓を奉戴して信仰行學を勵み他日東北の天地に妙法廣布の花を咲かさんものと開會の度毎研究發表辯舌練磨、或は名士を招待して學術講座を開催し佛事奉仕作業等隨宜之を實行してゐる。これ皆佛祖報恩の一分と心得てゐるので本會員は創立式以來如何なる催しの場合も一人も欠席者がない。現在會員の數は十三名卒業せる者七名轉校者三名である。

因みに本會顧問江利山先生は晩近身延文庫の大整理を遂行せられ今や身延圖書館創立の曙光を見るに至つた。猶傍ら本會の爲に盡力せらるゝ事筆舌には盡し難い。猪口先生はその后群馬縣妙光寺にあつて中等教育に従事して居られる。

南部男爵は岩手縣に日蓮宗教會所を設立して佛道布教の傍ら家寶を護持して居らるゝが、身延に於ては従前通り本會顧問である。

(武田生)

## 鷺峰學友會

吾が鷺峰學友會は初めは甲陽學友會と稱し單に甲陽山梨縣に法籍又は俗籍を有する學徒のみによりて創設維持せられしものにして、漸次發展を來せる結果、大正十四年四月遂に東京、山梨、靜岡、神奈川、長野、千葉、群馬、茨城、埼玉、栃木、の一府九縣の學徒より成る鷺峰學友會を生むに至れり。蓋しこれ聖訓

『日蓮が弟子檀那は此の山を元として參る可し』に範り、またたへぬみ法の鷺の山風を仰慕するより成れるものなり。

されば吾等のモットーとする所は『行學の二道をはげみ候べし、行學絶えなば佛法はあるべからず』の聖訓に在り。

吾等の盟約とする所は『異体同心の聖訓に基き、會員相互の親睦を計り、以て將來布教傳導に貢獻するを以て目的とす』の會則に在り。

我等の擁護する會旗の、金モールにふちどられた緋地に燃ゆるが如き橘紋の縁は聖祖の赤誠と吾等の希望をこそ表徴するに足れり。

斯る意義あり、長き歴史を有する吾が學友會は創立以來幾多の卒業先輩を送りて、何れも宗門に、社會に、目醒ましき貢獻と指導をし或は新開地に雄飛し、或一人は我那最北端樺太の開教地に單身弘法に努めつゝあるは蓋し會の誇とする所なり。

本會は賛助會員、特別會員、正會員より成り、吾が祖山學院教頭高田惠忍師、教務主任荒田義遜師を首め清水支正、丸山顯孝、松木本興、望月舜勝の諸教授、本山役課としては録事望月本良師、渡邊智正師を首め望月本啓、小林貞宣の諸師何れも之が賛助員として後援を忝うし、殊に松木本興、丸山顯孝、望月本啓の諸師顧問として直接御指導を賜はりて現在四十餘名の正會員は將に鷺峰を奠立たんとしつゝあり。其の試練として文學部、辯論部を設けて文書練磨に、說演練磨に、若き意氣は彌か

昇らざるを得ざる状態に在り。毎月廿五日夜身延大善坊功德會の請に應じて往て法筵を張り、世の恵まれざる善男女に心よりの慰安を與へ共に聖祖の

有智無智をきはらず一同に他事を捨て、南無妙法蓮華經と唱ふべし

の信念を培ひつゝあるは他に追従を許さざる意氣に非ずや。

鷲峰、鷲ヶ峯こそ、げに文字通り宗門の否、一閻浮提統一の聖地に非ずや。

此鷲峰に培ひし不撓の信力を以て活社會の陳頭に立つ若人こそ又これ第二の日蓮に非ずやと。

(石井生)

本誌發行費中ニ御援助下サレタル左記ノ方々ニ謝意ヲ表ス

一金拾圓也	學院長 猯下
一金五圓也	冷泉執事長 殿
一金五圓也	中村執事次長 殿
一金拾五圓也	教師 課 殿
一金拾圓也	本山會計課 殿
一金參圓也	藤田惠曉 殿

## 編輯後記

本誌が呱呱の聲をあげてよりこゝに第十五號を出版し得た事を衷心から喜ぶものである。

此の出版に方て高田教頭を初め塩田、永倉、松木、徳富、結城、望月、松田の諸先生が御繁忙中にも拘らず特に御執筆下され、尙ほ前教頭遠藤先生並に深敬病院長綱脇龍妙師、身延文庫主任江利山先生が御寄稿下さつたことに對して厚く謝意を表し、尙ほ卒業生並に學生諸君の後援を感謝する次第である。

最後に來るべき年に於ける祖山論筆文藝の大いなる發展を祈るものである。(近藤記)

昭和四年十二月三日印刷  
昭和四年十二月十日發行

山梨縣南巨摩郡身延村  
編輯人 徳 富 智 徳

山梨縣南巨摩郡身延村  
發行人 近 藤 惠 聰

山梨縣南巨摩郡身延村三七五六番地  
印刷人 池 上 三 郎

山梨縣南巨摩郡身延村三七五六番地  
印刷所 身 延 印 刷 所

山梨縣南巨摩郡身延村

發行所 祖山學院同窓會出版部

電話月延 二番  
三番